

---

# Babyleaf 2nd season

河東悠美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

B a b y l e a f 2 n d s e a s o n

### 【Nコード】

N 9 5 9 1 Z

### 【作者名】

河東悠美

### 【あらすじ】

自サイトにも掲載しています。

&lt;:1&gt;

好きなひとじゃない  
好きなひとにはならない  
好きになっちゃだめ

Nothing great was ever achieve  
d without enthusiasm .

その英文を前に、眼鏡をかけた端正な顔が曇っている。  
彼は真崎英彰という。

里奈と彼の在学している高校で、恐らく一番女の子に騒がれている  
少年だ。

眉目秀麗、成績優秀、ついでにバスケット部でぶいぶいいわせてい  
るときたら、そりゃ、もてるわな。

野々村里奈はそんな彼が唸っている様子を意地悪く眺めながら、忍  
び笑いをもらった。

「秀才誉れ高き真崎くんが、英語が苦手だとはね〜。ファンクラブ  
のみんなが泣くよねー」

眼鏡の奥からむっとした視線が向けられた。

「こんな構文見たことないぞ」

「見たことあるものばかりだったら、受験で苦労しませーん」

「辞書」

「ダメ」

英彰はいよいよ腕を組んで、里奈の書いた英文をにらみつけた。

「enthusiasmがわからん」

「知りたい？ 教えてあげようか？」

「いい、絶対に言うな。withoutで、なしにはってなるんだから、achievedっていうのはachieveだよな……に頭のnothingがかかっているんだから……」

ブツブツいいながら、英彰は里奈の書いた文字の下に訳をつける。

「enthusiasmなしには、偉業は達成されない？」

「惜しい」

「まだ、答えは出てない」

「負けず嫌いだね」

「うるさい」

「nothingはgreatのほうだと思うよ」

「……」

参りましたと英彰がシャープペンシルを放り投げて、頬杖をついた。

「everを忘れてるんだろ？」

「そうそう。熱心さなしに偉業がなしとげられた試しはない」

それを聞いて、英彰はぽかんとした。

「エマソンじゃん」

今度は里奈のほうがぽかんとする番だった。

「誰？ エマソンって？」

時は春休み真っ最中。

用事がなければ街の図書館で午後を過ごすことが里奈の日課になりつつある。

下心もあるにはあって、向学心だけのお話ではないのだが、なによりに家にいると母親がうるさい。

お買い物に行きましょ、親戚のおばさんの家に行きましょ。

普段専業主婦をしている母親は、里奈が家にいるときくらいはきやぴきやぴいいいたらしい。

しかし、里奈もなにかと複雑なお年頃だ。そんな母親が正直煩わしかったりして、学生の葵のご紋を振りかざして外出している。

「図書館にいつてきます」

お昼ご飯を食べてから図書館に行くと、丁度英彰と会うのだ。

待ち合わせたわけでもないのに、こんな風に頭をつき合わせているのが続くと、結構それがあたりまえのような感覚になってきて、自然と一緒に勉強をしている。

3時ごろまで図書館で勉強して、近くのファーストフード店に息抜きにいく。

それもお決まりのコースになってきた。

期間限定で半額のストロベリーシェーキのストローを半分くわえて、里奈は思い出したように尋ねた。

「真崎、いつも午後ここに入るけど、部活は？」

「体育館の使用が、バスケット部は午前中なんだよ」

「ふうん……。折角の休みなのに早起きしてるんだ」

「誰かさんと違うよ。ま、うちは所詮進学校の運動部だからいい加減だよ。俺も含めて練習よりは模擬テスト優先してるし」

「まっすぐ図書館に来るの？」

うん、と英彰は答える。時折髪が生乾きなのは、部活を終えてから学校でシャワーを浴びてくるからなんだ。

なにも入れないコーヒーを傾けながら、英彰はそ知らぬ顔。

まっすぐ彼がここに来る理由を里奈はなんとなくわかってる。里奈がいるからだ。

それについてはいろいろと後ろめたいものがあって、里奈としては困惑するのみなのだが、一ヶ月前の険悪なムードを呼び戻したくないで、あえて黙っている。

一ヶ月前まで、2人は実に微妙な険悪な状態だった。

だから、なおさら気を使う。

「予備校には行かないの？」

「春はパスした。塾に絞った」

涼しい顔でさらりと言う英彰に、里奈は啞然。

「朝早くから部活やって、図書館に来て勉強して、夜は塾？」

「塾は毎日じゃないよ。昼の集中講座。パスしただけ。部活やりたかったから」

「家にいる時間ないじゃない」

英彰は笑って、頷いた。

「俺んちはいつも誰もいないから別にいいんじゃない？」

これから塾だと英彰が時計を見ながら、軽く伸びをする。

里奈は家に帰ればできたてのご飯ができています。

「ねえ、ご飯とかどうしてるの？」

「母親が作っておいてくれたり、外で済ましたり、自分で作ったり」

英彰の両親はフランス料理のレストランを営んでいる。よって、午後から夜中まで家を2人で空けている。

「兄弟とかいればよかったね」

「いらないよそんなの」

眉をひそめながら英彰が言う。

里奈は首をかしげて、そうかなあとつぶやいた。

「あたしも一人っ子だから、おねえちゃんとかおにいちゃんとか欲しかったけどな」

「いらない。煩わしいだけ」

やけにきっぱりと言って、英彰は口を引き結んだ。

「俺、高校卒業したら家を出ようと思ってるし。そのあたりは親も了承してるし。あと少しの辛抱」

辛抱って、なんだろ。

里奈は首を傾げる。

それから英彰が話題をかえてしまったので、里奈も深くは考えなかった。

ファーストフード店を出てすぐにあるブティックのウィンドウに

映る自分の姿を見て、髪形をちよいちよいと手でなおした。

そんな里奈に英彰はとても優しく笑いかける。

「おまえって、ホント女の子だよな」

「え？」

「化粧なんてしてるから学校のやつは今のおまえを見てもわかんないだろうけど、学校でも、ここでも、女の子してるところは同じだよな」

照れる。

そんな優しい眼で、そんな優しいトーンでそんなこと言わないで欲しい。

里奈は思わず首をすくめて、うつむいてしまう。

意外と真崎英彰はストレートなヤツだ。

「ねえねえ、あたしって、女の子してるー？」

ぱかん、と参考書で頭を叩かれた。

いたーい、と頭を押さえる里奈に、叩いた相手はただでさえ細い眼を半分にして、呆れ顔。

「今は数学っつー高尚なもんに取り組んでるんだよ。大昔の偉人達はコイツを踏まえた上で、哲学っつーもんに取り組んだんだぞ。人間の存在価値なんてそれこそ高尚なもんをちまちまと考えてた思想論理のキホンが数学なんだよ。そーゆーもんに取り組んでる時、なにが女の子してるだ、ボケ。この間教えてやったろが」

「なんだっけ？ いたーいっ！」

里奈の頭を再びポカリとやって、天下無敵の家庭教師・都村聡明は風貌に似合わない流暢な発音でそれを口にした。

「Nothing great was ever achieved without enthusiasm。一所懸命にやらね

えと、なーんでも難関突破できねえんだよ。おまえは受験生になつたんだぞ、自覚をしろ。自覚を！」

「ねえねえ、それって、エマソンが言つたんだよね？」

「おお、大当たりだ」

「それくらい知ってるよ」

へへん、と威張って見せたら、敵はこしやくにも。

「フルネーム言ってみな。どこのお国の偉い人が言ってみな」

うっ、と言葉を詰まらせる里奈に、もう一度愛のポカリがやってきた。

「ラルフ・ウォルド・エマーソンっていうんだよ。アメリカの哲学者だよ」

そう言つて、聡明はせせら笑う。

今のところ、彼は里奈の片想いの相手だ。

多少手荒な扱いをされていても、大好きだからホント困る。

「真崎はなんでそんなこと知ってるのよー」

塾から帰つて、家の灯りをつけたのは23時。

真崎家の一室は20階建てマンションの15階にある。

3年前に新築で購入したこの部屋に、家族が揃つて団欒なんてことはめつたにない。

英彰は冷蔵庫を空けて、母親の用意した食事を手にする。ラップをかけたままの皿を電子レンジにいれて、ふと、視線を落とした。

炊飯器の蓋を開いて、英彰は目を据わらせた。

「スイッチ入つてねえじゃん。米のまんまじゃん」

彼の母親は時として、こういう大失敗をやらかす天才だ。



そんなこんなで、ご飯を諦めておかずだけを食べていたら、両親が帰宅した。

「英ちゃん、起きてたの？」

母親はレストランのマダムをしている。

シエフである父親のご機嫌を伺いながら、来客をもてなすプロだ。

花のように微笑む顔は17歳の息子がいるなんて想像できない程の愛らしさ。

「ご飯は？ おかずだけでいいの？」

英彰はこめかみに怒りの文字を浮かべて、低い声で言った。

「炊いた記憶ある？ 今日」

「え？」

母親がオオボケをかましている背後で、父親がまっすぐにバスルームに向かって、シャワーを浴びる物音がしている。

「今日も遅かったの」

「まあ」

「明日も遅いの？」

「明日は塾ないから、早いよ」

そっけなく答えながら、くし切りにしたトマトを口にする息子に、母親はにーんまりと笑った。

その笑みを見て、怪訝そうな顔をする英彰に、彼女は得意げにこんなことを言う。

「12時すぎちゃったから、明日じゃないもん、今日だもん」

うふ、と微笑んで作るえくぼの愛らしさ。

だもんじゃねえよ。

英彰は無言で、再び眼を据わらせる。

こんな母親、どうして、母なんて敬称で呼べるか。

英彰は母親の事をめったに呼ばない。

ねえ、とか、ちょっとで済ませる。

どうしてもと言うときは、名前で呼ぶ。

「紗江子さん」

父親も結婚して20年になるというのにそっぴい呼び方をするから、彼女にはあっているのかもしれない。

ちなみに英彰は母親に似ている。

食事を終えて、部屋に戻ろうとした時、腰にバスタオルを巻いただけでの風呂上りの父親とすれ違った。

彼は機嫌がよい。これからビールを一杯やって、床につくのだろう。英彰は回れ右をしてダイニングに戻る。

案の定冷蔵庫をあけていた父親が、うれしそうに二本ビールの缶を取り出した。

「呑むか、英彰」

「うん」

「おかーさんもいただこうかしら」

「ダメ、紗江子さんは」

父親は母親に対してとても過保護だ。

息子は未成年なのに。

跡をつげと父親は言わないが、ついであくれたらいいなあとは思っているのだろう。

しかし、英彰の頭は理系にできていて、フランス料理を作ることに興味が持てないと言うのが本音だ。

無理につげとは言わないにしても、一人息子のプレッシャーは並々ならぬものがある。大学受験ではさほど両親に期待されていないというのに、がんばってしまうのはそんなしがらみから逃げる手段なのかもしれない。

こんな事を考える時にいつも想像して比べているのは、野々村里奈のこと。

時計を眺めて、深夜であるこの時間に、彼女はなにをしているかを考える。

たぶん、寝ているだろうな。

家族の団欒なんて、あいつの家は5・6時間前にやっているはずだろうから。

図書館で会うだけじゃなくて、本当はどこかに誘いたい。

それができて、万が一頷いてもらえたのなら、部活も塾も予定なんてすべて放棄してしまうのに。

英彰は眼鏡を外して、そっと溜息をつく。

彼のレンズには度が入っていない。

春休みが終わって、訪れた桜の季節。

私立文系志望の里奈と、国立理系志望の英彰は別々のクラスになった。

当然のように顔を合わせることは激減。

3・Aの英彰と3・Dの里奈が顔を会わせるといえば、廊下ですれ違う事くらい。里奈の親友である奈津美は志望が同じこともあり、またも里奈と同じクラスだが英彰と離れた事にかなりがっかりしている。

彼女は英彰の事が好きだからだ。

真崎英彰は実に微妙な存在。

親友の好きな男の子なのに、彼は里奈を好きだと言う。

クラスが離れたのを機会に疎遠になってしまおうかとも考えたけれど、英彰がそれを許さない。

「絶対に疎遠になってなんてやらないからな、覚悟しとけ」

そう言ったからには、やつのことだ、そうならないだろう。

里奈は溜息をつく。

なにかが一番困るって。

そんな真崎英彰がココント憎めなくなってきた、根性良くないけどイヤツだなあなんて思い始めちゃっている事。

廊下で会った時に軽口を叩きあうことが結構楽しかったりするから始末が悪い。

「野々村、またクラス委員だった？」

声をかけてきたのは英彰のほうだった。

2限の後の長めの休憩時間、教室移動をしていたら、反対方向からやってくる真崎英彰さま御一行とすれ違ったのだ。

英彰は学校ではいつも仲間がいて、誰かしらがそばにいる。

クラスの仲間はもちろん、バスケット部の仲間はとくに連帯感が強いのか、去年も昼休みになるとわざわざ他のクラスから英彰のクラスに昼食をとりを集まっていた。

彼が女の子に人気があるという事実はさておき、友達が多いというのはたぶんいい奴なんだと思う。

英彰が足をわざわざ足を止めて見下ろしてくる。

これは目立つ。

英彰だけでも目立つのに、自然とまわりにいた男子生徒も足を止めるから。

奈津美なんかは英彰と遭遇できる機会に、ただ能天気喜んでる。

「英彰、先行ってるぞ」

「おう」

ぞろぞろと足をすすめる友達にあっさりと頷いた後、返事をしない里奈に英彰がもう1度尋ねた。

「副委員長なんだって？」

うっかり里奈は3年生になってもクラス委員になってしまっただけ、またも3-Dの副委員長だ。

「うん。真崎のクラスは誰？」

「まだ決まってるじゃない。誰も受けなくて。担任が頭抱えてるよ」

英彰はエリートが集まるクラスに属していることもあり、今回は役職はパスしたらしい。

「受験で忙しい時にクラスの雑用なんかやってられっかよ」

そんな声が聞えてきそうな雰囲気の中のクラスの責任は持てない。

前にそんなコトをちらりと言っていたが、本当にパスするとは。

「副委員長なんだ」

噛み締めるように英彰が呟く。

嫌な予感がして、里奈は眉を寄せた。

「担任がまた頼んできたら、受けようかな」

なんて、高飛車なことを英彰は呟く。

確かにクラス委員になれば、今よりも遭遇率は高くなる。

奈津美が不思議そうな目で里奈と英彰を見比べる。

居心地が悪くなってきて、里奈は英彰に言った。

「ふーん。授業始まるから。またね、真崎」

そそくさとバイバイしたあとで、里奈はいつも気まずい思いを抱えている。

英彰にも、奈津美にも。

本日は家教の日。

大好きな聡明に会える日なので、里奈は上機嫌である。

先日お小遣いでゲットした新しい口紅をつけてご満悦。

まだ慣れない新生活に感じるストレスを聡明に甘えて発散させようとするので、ついきやびきやびしてしまふ。

そんな里奈の様子をたしなめるように聡明が言う。

「ホラ、今年こそ、真面目にやるぞ。教科書開け」

「ねえねえ、それよりさー、この唇いい色だとおもわなーい？ キスしたくなるンだっぺー どお？」

なんてつい、調子にのって唇突き出してみた。

すると、聡明は苦虫をつぶしたような顔で、一言。

「キスするときは口紅なんてない方がいい」

「え？」

ドキツとした。

キスという言葉で聡明の口から聞いて、里奈は後ろめたさと動揺を感じ始める。

聡明はさらに言葉を重ねた。

「こつちに色移るし、移ってそのまんままでいるのも間抜けだし、でも、ふきやーふいたで睨まれるしよ。オマケにうまくねえし…まあ、好きな相手ならなんでもいいんだろうけどな…好きな相手なら」

好きな相手なら。

聡明の呟きは里奈の胸に静かに刺さってきた。

里奈は聡明の横顔を見つめた。

もしかしたら……？

聡明の表情はなにも伺えないポーカークフェイス。教科書を開きながら、

「……と、いうことで雑談終わり」

と、話を締めくくった。

おかげで、テンションは急降下。

里奈は落ちつかなく視線をさまよわせた。

もしかしたら、わかつてるの？

聡明は2ヶ月くらい前、実験室で火傷を負ってしまい、右手と瞼に包帯をして入院していた。

当然目が見える状態ではなくて、お見舞いにいった里奈は目が見えない彼にキスしてしまった。

それはそれは、大変な自己嫌悪に陥った。

聡明にばれていないことを幸いに立ち直ったといっても過言ではない。

が。  
賢い聡明のこと、もしかしたらわかっているのかもしれない。  
そんな考えに囚われはじめて、里奈はぞくりとする。  
身体と心を硬くしながら、里奈は一刻も早く聡明が立ち去る時間になることを願った。

不安が飽和状態で、里奈はどうにもならない。

聡明が帰宅した後、なんとか気持を落ち着けようとお風呂にはいつたりもしてみたけれど、下手にリラックスしたら涙腺が急激にゆるくなったらしい。

涙がぼろぼろ止まらなくなつて、なんであんなことをしちゃったんだらうと、自分を責めまくる。

恥ずかしい、後ろめたい、キスしたつてことばれてるつてことは、好きだつてこともばれてるはず。

絶対になわなないから、わかつてるから、この気持ちだけは悟られちゃダメなのに。

「死んじやいたい……」

事実でそうすることはありえなくても、気持だけは相当本気で、深刻だ。

過干渉ぎみの母親にばれないように涙を隠しながら、2階の自分の部屋に向い、里奈はいよいよバスタオルで顔を覆う。

机に座つて、里奈は泣きすぎて赤くなつた鼻を押さえながら、頭に思い浮かべた人に自分で嫌になつた。

でも、あの人はやさしく言った。

「なにかあつたら相談してね」

それに聡明のことを誰よりも良くわかつてるしキスしちゃった現場を押さえられているから話も早い。

誰かに訴えたかつた。

今より楽になれる方法はそれしかないように思えた。

でも、デンワをかける決心がつくまで、かなりの時間を必要とした。

「え？ 里奈ちゃん？」

浜崎佳乃は受話器の向こうで、意外そうに言った後、嬉しそうな声で続けた。

「どうしたの？ 久し振りね、元気？」

受話器を握ったまま、里奈は返事をする事ができなかった。

だって、涙があふれるわ、鼻水はあふれるわ、しゃくり上げそうで呼吸困難になっているわで。

里奈が鼻をすすったところで、なにやら不穏なものを察したらしい、佳乃がおそろおそろ言った。

「元気じゃ……なさそうだね」

うんうん、と里奈は頷く。

「うっ、ごめんなさっ、突然っ」

やっとの思いで口にした言葉がこんなもん。自分でも絶望しているというのに。ロクに口もきかずに可愛くない態度を通した生徒の里奈に対して、佳乃は優しく語りかける。

「大丈夫だよ。とにかく、落ちつこうね。大丈夫、わたしならどうせ暇人だし、なんでも聞かし、秘密は厳守するし。大丈夫、泣かないで里奈ちゃん」

里奈の部屋には電話がないので、電話をかける時は玄関の前の親機か、キッチンの子機1号か、両親の寝室にある子機2号かになる。子機2号を自分の部屋に持ち込んだ里奈は、ベッドにもぐりこんでくすくすんと泣きつづけた。

佳乃はそんな里奈に柔らかい沈黙をくれて、涙をそっと沈めてくれる。

「好きなこと聡明にばれたら生きていられない。聡明は絶対にあたしのこと好きになってくれないのに。ばれちゃってるみたい……どうしよう」



はじめて、誰かに口にした聡明への想い。

それが佳乃であることがとても不思議な気がする。

全てをわかっているのか、佳乃はこんな風に言った。

「切ないね」

しみじみと言うから、里奈は瞬きを一つして、受話器を見つめた。

「聡明を好きになっちゃうと切ないことばかりね。ホント、切ないよね」

へたに慰めるわけでもなく、佳乃はため息混じりに続ける。

「ごめんね、気のきいたこと言えなくて。でも、里奈ちゃんの今の気持ちすごくわかる、わかっちゃって仕方ないよ」

受話器を握ったまま、眠ったらしい。

気がつく朝だった。

耳にあてて確かめると、電話は繋がっていなくてほっとする。

佳乃にいろいろ泣きついたことが照れくさかったけれど、ちょっとだけ浮上した。

いろんなことがあっても、どんなに泣いても、朝は来てしまうものなんだなあ。

大泣きした後の目の腫れさえなければ、もう少し元気にもなれるんだけど。

ベッドから降りて溜息をつく。

覗いた鏡には、別人のように目を腫らした里奈がいた。

朝食の時間が気まずいのは、里奈の顔のせい。

母親も父親も、地雷であるかのように里奈の顔をちらちらと見ながらも触れようとしない。

でも、父親が里奈よりも早く出勤してからが大変だった。

母親のなぜなぜ攻撃が始まった。

「どうしたの里奈ちゃん、その顔？ 泣いたの？ なんで？ ママに話してくれる？」  
「うんざり。」

里奈は露骨に嫌な顔を試みせた。  
自分のおかあさんの善良過ぎるところが嫌いといったら、贅沢だろうか。

「娘を想うお母さんとして当然」という正論で迫ってくるから、反抗すると里奈のほうが悪いことをしているような気持になるからだ。でも、17歳にもなると、あしらすことも少々はできる。

「ごめんねママ。なんでもない。ママに心配かけちゃってごめんね」  
「でも、そんな泣きはらした顔して」

「ごめんね、大丈夫だから見守ってて」  
それ以上言ったら、切れますよ。

無言の圧力を発したつもりだが、通じただろうか。  
母親は不満そうに口をすぼめながら、言った。

「登校までに目を冷やしてみたら？」

電車にのって、奈津美に会った時、とても驚かれた。  
教室に入って、みんなに言われた。  
スゴイ顔だと。

結構傷つきながらも、里奈はへへへと苦笑い。  
あんな大シヨツクを受けながら、こうして学校に来てるんだから、案外凶太くできてるのかもしれない。

死んでしまいたいと思ってしまった昨日が恥ずかしく思える。  
だって、こうやって登校して授業を受けているわけだからさ。

放課後がやってくる頃にはなんとか驚かれない程度に腫れが引いた。  
それでもはじめて見た場合は、かなりびっくりするらしい。

教室のゴミ捨て当番なので、よっこらせとゴミ箱を抱えて歩いていたら、ジャージ姿の英彰にばったり。

部活に行く途中らしく、何気にバスケットボールのタンクトップをTシャツに重ねている。

里奈を見て浮かんだ笑顔らしきものが、怪訝そうな表情とともに消えてゆく。

「どうしたんだそれ」

ゴミ箱を抱えたまま里奈はダンマリを決めこむ。

英彰は腕を組んで、里奈の前に立つと首を傾げるように顔をのぞき込んで来る。

そんな英彰から逃げるようにして、里奈が背をむけると、バスケット部員らしい機敏な動きで逆サイドから覗きこんできた。

「やめてって言うてるでしょ!!!」

「すげえ顔……いて！」

無言で英彰のスネに蹴りを入れる。英彰は顔をしかめながらも、手を伸ばしてきて、こんなことを言う。

「ゴミ箱貸せよ、持ってやるよ」

「いいよ」

「いいから」

軽々とゴミ箱を抱えてすたすた歩き始める英彰の後を、溜息をつきながら里奈はついて歩く。

ゴミを英彰に捨ててもらった後で、焼却炉の階段の下で待っている里奈を、入れ違いにやってきた2年生の緑のリボンをつけた女子生徒がじろりと見た。

英彰が降りてくると、

「先輩、今日は」

なんて愛想よく頭を下げている。

英彰は見覚えがない後輩なのか、意外とそっけなく頷いただけで通り過ぎる。

ゴミ箱を里奈の前に置いた後で、ガッタンという激しくコケタであ

ろろ音を聞いて、ビクツとして振り返る。

まともに見ていた里奈も言葉を失う程に見事な転びっぷりだった。小柄な少女だから、ゴミ箱の大きさに前が見えなかったのだろう。階段に躓いて、つんのめっている。

ぷつと笑ってしまった後で、英彰は顔をなんとか引き締めて、後を戻っていく。

「大丈夫かよ？」

階段でへたり込んでいる女の子の前からゴミ箱を起こして抱えあげると、焼却炉の中にゴミを捨てた。

「すみません、真崎先輩」

恥ずかしくて仕方ないという風情で、俯いたまま身体を起こす女の子。

彼女の前にゴミ箱を置いて、英彰はとうとう我慢できなくなったのか笑いながら言った。

「下までおろしてやるうか？」

「え？ でも、そんなこと先輩にさせられないです」

「そんじゃ、ココで置いてく？」

「あ…」

恐縮しまくっていた彼女も、英彰の目が笑って入るのを見てからかわれていることに気がついたらしい。

嬉しさと戸惑いを半分にしたようなはにかみ具合で黙りこくってしまっ。

英彰はくすくす笑いながらゴミ箱を抱えたまま階段を降りて、そしてそれを置くと、とても自然に里奈の持っているゴミ箱に手を伸ばす。

「いいよわたしは」

あなたの背後からの視線が痛い&怖い。

へたに敵を作りたくないの、という意識で里奈が断ったというのに。

英彰はどうにもツボにはまっているらしく、くすくす笑いをやめず

に、陽気に里奈に言う。

「いいからかせよ。教室まで持ってってやるよ」

「真崎、いいってば」

小声での抗議は無視された。

「部活、遅れるよ。どっち行くのよ、校舎と反対方向じゃない！」

「

文句を言いながらも、里奈は先刻の女の子が立ち止まったまま、英彰を見ていることに気になって、落ちつかない。

そんなことを知ってか知らずか英彰はゴミ箱を抱えたまま歩いて行く。

「あんだねー、うちのクラスゴミ箱がなくて困っちゃうでしょう？」

「いいじゃん、困らせておけば」

「他人事だと思ってさ」

焼却炉のある場所から少し歩くと、校舎の裏になり、ちょっとした庭園になっている。

桜の花びらも散ってしまって、葉桜とも言えない様相に寂しくなってしまう。樹の元で英彰はゴミ箱を下ろした。

元々気けない場所、当然ながらこんな時間に誰かがいるわけもなく、里奈は居心地の悪さをしみじみと感じる。

「どうしてコンナトコに連れてくるの」

英彰は答えない。無言で樹の幹によりかかり、腕を組む。

「帰るよ、わたし。真崎だって部活……」

「3年の特権。遅刻しても誰も文句言わない」

「最低。あのねえ、わたし真崎と2人で見られるところ見られたくないんだ」

「なんで」

里奈は口籠もりながらも、答える。

「真崎はもてるからさ。さっきだって絶対に真崎のファン」

英彰は肩をすくめて、

「そういうの気にするんだ？」

「する。怖いもん」

「それじゃ、俺は高校在学中は彼女なんて作れないわけだ？」

「やめておいたほうが無難だよ」

「ふうーん」

なにを思ったのか英彰は笑い出して、前髪をふわりと揺らした。

「結構元氣じゃん」

「えー？」

英彰が手を伸ばしてくるので、一瞬ドキッとした。

けれど、その手はなぜか頭の上に。

ポンポンとなぜるように叩いてあっさり引っ込んだ。

聡明と同じことをする。

驚いて英彰を見つめると、彼は優しく笑う。

ドキドキしてきた。

里奈はわずかに頬を染めて、俯いた。

はつきりと本当によくわかる。

真崎はわたしを特別扱いする。

そうされて、心地よいと思うのは女の子として当然の心理かもしれない。

でも。

好きなひとじゃない。

好きなひとにはならない。

好きになっちゃだめ。

「うちのガッコ、部活動にはムチャクチャ力いれてないからさ、5月の地区予選でたぶん俺引退なんだ」

「……バスケやめちゃうの？」

うん、と英彰は頷く。

「真崎って、レギュラーなの？」

英彰は笑ってうなずいた。

「うん、フォワードやってる」

「フォワード？」

「バスケって5人いるだろ？」

言いながら英彰は地面に足で五角形を書く。そして、1〜5の数字をふっていく。

「ココがゴールだとしたら、頂点にいるのが1番のポイントガードで、ゴール真下にいる4、5番の2人がセンターで、これも言い方がいろいろあるんだけど、俺はその真ん中。3番、スモールフォワード。サッカーのフォワードと同じような感じ」

「マイケル・ジョーダンと同じ？」

唯一知っているバスケットプレーヤーの名前を挙げてみた。すると、英彰は頭を振って、

「ジョーダンは……似たような場所にいるけど、こっち、2番。微妙に違うんだ。シューティング・ガードっていつてサインからでもアウトからでもシュートする」

へえ、と感心する里奈に英彰は俯いたまま言う。

眼鏡の縁を上げながら、低い声で。

「もうすぐ引退だから、1度くらい練習見に来ない？」

「え？」

「結構もギャラリイいるから、目立つことはないと思う。気が向いたら放課後でも……さ」

正直言えば、英彰がバスケをやっているところは興味がある。でも、行かないほうが無難だとも思う。

「真崎、背番号いくつ？」

「6番」

「レギュラーだって言ったじゃない？ バスケは5人なのに？」

「バスケは4番から始まるんだよ」

呆れたように英彰が言う。

眉を寄せながら里奈は負け惜しみ。

「体育の授業でしかやったことないんだもん、知らないよ」

せつかくそうして話をそらたのに、英彰はさらりと軌道修正する。  
「待ってる」

そんな短い言葉で。

そして、ゴミ箱をもって歩き始める。

「そろそろ本格的にヤバイ時間」

いろいろ、物事が複雑になっていくような気がする。

聡明に相談したいけれど、今はダメ。

どう話せばいいかもよくわからないし。

聡明に気持がバレたかもしれないことの破壊力が少し減って、違  
う悩みが訪れる。

どちらが重いかというと。

聡明が一番なのはわかっているのに、負けなくらいの重みがずっ  
しりと英彰にもある。

それは友情がからんでいるからに他ならなくて、里奈はやっぱり溜  
息をついてしまう。

どうしてだろう、佳乃には本当に素直になれない。

タべのお礼とお詫びを言わなきゃと何度も迷いながら、やっとの思  
いで彼女の携帯電話にかけると、佳乃はちよつと変だった。

いつものおっとりとしたところがない。

そればかりか里奈にため息混じりの弱音のようなものを吐く。

「安心して。聡明はバカだから」

「そうでしょうか？」

「うん……かなりのオオバカ。あんまりバカなもんで、辞書並みに  
分厚くて硬い本で殴りつけちゃった」

へ？ と里奈は目を見開いた。



優しそうで、賢そうで、大人の落ちつきたっぷりといった風情の佳乃さんが？

聡明を本で殴りつけた？

佳乃は自分にいい聞かせるように言う。

「いいのよ、あんなサイテー男、ぶっ飛ばしても」

佳乃の呟きは元氣のないものだったけれど、里奈は素直にいいなあと思った。

里奈には絶対にできない。

聡明を殴りつけてしまうようなこと。

喧嘩なんて絶対にできない。

たぶん聡明は喧嘩なんてしてくれない。

不思議だけれども、この時里奈と佳乃は確かに同志だった。

同じ人間に恋している同志。

同じ人間のために溜息をついて、涙をこぼす同志。

佳乃は聡明を好きだとは明言していないけれど、里奈でもわかる。近くにすぎで片思いだというのは辛いよね。

友達として信頼されすぎているのも。

「浜崎先生」

「ん？」

「聡明はバカだとわたしも思います」

佳乃は少しの間後、軽く笑って、

「本当よね」

でも、好きだから困るんだ。

寝不足なこともあって、さすがにその日はよく眠れた。



「ゴールデンウィーク前に行われる体育祭の準備がちらほらと始まった。」

「運動会といえば秋が定説だが、新しいクラスの親睦を高めるといって建前のもと、進学校であるこの高校では3年生が受験期で忙しくなる前にさっさとやってしまおうらしい。」

「その代わり、秋には文化祭がある。」

「うっかり春と秋にわけてしまったものだから、普段の鬱憤もあつてか盛り上がる学校行事だ。」

「この時だけは仲間意識がやっぱり生まれる。しかも、学年対抗というわけではなくて、各学年のクラスごとにチームを作るから大変だ。例えば3-A、2-A、1-Aが一つのチームになって、A B C D Eの5チームの対抗戦だから白熱するのかもしれない。」

「さすがに中心は2年生。」

「3年生は半分ご隠居ぎみで、大ラスで盛り上がることは必死の組対抗の混合リレーの選手も1・2年生から選抜するのが殆どだ。」

「去年は真崎が3人抜いて優勝したんだよね。」

「奈津美は無邪気にそんなコトを言う。」

「まったく、真崎のことならなんでもうっとりなんだからと里奈は苦笑交じり。」

「今年はクラスが違うから、応援しづらいな。」

「3年生だもん、リレーなんか出ないでしょう。」

「えー？ 陸上部なんかより早いもん、出るよきつと。」

「面倒くさがりの真崎英彰が義務でもないのに出るものか。」

「去年だって陸上部員及び運動部員が乏しかったために、選手がなかなか決まらなくて、しかたなく2年の委員長だった自らが出場をきめたというだけの話だし。」

そんなコトよりも、里奈は思い悩むことがある。  
なので、奈津美の言葉も実は上の空だった。  
今日は家教の日。

聡明がやってくる日。

聡明はいつも通りだった。

だから、里奈も努めて明るい顔をして、体育祭の話なんてしなかったりした。

「聡明、走るのはやかった？」

「それなりに。陸上やってたから」

「100m？」

「いや、走り高跳び。そんなことは、どーでもいい。問題集開きやがれがきんちよ」

その時、聡明が一瞬隙のない目をした。里奈は気がつかないほどの一瞬、なにかを思いついたみたいなの。

「ガキンチヨは薄情な生徒だよな」

「は？」

「俺が入院してた時も一回も見舞いに来てくんなかったろ？」  
里奈はぎよっとする。

いいえ、お見舞いには行きました。

悲壮な覚悟でもって伺って、あなたにキスしちゃいました。

……ってことはさ、あれ？

聡明は口許をすねたように尖らせて、

「入院中ってのは、マジでヒマなんだよ。やることもなくてさあ、目が見えなかったからテレビとか漫画読んでヒマ潰せるわけでもねえし、まして個室だったから、孤独だったね、俺は」

実際はそんなコトをばやくひまがない程に、ひっきりなしに誰かが訪れていた聡明の病室だ。もちろん里奈の知らないところではあるけれど。

「ごめん」

「アクシデントもいつぱいあったしよ」

「アクシデント？」

「ベットから降りたら右も左もわかんねえから、へたに動けねえし。いきなり手のひらにスライム乗せられたり、目が見えないことをいいことに俺はやら放題だったね。ムカツクのは、誰がやったかさっぱりわかんねえってことだよな」

そのアクシデントに、キスは含まれますか？

里奈が呆然としていると、聡明は手を叩いた。

「キスされちゃったりもしたな。ほら、そうちゃん、もてるから」

「う、うっそー、信じらんない」

ぎこちなくそんなコトを言ってみたものの、ギョギョギョツとして身体をすくめる里奈に、聡明は屈託なく笑った後、腕を組みながら冗談ぽく言った。

「いや、マジで。病室でさあ、一人でぼんやりしてたら、キスされたみたいなんだわ。で、俺としては、相手がわからないだけに不安なわけよ、オトコだったらどーしよーって、悩んでるんだよ」

聡明の言葉は少々白々しいこともなくはないが、当の里奈はそれどころではなくて、いろいろんなシヨックと安堵が押し寄せてきて、へたり込みそうだ。

とにかく、ばれてはいないらしい。

男だったらどーしよーには多少なりとも傷ついたが、そんなもん些細なことだ。

よ、よかったあ……。

気分が軽くなっちゃったので、里奈は元気に聡明の肩をばしばし叩いた。

「今度入院した時には、絶対にお見舞いに行つてあげてもよくなってよ。可愛い女子高生が」

「また入院しなきゃなんねえのか俺は」

「あ……」

「すみません、野々村先輩はいらっしゃいますか」

教室の入り口で礼儀正しくそう言ったのは、2 - Aのクラス委員だ。今回の体育祭でA組連合のまとめ役を担っている。

選抜種目の選手に目星をつけて、依頼して回るといふなかなか大変な仕事もあつたりで、去年、英彰と散々苦労したことを思い出した。

3年生に依頼する時はホントしんどかった。

「わたしだけど、なに？」

「えっと、さつき真崎先輩に用事があつて3 - Aに行ったら、いなくて。3 - Dの野々村先輩に訊けばすぐ見つかるって言われたんで」  
里奈は目を半分にして、こめかみのあたりを押さえた。

「クラスが離れてあいつを探すことはないだろうと思ってたけど……」

…  
里奈は壁にかかっている時計を見ながら、

「この時間なら屋上。いなかったら図書室。保健の先生がいない時は保健室」

2年生は怪訝そうな顔をして里奈にご質問。

「真崎先輩はそこでなにやってんですか？」

口で説明するよりは連れていってしまったほうが早い。

里奈は彼を手招きながら、教室を出た。

「寝てるの。あいつ、なにかと多忙だから睡眠時間足りないんじゃない？」  
「ない？」

「睡眠時間足りなくなるほどなんかすることあるんですか？」

言われて里奈は首をひねった。

「さあ？ あのひとの頭の中はいまいちわからないから。真崎にど

ういう用件？」

「体育祭のリレーのアンカーをお願いしようと思って。やっぱり真崎先輩より速い生徒はなかなかいなくて。A連執行委員全員の希望でもあるんです」

「難しいと思うけどな」

「えっ？」

「真崎、面倒くさがりだから。おいしいエサでもない」とついホンネが出てしまって、里奈ははっとする。

慌てて口を押さえても時すでに遅し。

ああ、同情するよ。

確かにわたしも去年大変苦労した。

でもさ、そんな子犬みたいな目ですぐらないでほしいの。

「3-Aのクラス委員は真崎になにも言っていないの？」

「あらかじめ断られたそうです。持病のヘルニアが痛いので、バスケット以外の運動は医者から禁止されてるって。嘘ですよね？」

あたりまえじゃなか、おばかちゃん。

選抜リレーの選手は放課後残って練習しなければならぬから、みんな嫌がるわけで。ただでさえ多忙な日々を送る英彰が快諾なんてするはずがない。

ニブイ頭痛のようなものを感じながらも、里奈は心を鬼にしてきっぱりと言った。

「ごめんね、わたしは協力できない。真崎に出場されたらD組連合には痛手になるわ。うちの2年生もがんばって走りまわってるから、裏切るようなことはできないの」

しゅんとされてしまったのはなんと胸が傷むけれど、こっちはだつて辛いのだ。

屋上についたところで、里奈は彼の背を押した。

「ほら、あそこにいるでしょう？寝てる時はちよつと不機嫌だから、あらっばい起こし方しないほうがいいと思う。がんばって」

「はい……」

そして、放課後になって、再びあの2 - Aの委員長が教室の入り口に立った。

「野々村先輩はいらっしゃいますか？」

「副委員ちよー！」

お掃除を終えてモップを片付けていた里奈は、呼ばれた声に降りかえって、2 - Aの委員長を発見。目を半分にした。

相手は大変弱りきった様子で、里奈を見下ろしている。

「どうしたの？」

「イヤ、真崎先輩なんですけど」

「真崎がどうしたの？ リレー出てくれるの？」

「いや、あの、それが」

「？」

彼はあたりを憚るように声のトーンを落として言った。

「野々村先輩が今週の日曜日にバスケット部の練習を見に来てくれたら考えてもいいっていうんです」

「なに？！」

あの、バカタレー！！

「お願いしますう、こんなことを頼んだってことも絶対に他言するなって言われてるんで、噂になっただけでもダメだとか言われちゃってるんで、絶対にばらしませんから。野々村先輩！」

土下座でもしそうな勢いなので、里奈は半分呆れながら、

「考えるって言ったんでしょ？ あいつの考えるってというのは本当に考えるってだけよ」

えっ？ と彼の表情が滑り落ちて真っ白になった。さらに事の次第を飲みこむうちに、青くなっていた。

里奈は深呼吸してから唇を引き結んだ。

「サイテーのからかい方して、全くあいつは！ おいで、文句言っ  
てあげる」



「え？ 別に文句はいいんですけど」

「自分も去年苦労したんだから、少しくらい助けてあげればいいのに！！！」

去年、散々探して歩いたせいで英彰の行動パターンを知り尽くしている自分が嫌。

この時間は部活に行く直前のはず。まだ教室にいと見た。

里奈は3・Aの教室に顔を出して、英彰を探した。

英彰はクラスの女子と和やかに歓談中。

その光景もちよつとむつと来たが、そんなことはどうでもいい。

「真崎！」

英彰が一瞬驚いたように首をひねってきた。

そして里奈を見ると、やっぱり来たかと言わんばかりににやりと笑う。

廊下に出てきて、真つ先に言うことにや。

「どうしたの？ 怖い顔してさ」

「あんなねー。いい加減にしなさいよ！」

英彰は里奈のことをのらりくらりとからかった後で、思い出したように2・Aの委員長を見て、

「1年の村山つてヤツに出ろつて言っておいたから行ってみな。バスケ部に入部したばかりの1年なんだけど100m12秒台で走つてたから充分だろ」

「え？」

「3年に逆らう無謀なバスケ部員はいないから、即答で快諾するはず」

言うだけ言って、真崎が背を向けようとする。

が、ワザとらしく大袈裟に振りかえつて、里奈を見て、

「日曜、来る？」

里奈は無言で英彰を睨みつけた。

英彰は肩をすくめる。

「あ、ありがとうございますー！」

深く頭を下げる後輩に、真崎はかるく頷いただけで教室に戻ってしまった。

里奈はそんな英彰の背中に向かって舌を出した。

キーザー！ ええかつこしい。

「真崎先輩って、いい人ですよね〜」

しみじみと隣で言うから、里奈は呆れて言葉が出ない。

からかわれたこと忘れちゃってるのか、君は？

真崎のバカやろっ。

いたいけな2年生まきこんで人のこと、からかいやがって。

里奈のノートを覗きこみ、聡明は眉をひそめる。

彼の右手は一瞬、愛のポカリをしようと浮いたものの、思いなおしたらしい。

そして、改めてふてくされている里奈の顔を見て、聡明ががっくりと肩を落として溜息をつく。

「野々村里奈」

「はい？」

「おまえは、俺をセンセと思ってない節が多すぎることはわかりきってるけども」

「なによう」

「俺はこの証明問題をなんとかせえと言ったんだ。なんだ、このマサキのええかつこしいっつーのはよ」

はっ、と里奈はノートを見つめる。  
数学のノートのはずなのに、バカとか、タコとか、ムカツクとか書きなぐつてある。

一瞬、赤面して、ノートをがばつと閉じた里奈に、聡明はなにやら意味ありげな忍び笑い。

「マサキってのはさー、真崎英彰くんかよ？ おい」

「そうだけど、なんでそんな力オして言うわけ?! ほっそーい目がなくなっちゃってるじゃん!! やーらしい、やーらしいっ、スケベー!!」

「顔はどうにもならんよ」

「自分でよくわかってるんじゃ……イタイ」

聡明は拳を固めて、里奈の頭をぽかりとやった。

「おまえみてーな、可愛くねえ小生意気な今時のガキンチョも、アカンボのころはあつたんだよな……」

「なによ突然」

聡明は穏やかな顔で軽く笑う。里奈の頭に手を置いて、ぽんぽんとする。

「何があつたのか知らんけど、いい子でおべんきょーして頂戴」

「はぁーい」

ぽんぽんとされたところをなぜながら、里奈はもつと甘えてしまったい衝動と戦う。

哀しいかな、片想い。

この人はずっとこんな調子なんだろうな……。

ふと、予感のようにそんなことを思った。

朝だというのに下駄箱前の空気がいまいち重い。

なんだろうとその原因たる人垣をのぞきこむと、その中心にいるのは英彰だった。

数人の女の子にすっかり取り囲まれてしまった英彰は、下駄箱に背中を預けるように寄りかかり、腕を組んでいた。

その中でもショートカットで姉御肌の少女が、正面からなにかを訴えるように話している。英彰はそんな彼女たちをうんざりとした目で見おろして、口は閉じたまま。

大勢の生徒たちは、そんなやりとりを好奇心いっぱい目で眺めながら通りすぎて行く。

その中には足を止めて、遠巻きから見物している生徒もいる。事態はなんとも物騒というか、なんというか。

なんでこんなことになってるんだろ。真崎の奴、なにやったのよ。辺りを見まわして里奈はバスケット部の男子生徒を発見。背後からこっそり尋ねた。

彼は石河俊信という。たしか英彰とはクラスも同じだった。英彰と昔から一番親しくしているので、なんとなく付き合いで待たされてしまっているらしい。

「真崎、どうしたの？」

「マサキファンクラブが抗議してるらしい」  
目を丸くして里奈は首をひねる。

「本当にあるわけ？ あいつのファンクラブって」

「ああ、部活やってる時なんか大挙して見に来てるよ。会長が卒業したから、勢いは落ちてるらしいけど」

「なにしてんの、そのファンクラブが」

「真崎に噂を確かめにきたって言って、がんばってんだよ」

「噂？」

「真崎に大学生の彼女がいるのは本当かって言った。バカだよなあ。昇降口でやるなって感じ？ マサキも逃げちまえばいいのにな。へんなトコで短気だからあいつ。怒鳴りつけたりしなきゃいいけど」  
悪態交じりの言葉に、正直、ドキツとした。

真崎に大学生の彼女なんて、いるわけないじゃん。  
全くの誤解だ。

もしかするとその大学生は里奈のことかも知れない。

それを思った時一気に青ざめた。

そんなコトを以前に言われたことがある。

英彰の従姉弟である、とてもキレイな先輩に。

そんなこんなで背筋を冷やしていたら、背後から制服の上着を掴ま

れた。

「里奈あ」

振りかえると、奈津美が泣きそうな顔で立っていた。とっさに奈津美の肩をなだめるように抱いて、里奈は英彰に視線を送った。

英彰の表情は明らかに、不機嫌。

「あのな、俺はただの一般生徒で誰にも干渉されずに高校生活を送る権利があると思うんだけど」

そんな英彰の冷やかな言葉にも敵は負けていない。

里奈はその姿に見覚えがあった。

隣クラスの女子生徒だ。奥澤いずみとか言ってたっけ。

昔から真崎のことが好きなんだと公言して憚らず、以前に何度か告白して断られているという噂を聞いたことがある。度胸が据わっているというか、気が強いと言うか。

「校内にヘンな噂が立つと困るんだよね、後輩なだめるのも大変なんだから」

「大変つて……なにを証拠に。大学生つてどこから出てきたんだよ」「春休みに見たって報告があったのよ。英彰くんが毎日のように図書館で勉強した後、女の人とコーヒー飲んでたつて。たまに二人で買い物に行つて、荷物持ちみたいにその女の買った袋持つて歩いてたつて」

げっ。

「やっぱわたしのことじゃん?!」

血の気が引いてしまった里奈同様、さすがの英彰も驚いたらしい。春休みの行動をズバリ言われて、英彰は一瞬絶句。それから赤面しながらも、狼狽を隠そうと表情を引き締めた。

「報告?」

「英彰くんが部活を終えた後、追っかけやってみた。やめなつて言っておいたから、もうそんな事しないと思うけど」

「追っかけ?」

呆れたように英彰が言う。

「はつきり言って迷惑だよ。俺がなにしようが、誰の荷物持ちしようが文句言われる筋合いはないし、日常を誰かに見られてると思うとぞっとする」

英彰の声が低くなっているにも関わらず、奥澤いずみはひるむことがない。

「付き合ってる人がいるなら、そう言ってよ。わたしからみんなに邪魔しないように見守ろうって説得するから、ね？」

ね？ で、周囲の少女たちに同意を求めると、それぞれに頷いたり、俯いたり。

英彰はいよいよ呆れたように溜息をついた。

「わかんないヤツだな、放っておいてくれって言ってるんだよ」

「英彰くん、誰かとまではきかないから。ヘンな噂のおかげで悩んでるのよみんな」

やばい、と思う。

英彰の目つきがとてもやばい。

里奈はそんな目をした時の英彰に何度か遭遇したことがある。

クリスマスに聡明の前で暴言を吐いた時と、生物室で告白された時だ。

里奈は拳を固めた。

クラスも違うし、過去の委員長&副委員長コンビのような大義名分はないけれど、こーゆー時にしゃしゃりでなくて、いつ出るとゆーのだ。

里奈は奈津美の肩から腕を外した。奈津美が驚いたように里奈を見る。

「里奈?!」

「あたし、副委員長だからさ」

英彰とはクラスは違っているところが、勘違いっばいのはこの際無視する。

里奈は1歩、前に歩み出そうとしたとき、肩を掴まれた。

かわりのように石河が口を開いた。

「マサキ、いい加減にしねえと遅刻すつぞ」

英彰が顔を向けてきた。石河が目配せをすると、軽く頷いてみせたりした。

「うるさい、石河は黙っててよ!!」

「おまえが黙れよ」

英彰に睨まれて1度は口を噤んだものの、奥澤いずみは怯まなかった。

「わたしだって悪いとは思うけど、仕方ないじゃない!」

彼女の背後にいる後輩たちが顔を見合わせる。きつと頼られてしまったのだろう。

だけど、石河くんにはヤツあたりするのはいただけない。

とうとう里奈も口を開いてしまった。

「悪いと思ったら、自分の教室に帰ったほうがいいと思う。こんなことしたらマサキだってみんなの不評を買うし」

里奈に言われて、彼女ははじめてあたりを見回した。

そうして、しらけた目で見られていることを察して、唇を噛んだ。

「ごめん、ね」

つぶやくように英彰に言っ、背中をむける。

彼女の後に続く少女達が早足に教室を出て行くのを眺めていたら、英彰が何事もなかったかのように下駄箱から身体を起こし、歩み寄ってきた。かといって立ち止まるわけでもなく、ただ、すれ違いざまに里奈の肩にポンと手を置いて、視線を合わせることもせず、サングラスと小さくつぶやいた。

英彰と石河が並んで歩き出すと、どこからわいたのかバスケット部の面々が集まってきた。なんだかんだと心配していたのか、からかうためか、見物していたらしい。

英彰はその輪の中に混ざった。石河が英彰の背中を叩いて、まず一言。

「マサキー、なんだよ、あれ? いい加減にしてくれよ、俺もうや

だぞ」

「ゴメン、ホント、ゴメン」

「んなことより、大学生の彼女ってなんだよお、おおおおーい！」  
「しらねえよ」

頭を小突かれまくっている英彰の様子にほっとした時、奈津美が里奈に言った。

「里奈、ひどいよ」

「え？」

「あんな言い方しなくてもいいじゃない。奥澤さんすごく恥ずかしい思いしたよきつと」

「でも、ああ言わなきゃ……石河くんがさ……」

奈津美にしては攻撃的な態度に里奈は目を丸くした。

唇を尖らせて、奈津美は言う。

「確かに常識は外れてるけど、あの噂で悩んだりした子いっぱいいるんだよきつと。奥澤さんだって絶対に悩んでたと思うよ。里奈はわかってない。同じ女のこなんだから気持察してあげなよ」  
「ずしんときた。」

思ってもみない方向から切り込まれて、油断をしまくっていただけにかかり傷ついた。

なのに奈津美はさらに言った。

「副委員長ってそんなにえらいの？」

翌日に控えた体育祭の準備が始まっているらしい。各クラスの体育委員が中心になって校庭にラインを引いている。

里奈もクラス委員なので、そろそろ顔を出さなければなあと思いつながら、教室のベランダに奈津美と並んでぼんやりしていた。

今朝、奈津美に「副委員長ってそんなにえらいの？」と言われてしまつてへこんでいたら、放課後になって、奈津美のほうから謝ってきた。



そんな事情もあって、友達を優先して、里奈は役目をサボっている。  
「4月にこんなことやってるの、うちの高校くらいだよ。やって  
もせいぜい球技大会だよー」

「うん……」

騎馬戦とか棒倒しとか、男子はいろいろと激しい競技がある。

しかし、女子にもあるんだ、伝統の格闘技が。

「タイヤ引きって、格闘技だよー」

奈津美が言う。

里奈は頷いた。

校庭の中央に詰まれた自動車のタイヤを2チームに分かれて奪い合  
うという実に単純なものだが、シンプルゆえに激しくもある。

1年から3年まで入り乱れての大混戦だからなおさらに。

「創作ダンスとかないだけましかな」

「確かにねー」

「最後の体育祭だね。進学してからはさすがにないよね」

「たぶんね……」

自分の言葉に返事をするだけの里奈を、奈津美はのぞき込むように  
じっと見つめた。

視線に気がついた里奈が首をわずかに傾げると、奈津美は半分すね  
た顔でこんなことを言った。

「いいなあ、里奈は」

「えー？」

「真崎と仲良くてさ。わたしなんか里奈と仲良しじゃなかったら絶  
対に名前もおぼえてもらってないよ」

「……真崎ってさ、そんなにカッコイイ？」

いやにあっさりと奈津美は頷く。

「うん」

「具体的に言うところか？」

「顔」

「それだけ？」

「背が高くて、足が長くて、頭だつていいし。性格もいいっていうか、猫みたいな感じなの」

「猫？」

奈津美ははにかむように微笑んで、頷いた。

「わたしなんかにはさ、すごくそっけないのに、友達といる時なんかすごく楽しそうに笑ってるでしょ？ 少年っぽく。そういうの、なんかいいんだ」

「よく見てるね……」

感嘆をこめて里奈は言った。

好きな人のことはどうしても知りたいし、見つめていたいよね。すごくわかる。

ごめんねって思っちゃうのはやっぱり高飛車かな。

奈津美のほづがいい子なのに、奈津美のほづが真崎のこと真剣に想ってるのに。

「里奈がうらやましいな。わたしも廊下とかで声をかけられてみたいよ」

もう、里奈はなにも言う事ができない。

できるのは伏目がちに視線を落として、口許を引き結ぶだけ。それだけ。

はつきり振っちゃえばいいのよ。

そうすればきつとすごく楽しんだ、わたしは。

でも、ここのところ真崎英彰と話したりするのは、なんだか楽しかったりもする。

頭にきたり、そんなコトばかりだけど、どうしてか。

廊下で会うと、話しかけてくれる事を期待してる。

心のどこかでそう感じている自分がいて、里奈は戸惑う。

そんな時に浮かぶのは聡明で、そうすると、きゅっと胸が痛くなっ  
て。  
思い出すだけで胸が痛くなるような、そんな想いがあるのに、どう  
してふらふらしちゃうんだろう。

大嫌いだって、あんなにも大嫌いだって思ってたのに。

毎年、体育祭当日になると里奈の母親が騒ぐ。

「ママ、行かなくていいの？ お弁当を持って行かなくていいの？」  
ママ、ごめんね。娘が高校生にもなってお弁当を持って応援に来てる人は誰もいません。

行きたくてうずうずしているんだろうなあ……。

父親がダイニングのテーブルで新聞を読むのをやめて、嬉しそうに言った。

「お、今日はポニーテールか」

「うん、体育祭だから。みつあみでもいいんだけど。偶にはね」

「かわいい、かわいい」

「……パパに言われると、恥ずかしい」

「えっ？」

「里奈ちゃん、遅刻するわよ」

「あ、ホントだ」

バッグを抱えて里奈は小走り。

「いつてきまーす」

「英ちゃんの走るところ見たいなあ」

英彰の母親がポツリと呟く。

英彰は玄関でスニーカーを履きながら、そっけなく言った。

「今から駅まで走っていくから、それ見れば」

ぱしっと、母は英彰の背を叩いた。

唇がすねている。

「英ちゃんの最後の運動会なのよ」

「だからなんだっての。運動会じゃなくて、体育祭。ギャラリーなんていないよ高校生にもなって。第一店休めないでしょ。」  
ドアを開けて出ていこうとする英彰の背中に、興奮ぎみの母親が言う。

「英ちゃん、行ってきますは?!」

「いーってきます」

やる気のなさそうなめんどくさそうなご挨拶に、母親はますます唇を尖らせる。

そんなこんなで体育祭だ。

お空は哀しいかな、透けるような青空、まさにピーカン。

そんな体育祭日和の朝、D組連合は1年生から3年生まで同じ場所に集まっていた。

イザ、始まってしまえば盛り上がる盛り上がる。

ご隠居したはずの3年生が受験勉強のストレス発散とばかりに、一番元気だったりして、異常な空気が生まれちゃってるし。

後輩達に過激なハツパをかけたたりして、ちよつと物騒だ。

里奈は結構流されやすいタイプなので、まわりが盛り上がれば、自然と盛り上がる。

「うー、うち3位か」

「1位がE連合、2位がA連合、妥当なトコだね」

なんて奈津美のほうが冷静だし。

里奈は拳を固めて、クラスの委員長の所まで走って行った。

「大野 つ!!!」

今度の相方は英彰と違って、探さなくてもちゃんとどこかにいてくれる。

大野と呼ばれたクラス委員長はノリノリなご様子で額にはちまきを締めて、ロングヘアをきりりと一つにまとめていた。

まだ4月だというのにジャージを脱いで、半袖短パンのお姿。

キレイなおみ足を惜しげもなくさらしていらっしやる。

その姿に一瞬びびったが、彼女の性格があっばれなことは3年間同じクラスだった事もありで、1年生の時から承知している。校内全クラスで女子の委員長&副委員長コンビは里奈たちだけだが、なんの、男なんぞに負けていられるか。

「野々村も学校ジャージ脱いで！ 気合が足りないわ！」

「なんでそうなるかな。それより総合でうち3位だよ。最上級生として士気を高めるべく演説の一つもやっておいたほうがいいと思うんだけど？」

「もちろんそのつもりだったわ。あんたって、つくづく参謀タイプよね。よく気がつくつたら」

それから大野こと、大野涼子委員長は各運動部のキャプテンや応援団長などを引き連れて、各学年のD組の生徒たちの前でジャンヌダルクよろしく演説をぶっこいた。

普段は冷めている今時の高校生達も、すっかりその気になってくるから大野涼子は恐ろしい。

「めざせ、優勝！！」

「おー！！！」

「準優勝は敗北だと思えー！！ そのほか何ぞはもつてのほかだ！！！」

後で冷静になった時、盛り上がって「おー！！」なんて言っちゃったことを恥ずかしいと思うんだろうな、みんな。

里奈は一応回りにあわせて拳をあげながら、首を傾げる。

しっかりジャージは上下脱がされて、寒いくらいだ。

石河が目を半分にしながら言った。

「……Dの大野がアジリはじめやがったな」

「あいつはいまいち正体がわからん」

A組の座席から英彰はぼやいて、かしゃと切られたカメラのシャッ

ターの音に眉をひそめた。

「真崎先輩、もう一枚お願いしまーす」

「またおまえか」

「小関君って呼んでください。新聞部の真崎先輩担当なんですから同じ場所にいることをいいことに接近してきた2年生の男子。」

行事となると、英彰の所にちよろちよる現われて写真を撮って行くので、自然と名前と顔を覚えてしまっていた。

何人もの女の子達に隠し撮りされていることに気がついてむっとしていた英彰も、小関と名乗る男子生徒に堂々と来られると気が抜けて、ノンビリと尋ねた。

「俺の写真、焼き増ししたのでいくらになっただ？」

「250〜500円くらいですよ。どうしても隠し撮りじゃ遠目からになりますからね、先輩のアップは売れますよ」

「あこぎなコトやってんじゃねえよ」

「なんならモデル料払いますか？ポーズでもつけてもらえるとはずみまずけど」

「考えとく。とにかく今は撮るな。うっとおしい」

新聞部のお仕事にも裏と表があつて、彼は裏の仕事に勤しんでいる。表写真は校内新聞を華々しく彩り、裏写真は新聞部の部室にてアイドルの生写真よろしく販売される。新聞部の裏稼業として、暗黙の了解として成り立つ商売である。裏とはいえ18禁ものは厳禁。そこまでくるとケーサツ沙汰になっちゃうし、撮られた生徒のほうが気の毒だから、次から商売が成り立たなくなる。

しかし、裏の裏では何かがあるかわからず、実に不透明だ。

「先輩、表バージョンでいいの撮りましたけど」

「はー？」

小関はデジタルカメラもご携帯。

ディスプレイに出された姿を見て、英彰は口許を歪めた。

「生足が見られる下バージョンもありますよ。カレンダーでも作ってあげましようか？」

「いらねえよ、バカ」

小関は笑いながら、スイッチをオフにする。

野々村里奈がグラウンドに腰をおろして、ジャージを脱いでいるところ。

襟がポニーテールが引っかかって痛かったらしく、片目を閉じている。

英彰は言った。

「そんなん表でも裏でも出しやがったら、ぶっ殺すからな」

「真崎先輩ってわっかかりやすうーい」

小関のアホウが逃げるように走り去った後、ずっと地蔵のように黙っていた石河が英彰をまじまじと見つめて、

「おまえ、マジでわかりやすいよな」

「うーるーせーえ」

午前中のハイライトは女子によるタイヤ引き。

チームは5つ、タイヤは60個、中央に積んである。

それをめがけて300人余りの女子が乱闘戦を繰り広げるわけで、まさに異種格闘技、無差別級3本勝負。

「怖い。なんで、全員参加なの？」

「競技が単純だからだよ」

怯える奈津美を励ますように、里奈は言った。

競技開始のピストルの音の後、きゃー！ と奇声があがって突撃開始。

足の速い生徒がタイヤの山に飛びついて一気に昇って、片っ端から自分のチーム方向に放り投げる。

トロイ奈津美は見捨てて、里奈はせっせと投げられたタイヤを掴ん



で引つ張った。

なんせタイヤを掴める確率は60/300もつとわかりやすくすれば、1/5。

この一個だつて貴重だ、絶対に離すもんか、と思つたら。

反対側に見たことのある女の子がしがみついていた。

名前は思い出せないけど、憶えてる。誰だっけと思つた瞬間、相手が叫んだ。

「あんななんかドイツキライよ!!」

「なッ……」

面と向かつていきなり脈絡も無くそんなコトを叫ばれて、里奈は絶句しながらも、頭に血が昇ってきてタイヤにしがみついた。

「大嫌いで結構よ!! なんだかわかんないけど、離せっ!!」

「ちよつと可愛いからつて 図にのるな、ブス!」

「なににい?!」

と、叫んだら、どこからかスニーカーが飛んできて、里奈の顔にすつこーんと当たつて落ちた。左目の下のあたりがずきずきする。

「誰だ、投げたの!」

味方の誰かが叫ぶ。

目から星が出るかと思つたが、代わりに出たのは痛みで涙。しかし、当たつた左目を押さえればタイヤから手を離すことになる。できない、やったら今までの苦労が水の泡。そんなの絶対嫌だつ。

こんな風に取りあいになると、野球の乱闘よろしく、助っ人がわらわらと現われる。

気がつくと、取り合つていた相手に味方がついていて、多数に無勢、里奈は引きずられて、片目から涙をこぼしながらも必死でタイヤにしがみつく。

「しぶといなあっ」

髪を引つ張られ、里奈はたまらず悲鳴をあげた。

「いたっ!」

ちくしょう、ポニーテールになんかしてくるんじゃないなかつた!

歯を食いしばってタイヤにしがみつ直したら、足を踏まれるわ、蹴られるわ。

これは1対1の勝負じゃない、敵は複数。こうなったら意地だ、絶対に放すもんか。里奈は叫んだ。

「誰でもいいから、助けにこーい！」

「今行く！」

「野々村、死んでも離すんじゃないわよ！」

「ムチャ言つな　！！！」

「里奈、どーしたのよその目?!」

いやそのつ、と、やっていたら、またスニーカーが飛んできた。

「真崎先輩に馴れ馴れしくして、むかつくんだよッ！」

「英彰くんが、嫌がつてるのわかんないわけ?!」

スニーカーが当たったのは額の上のあたり。目よりはましだが、やっぱり痛い。しかし、同時に投げつけられた言葉に里奈は耳を疑った。

真崎い〜?!　やっぱりあいつがらみのこーゆーわけか!

怒りで言葉が出ない里奈の代わりにように、味方の誰かが怒鳴り返した。

「私情挟むんじゃないよ、学校行事に！」

味方がわらわらと来てくれたので、情勢はこちらに傾きつつある。

こんなときに手を離れたら、それこそ命にかかわる。絶対に放すもんか。なんだかもうてんやわんやだ。

「悔しかったら、真崎に名前覚えられてみな!!」

「3年だからっていい気になるな!!」

「それがどうした、バーカッ」

「どっちもうるさい、うるさいっ!　真崎なんかわたしとなんのかンケーもなーい!!　スニーカー飛ばしたの誰だ　っ!!」

砂埃舞う中、Dの陣地まで敵数名ごとタイヤを引っ張りこんで、その場に里奈はへたりながら叫んだ。

「両足裸足になってるの、誰だっ!!」

すでに中央にあったタイヤの山はあとかたもない。あちこちで取りあいになって、まさに戦場のありさま。

女の戦いを遠巻きに戦々恐々眺めながら、男子生徒たちはひたすら野次る。

「こえーな、女は怖い」

午前中の競技は恐怖のタイヤ引きをもって終了。

昼食を取った後もしばらく痛みに耐えていたが、まわりから散々救護テントに行くことを勧められた。

養護教諭は里奈の顔を見て、まず絶句。それからたまらなそうに噴出した。

「派手にやったわねえ、冷やしておきなさい、目の下。痣になるかもしれないけど、すぐに消えるから、大丈夫」

いつの間にかすりむいていた肘にほんぽんと薬を塗ってくれて、麦茶を振舞ってくれた。

そんないきさつの元、救護テントの中ですっかりくつろいで里奈は速報で配られた各チームの獲得点数表を睨んでいる。

左目を濡れタオルで押さえながら、ふつふつと沸いてくる怒りと痛みに耐えながら。里奈の乱れたポニーテールを奈津美が丁寧に結いなおしてくれている。

しばらくして大野涼子が様子を見に来たのか姿をみせた。

「野々村、速報見た？」

「見てる。3位は変わらずかあ。みんながんばってるんだけどなあ」

「でも、追い上げてはいるよ。タイヤ引き優勝したし」

奈津美が里奈の髪をすきながらノンビリと言う横で、大野涼子委員長閣下が頭を抱えている。

「なんとか大ラスのリレーまでに点数つめとかなきゃと思ったんだ

けど、競技もそろそろ終盤よ」

「委員長、本気ね」

「これでリレーでビリにでもなりやがったら、魔法陣つくって呪ってやるわ」

「……あんだだと、本気でやりそうで怖いんだけど」

そんなことをぼそぼそと話していたら、なにやら背後が騒がしい。養護教諭が立ち上がった。

「やれやれ、忙しいなあ、次から次と」

担ぎこまれた1年生の男の子は里奈よりも重症だった。

なんと階段から落ちたというのだ。足首をぶつくりと腫らしている。いて、いいいいいい！！」

悲鳴をあげる一年生をどなりとばして養護教諭は足首に湿布を巻きつける。

「医者につれて行ったほうがいいわね、これは」

「ええ　！！？」

本人含め、まわりにいた男子が驚愕の悲鳴をあげている。

「走ったりなんかは……しちゃだめですか？」

「なにを言ってるの。こんなに足を腫らしてどう走ってるっていうの。ぴしつとたしなめられて、全員揃って顔面蒼白。」

何事よ？ と眺めていると、いよいよ沈痛な空気が漂って、彼らは顔を見合わせる。

「どーする、リレー」

「すみません、俺もっと上手く階段から転げればよかったです」

「なに言ってるんだよ」

怪我した当人は今にも泣きそうだ。

リレーの選手か、お気の毒だなあ。

里奈が同情をこめて眺めていると、なんと真崎英彰とバスケット部の3年生が姿を見せた。

「村上、階段から落とされたってマジか？」  
落とされた？

物騒な台詞に里奈と奈津美は顔を見合わせた。  
視線を落とし、怪我人村上少年は申し訳なさそうに頭を下げる。  
英彰は黙ったままだ。

表情が硬いのは怒っていると見た。

「村上くん、怪我したの?!」

どこかで聞いたような大絶叫と共に現われたのは、いつぞやのおめでたい2 - Aの委員長。

気配り少年なのか、離れたところで麦茶を飲んでいる里奈を見つけ、ぺこりと頭を下げた。

そして、村上少年に心配を顔に書いて歩み寄る。

「走れない……ね、それは」

「すみません」

「仕方ないよ、こういうことは不可抗力だ」

「でも、リレー……」

2 Aの委員長は弱々しく笑いながら、それでも胸を叩いた。

「大丈夫、最後までに選手見つけるから。村上くんは責任なんか感じることはないよ。いざとなれば僕が走るから」

事前の選手集めにも苦労したのに、直前になって今更見つけられるものだろうか。

関わりがなかったわけでもない後輩のピンチに、里奈も気が気ではなくなってきた。

そんな時、今までむっつりと黙っていた英彰がぼそりと言うには。

「おまえ、足は速いのか？」

「いえ、僕はあんまり」

暗い顔で俯きながらの答えに、涼子が小声で、

「あんまりどころか、子供の3輪車の方が速そうよね」

「バカ」

里奈が小声でたしなめたあと、英彰が言った。

「それじゃ、俺の方が速いな」

「え？」

その場の視線が一斉に英彰に集まる。

ようやく思い出して、里奈はああと唸った。

村上つて、真崎が紹介したバスケット部の1年生だ。

だから真崎たちバスケット部がここにしているわけね。

1人で納得する里奈に涼子がなぜか肩をすくめる仕草。

「俺が走る。今すぐ登録の変更して」

英彰はかなり頭にきているのか、冷たい目で低い声。

反比例のように2・Aの委員長はぱつと笑顔で立ち上がった。

「はい！」

ばたばたと実に鈍行な走り、彼が消えた後、怪我人・村上少年に英彰が尋ねた。

「おまえを階段の上からどついたのは、誰かわかるか？」

「真崎、雪辱戦はやめような？ おまえは顔に似合わずホントすぐカツとくるからもー」

「村上、答える」

「ひーであき！」

お仲間がたしなめるのにも聞く耳もたずで、英彰は視線でまでも答えを促す。

「いや、マジでわかんなくて」

すると、付き添いだった少年が言った。

「はちまき、紫だったんですよね。それだけは見たんですけど。村上が落ちていくからこつちもあせっちゃって」

「紫って言うと、Eのヤツらか。英彰、顔が怖いよ。暴力は反対ね、試合出られなくなるから」

「誰も報復なんてしないよ。Eのヤツらに前を走らせないだけだ」

「おお」

なんともいえない拍手が起こる。

里奈はぼかんとしながら、その様子を眺めていた。

究極のええかつこしいな発言だ。

奈津美の目はもちろんハート型。

でも、英彰はぼそりと。

「できるもんなら、村上と同じ目にあわせてやるけどな」

英彰はとうとう頭を叩かれた。

叩いたのはバスケット部のキャプテンと見た。

「真崎、たのむよ？ 試合で退場になるのおまえがダントツの一番なんだから。ハタケ先輩もすっげえ心配してたぞ」

ハタケときいて、里奈は密かに動揺。でも、英彰はなんでもなさそうに答えた。

「あの人も乱闘得意だったくせによく言うよ」

そんな和やかになりつつある空気に水を差したのが、大野涼子。D委員長閣下。

「悪いけど、あんたが出たって負けないわよ」

「どうかな」

英彰はとぼけながらも、どこか余裕たつぷりな風情。

棒倒しの競技の集合がかかった。

それを合図にぞろぞろと男子生徒たちが出ていく。

「あーあー、やだな、俺暴力嫌いなのに」

「英彰、怪我しない程度に発散しろよ、棒倒しで」

「やだよ、棒倒しなんか。3年になってまでマジでやってられるかよ」

聞いて里奈は目を据わらせた。

悪かったねえ、3年にもなつて、競技で熱くなって顔に痣まで作っ  
てさ。

出口で英彰が振りかえった。

今まで里奈なんか存在していなかったかのように振舞っていたくせに、視線を向けてきた。

「野々村」

「なに？」

目の下を指でさしながら、

「大丈夫なのか？ それ」

すると養護教諭が里奈の代わりに陽気に答える。

「しばらくはパンダみたいになるかも知れないけど、お嫁に行くころにはキレイに治ってるわよ」

英彰は軽く笑って、今度こそ出て行った。

それを見届けた後、涼子が言った。

「真崎英彰。侮れないわね。顔だけ一流のええかつこしいと思ってたけど、あんな顔もするのか」

「そのとおりじゃない、顔だけ一流のええかつこしい。間接的にはあいつのせいで、この痣なんだからね。いたたたっ！」

奈津美が里奈の手の甲をつねったので、里奈は悲鳴をあげた。

涼子がわかってないなあと肩をすくめた。

「結構、いい男になるかもしれない。短気っぽいところも悪くないな」

里奈と奈津美は目を見開いて、涼子を凝視。

涼子は呆れたように、

「バカね、一般論よ」

救護テントを追い出され、しぶしぶ応援席に戻った里奈は、グラウンドで繰り広げられている棒倒しの光景に圧倒されてしまった。

「なんだかんだいって、男子の乱闘戦は迫力あるなあ」

ちなみに真崎英彰さんは言葉の通り、お手抜き参戦。

「あのヤロお……」

ラストの混合リレーを控えて、集合場所にぞろぞろと選手が集まる。

現在の経過、トップはE、次点はD、A、B、Cと順位が続いている。



上位3組までの得点は僅差でまさに接戦。

男女6人で走るこの混合リレーで優勝が決まるということで、熱気は最高潮。

激励にそれぞれのクラス委員も集まって、実にぎやかな光景が繰り広げられている。

もちろん里奈もクラス委員なのでその場にいたわけで、そんな中、A組がバトンプアスの練習をしているのに気がついた。突然参加になった英彰のためらしいけれど、すんなりとそれができるようになるのにはそう長い時間はかからなかった。

涼子が選手にエールを送っている間、そばに控えていた里奈の元に英彰が走ってきた。

里奈の前に立つと眼鏡を外した。

「持ってた」

差し出された眼鏡を反射的に受取りながら、あせって里奈は英彰を見上げた。

「な、なんで。それにあんた眼鏡なくて走れるの？ 見えるわけ？」

「

「本気で走るから邪魔なんだ。持ってた」

「え？ 見えるの？」

見えるよ、と英彰は言いながら、里奈から遠ざかる。

本気で走る？

本当にわかんないヤツだ。

真崎英彰というヤツは。

里奈が応援席に戻ると、奈津美がきゃいきゃい言いながら手招い

てきた。

「里奈、里奈！」

「なに？」

「真崎が眼鏡外してるの。カッコイイよ、ほんと」  
知ってるよ、目の前でやられたんだから。

リレーの選手たちが配置につく。

「里奈、それ」

「え？」

奈津美の視線は里奈が持っている眼鏡に注がれている。

「もしかして、真崎の？」

一瞬、しまったと思ったが、へたに嘘をつくのも白々しいような気がして里奈は素直に認めた。

「持ってるって……頼まれた」

奈津美の表情が曇った。

けれど、すぐに消し去って、取り繕うように明るい顔をする。

「な　んだ、そっか。ふーん」

里奈は奈津美の横顔を見つめたけれど、彼女の視線がこちらに返される事はしばらく無かった。

混同リレーはスタートが女子なので、奇数が女子走者、偶数が男子走者となる。

村上くんはトータルで4番走者だったらしい。

最初から英彰が出るようになっていけば、文句無くアンカーだっただろうけれど、順番を組み変えている余裕もなかったらしい、英彰は4番走者の所にいた。

棒倒しをかつたるとサボりまくっていた男とは別人のような真面目な顔。

眼鏡が無いだけ際立つ端正さ。

後輩が怪我させられた事、よっぽど頭に来てるんだな。

らしくないよ、後輩の敵討ちなんてさ。

全然似合わないから、そんな真面目な顔しなきゃいいのに。そんなことを考えていたら、背後から頭を叩かれた。

奈津美もやられたらしい、ベソをかいて頭を押さえている。

犯人はもちろん大野涼子さんだ。

「よそのエースに見とれてないで、自分トコの後輩にエールを送る！」

「見惚れてないよ！」

里奈がむきになっていい返すと、奈津美はキョトンとして、涼子はなんだか意味ありげにぼんぼんと肩を叩いてきた。

「ごめんね、素直じゃなくなっつ

女の子は素直じゃないとダメ

だぜべいべー」

「誰がべいべーだっ、古い歌、歌うなッ」

スタートしたとたん、歓声であふれかえったグラウンド。

トップはDだったので、里奈のまわりは一際歓声が高い。

「行け　　ッ！！」

なんとそれに、E、C、A、Bと続いて、後続はなかなかの混戦状態。

しかし、2番走者にバトンが渡っても、Dはぶつちぎりの1位独走。それには奈津美と手を取り合っつて、きゃいきゃい飛びあがりながらも、Aの不振が気にかかる。

しかし、去年も同じような状況で英彰が全てひっくり返して優勝した。

それを憶えているだけに、油断ならないところだ。

第3走者の女の子が走るころには奈津美は本格的に英彰の心配をはじめたらしく、胸の前で手を組んでいた。里奈はそれをちらりと見て、なんとも言えない気分になる。

Dがトップ、Aは相変わらず4番手。あ、コケたよこの女の子、繰

りあがって3位。

第4走者にバトンが渡る。

英彰にバトンが渡った時、Aの応援席からの歓声がとてつもなく大きくなった。

「な、なんであいつあんなに人気あるのよ」

「だって真崎だもん」

奈津美が早口に言う。根拠もなにもあつたもんではない。彼女はもはや自分のチームの行く末などどうでもよろしいらしい。

こうしている間にも、英彰はあっさりと接近していたEの走者を抜きさる。その様子に真崎突然出場の理由がまことしやかに囁かれていたチーム内、Aの応援席は沸きに沸いた。

涼子が負けじと2-Dの委員長をにハツパをかけながら、声を張り上げる。

「声がたりないっ！」

「ちよつと、また抜いたよ、なんであんな事できるの?!」

真崎ファンらしい女の子が叫ぶ。

「げ、1位のDに迫る勢いじゃんか。里奈は思わず口許を押さえた。

「ちよつと、大野やばい、真崎にうち抜かれちゃうかも知れない！」

言葉では自分のチームを心配して焦っていたけれど、ちよつとだけ他の女の子みたいに英彰が抜いちゃったりするのに喜んでいたり、声のトーンが高くなってしまった。

けれど、涼子は意外と冷静にこんな事を言った。

「あいつがアンカーじゃなくてよかったわ。距離が短いもの」

女子100m、男子200m、アンカーの男子のみ怒涛の400m。英彰はバトンを渡した。

Dの走者は寸でのところで逃げきり、そのままなんとか1位を死守。よほど本気で走ったのか、英彰はグラウンドに膝をついて、そのままごろんと仰向けに寝そべってしまった。

里奈は彼に渡されていた眼鏡を見つめて、そうしてからまたグラ

ンドで転がっている英彰に視線をさせた。

「似合わないよ、ドロだらけの体操着なんて」

校舎内の水道で顔を洗っている英彰の背中に声をかける。

彼は一人だった。

体育祭の最中、校舎への立ち入りは基本的に禁止なので、人の気配はなく、静けさが漂っていた。

タオルで顔を押さえながら、英彰が振りかえる。

「ああ……」

里奈はなんとなく照れながら、英彰に歩み寄る。

「真崎って汗とか根性とか似合わない感じするもの」

英彰はまだ、余韻を引きずっているらしい。水道の蛇口をひねりながら、うなるように言った。

「歳は取りたくないよな、絶対に抜けると思ったんだけどな」

「なっ、あんた本気で1位になるつもりだったの？」

「進学校の運動不足の連中相手じゃいけると思った。甘かったな。

距離があと5メートルあれば……」

なんてぶつぶつ言っている。

どうやら本気らしい。

眼鏡を渡すと、英彰は受けとって里奈にも言いたげな視線を向けてきた。

「リレーの後、なぜか外野がうるさくてかなわないから、しばらく隠れてようと思って」

「なにそれ」

「閉会式、サボろうかと」

「え？ まずいんじゃないの、それ」

「そうかな」

「そっだよ」

「あんたのところは準優勝じゃない。うちは優勝しちゃったし」

眼鏡をかけて顔をあげた英彰は、いつもの涼しい顔になっていた。そして、なぜかあくびを噛み締めて、言うことには。

「今日は昼寝してないから、眠いな」

里奈は呆れて目を半分にしなから、

「子供じゃないんだから」

笑いながら英彰が踵を返す。

「どこ行くの、屋上？」

里奈が尋ねると、頷いて英彰は階段を昇り始める。

「野々村も来る？」

「なんでわたしが」

そっけない答えに、つまんなそうに英彰が階段を昇っていくのを見上げながら、ついていってもいいかな、なんてちらりと考えて慌てて打ち消した。

ぶんぶんと頭を振って。

でも。

汚れた英彰の背中が、いつもの姿よりも好ましく思えた。

片付けの後すぐにゴールデンウィークに突入。

不本意に痣などを顔に作ってしまった里奈は、しばらく学校へ行かなくてよい事にほっとしていた。

連休が明けるところには痣も消えているだろうし。

しかし、家教聡明をお迎えするにあたっては、あまりにもあっぱれな痣になった目の下を隠すために眼帯を試してみた。

さすがの都村聡明先生も何事かと思っただけだが、事の顛末を聞いて、楽しそうに笑い転げて、

「いいじゃん、コーコーセー。それでこそせーしゅんだな、せーしゅん」

「なにがせーしゅんよ。バカにしてっ。後で考えたんだけどさ、スニーカー投げたんじゃなくて、絶対に飛ばしたんだよ。あーした天気になーあれッってやるじゃない?! あの勢いで飛ばしたんだよ、絶対」

エキサイトする里奈に聡明はますます大笑い。

そして、あるうことが眼帯を取ろうと手を伸ばしてきた。

「見せてみな、どんな痣なんだか」

「やだ、やだっ」

「すっげえ、見たい。見せてみ？」

「やだっ」

聡明にこんなお化けみたいな顔、見られるのはごめんだもん!

里奈が必死でガードするけれど、聡明はやるとなったらやる人間だ。トンでもない方面から問題解決に挑むやつなので、なにをするかわからない。

聡明は里奈の片方の手首つかんで、えらっそうに言い捨てた。

「悪い、ちよつとセクハラするわ、耳貸せ」

「へ？」

手首を掴まれたことと、「セクハラ」に驚いて動きを止めた里奈の耳に手をかけて、いとも簡単に眼帯をはずしてしまつう。

「……たいしたことねえじゃん」

顔をのぞきこまれて、ますます焦る。

今、聡明の目を近く感じる。かなりニアミスしているはず。

一瞬思い出した、病室でしてしまったキス、聡明の無防備だった口許。

里奈がこんなに焦っているのに聡明は、諭すようにこんなことを言う。

「片目で活字読んだりすると疲れるからさ、俺といる時は気にしないでいいから。んなのは許容範囲」

「で、でもさ」

「学校じゃさすがにおまえが気になるだろうからそれでも仕方ねえかもしれないけど。でも、家にいるときくらいは無理すんな」

触れられた耳を押さえながら真っ赤な顔で俯く里奈を横目に、聡明はこほんと咳払いして参考書を開いた。

「全然平気だ。おまえが思ってるほど目立たねえよ、それ」

「うそ」

「まじで」

「……変だよ」

「色がついてるだけじゃなか。別に腫れてるわけじゃねえし。いつもと変わらんよ」

「普通の顔がそんなにブスなわけ？」

拗ねながら言う里奈に、聡明はいたずら坊主みたいな意地悪な笑みを浮かべる。

「ブスって言うって欲しいのかよ？」

「……ふんだ、いぢめっこ」



悪態をつきながら、里奈はそつと先刻掴まれた手首を違う方の手でそつと押さえた。やっぱり男のひとなんだなと思った。力が強い。ちよつと掴まれたただけなのに動けなくなつた。

些細なことなのに、心臓は弾けそうだ。

あー、どきどきする。

聡明は時々心臓に悪すぎる。

あなたにだから、見られたくないんだけどな。

ゴールデンウィーク中、一人娘が受験生だということで、派手な行楽を控え、ノンビリ昼下がりを過ごしている野々村家に1本の電話が入つた。

受けたのは母親で、浮かればかりの喜びようで里奈の部屋までやってきた。

「里奈ちゃん、お電話」

「へ？ 誰？」

「真崎君っていう子から。すつごく礼儀正しいのね」

真崎、と聞いて、里奈は首をかしげながら母親の差し出した子機を受取る。

会話の内容が気になるのか、名残惜しそうな母親を押し出して、ドアを閉めると、里奈はベッドに座つて、子機に語りかけた。

「ごめんね、お待たせ」

「いや、突然ごめん」

英彰の声が心なしか掠れている。

図書館は祝日はお休みなので、里奈は出かけていない。

「どう？ 顔の痣」

「喧嘩売つてんの？」

「いや、心配してる」

「ほんとかあ？……ま、いいや。おかげさまで1週間もたてば自立

たなくなりました」

「そっか、それならいいか。明日、なんだけどさ」

「明日？」

「部活終わったあと、勉強会みたいな俺んちでやるんだ。石河が来るんだけど……野々村も友達誘ってこないか？」

「真崎、塾は？」

「ないよ」

「ふーん」

ふーん、といいながら、里奈は赤面しちゃったりして、どうにも照れて仕方ない。

「真崎家に行けるとなったら、希望者殺到だよ、きつと」

里奈がからかうように言うと、英彰は興醒めっぽい溜息でお返事。

「大野は？」

「大野？」

「あいつ、おもしろいから」

おもしろいのもあるけれど、大野涼子は真崎英彰に一カケラの興味もなさそうだからに違いない。

「大野も多忙だからね……一緒に行ってくれる人がいたら行ってもいいけど……奈津美でいいかな？」

「ああ、根本？ いいよ」

奈津美なら、きつと2つ返事でOKだ。

英彰の家に行けるとなれば、きつと喜ぶはず。

「俺の携帯教えておくよ。都合ついたら連絡して」

「うん」

「野々村は持ってたよな？ よかったら教えて」  
不思議な困惑が里奈をつつむ。

嫌じゃない、でも、困る。

なんだろう、この気持ち。

「いいけど……言っね」

「うん」

里奈は自分のナンバーを口にしかけて、やっぱりやめたと言を出した。

肩透かしをくらって英彰がブーイング。

「なんだよ、それ」

「うちのママが真崎からの電話楽しみにしそうだから、親孝行」

「うちのママが？」

英彰はからかうように繰り返して、しかたねえなあと言った。

「俺のナンバーいうから、メモってよ」

「あ、うん、わかりました」

ナンバーを交換して、電話を切った。

そうしてから、里奈はふうと、息をつく。

この2ヶ月で、ホント急接近。

英彰はやるようになったら、実行派。

疎遠になんて絶対になつてやらないと言ったこと、本気だったんだなと里奈はしみじみ思う。

でもそれを嫌だと思つてない自分も、なんか変だとも思うわけで、なにかとココロは複雑極まりない。

奈津美の好きな男の子、恋と友情では友情の方がまだ重いはずだし。なにより、わたしの好きな人は聡明だ。

エンドレスな片想いだけど、聡明より好きになれるひとのことなんて未だ想像できないし。

想像。

「ちがーうー！！」

里奈はぶんぶんと言を横に振った。

真崎英彰は論外。

だめだめ。

ベッドに横になつて、里奈は枕を抱えこむ。

2ヶ月前まで、大嫌いだったあいつを。

大嫌いじゃなくなっている。

ちよつと頭がイタイ。

いや、かなりイタイな。

奈津美に電話をして英彰の家での勉強会のことを伝えると、はじめは飛びつくように2つ返事でOKだったが、そのうちに声のトーンが落ちて、こんなことを言い出した。

「他の友達誘うの？」

「うーん、みんな予定あるだろうからね。真崎は大野なんか呼んでくれて言っただけど」

「涼子?!」

「おもしろいんだって」

「確かに涼子はおもしろいけど」

里奈はくすくす笑いながら、奈津美をからかった。

「いいよ、1人でも増えれば真崎と話せるチャンス減っちゃうもんね」

「そういうわけじゃないの、違うよ」

「いいよ 電話をかけるのも面倒だし、2人で行こう」

「うん」

奈津美の返事がわずかに曇る。

それは里奈には届かないほどに微妙な響きをしている。

新緑の季節は外出も心地いい。

真崎家には行った事がないので場所がわかりません、と言ったら、最寄の駅まで迎えに来てくれると英彰は言った。

奈津美と電車で揺られながら、里奈は殆どなくなった目の下の痣を指でさすった。

今日は学校の友達に会うので、里奈は控えめに唇に薄い色のリップをのせただけの顔。紫外線よけに日焼け止めを塗っただけ。ファンデーションだったら痣も完璧に隠れるのに、なんて考えて溜息をつ

いている。

「勉強会なんて真崎がやるとは思えないけどね」  
里奈が言うと、どうして、と奈津美が問い返してきた。

「なんとなくね、そういうけじめってしっかりつけてそんな感じがする。あいつ。去年の予備校の冬期講習でもずっと1人でいたし」

偶然一緒になった予備校の冬期講習で、学校ではいつも誰かに囲まれていた英彰が、殆ど誰とも言葉を交わすことなく、もくもくとペンを走らせていたり、ぼんやりと外を見ていた姿を思いだす。

「里奈は真崎のこと結構わかってるよね」

「んー？ そんな事ないよ。勉強会なんてテストがあるからね、そのせいかもね、きっとそうだ」

連休明けにはお決まりの実力テストがある。

コースが分かれた今となっては、英彰ら理系と里奈たち文系ではテスト科目も違ってくる。

それで誘うあたり、やっぱり矛盾しているけれど。

「里奈に会いたかったりして」

奈津美が突然さらっと口にした言葉に、里奈は表情を止めた。

思わず奈津美を見つめると、奈津美は冗談よ、といったものように明るく笑って里奈の背中を叩いた。

けれど、衝撃度はかなりのもので、里奈は上手く笑い返すことができなかった。

改札を出ると、英彰と石河少年が律儀にそこで待っていてくれた。挨拶もそこそこに、すんなりと合流して、4人は歩き始める。

英彰が里奈のトートバックが大きいことに気がついて、

「随分張り切って抱えてきたね」

「お昼ご飯。ママが……じゃなくて、母親が持ってきているさ  
くて、お弁当。奈津美は昨日焼いたお菓子持ってきたんだって。奈  
津美はそういう女の子っぽいこと得意なの」

奈津美に話題を向けると、彼女は恥ずかしそうに首をすくめた。

「それは嬉しい」

石河が奈津美に笑いかける。

奈津美はいよいよ首をすくめて、里奈のカーディガンを掴んだ。

真崎家は高層マンションの15階だった。比較的できたばかりらしく、真新しさが目に付く。

「キレイだね、この建物」

「できて3年くらいなんだ」

エレベーターを降りてすぐに英彰は右に曲がり、一番奥の部屋のドアに鍵をさしこんだ。

「どこでもドアが欲しい」

「無理」

石河の優しくも容赦のない突っ込みに英彰は肩をすくめる。

里奈がものめずらしさの余り辺りを見まわしていると、となりで奈津美が深呼吸する音が聞えてきて、なんとなく笑ってしまった。

「ご両親いるのかな」

こっそりと奈津美がささやいてくる。

里奈は首をひねった。

「たぶんいないと思うよ」

英彰が皆を促して、それぞれ靴を脱いで足を踏み入れた。

長い廊下にドアがいくつあつて、最後に広いリビングとそれに続くダイニングキッチンだった。ベランダが広く作られていて、リビングはもちろん、キッチンにも明るい陽射しがさし込んでいる。

「親はもう出かけたから、ココでやろう。俺の部屋より広いし」  
英彰の声がキッチンから聞こえてくる。

冷蔵庫を開けて、のぞきこんでいる。

「なんか飲むかー？」

石河は勝手知ったるという感じで、ソファーに座ってそれぞれ参考書なんかを出し始めている。

「麦茶とジュースがあるけど……野々村、悪いけどヘルプ」  
「え？」

顔をあげた里奈に、対面式のキッチンから英彰が呼びかける。

カウンターのの上に1.5リットルのペットと麦茶の入ってるボトルをのせている。

「俺、コップ出すから、このペット頼むわ」

「はいは……」

返事をしかけて、里奈は思い止まった。

英彰が関わる事は、全て奈津美に振ってあげよう。

「わたし疲れちゃった。奈津美、ごめん、お願い」

「いいよ」

奈津美がカウンターでジュースを受取っている姿を見ながら、里奈はやれやれと息をついた。

我ながら、なんて白々しいことをしているのだろう。

「わかんない、あれ？　なんか忘れてる気がする、何か足りなくて」

「んー？　ああ、これ、垂線1本入れるんだよ」

「真崎はなんで英語がダメなわけ？　数学すらすらとけるのに」

「頭が理系なんだよ」

「英語なんて暗記科目じゃん」

「そおか？！　絶対違うよ。だってさ、コレってもんがない」

「なに、コレって」

「数学は答えが一つだろ。なのに方法はいろいろあるわけ。どんな問題だっているんな方面からつついて答えが出てくるけど、英語は

知らない単語があつたらアウトじゃん。俺、知らない数字ないし」  
「えー？ それは数学だよ。公式知らなかったらそれこそアウトだもの。英語は前後の意味がわかればなんとかなりそうな感じがするし。わたし、三角関数習った時、数学には絶望しかないと思ったよ。物理でやったモンキーハンティングなんかどうしたよそれが、つて突っ込みたくなる」

「あんなにおもしろいもんないだろ。俺、古文もキライだな。日本語じゃないよ」

「かつては日本語だった……はず」

「俺はあいにく現代人なんだよ」

「わたしたちがお勉強してるのはあいにく現代英語」

「だから、アレはモロに日本語じゃないって」

「数学のほう絶対一般人のやることじゃないよ。だって数字だよ？ 暗号じゃないんだから絶対に意志疎通を図れないし」

「学問は見聞を広めることであつて、意志疎通を図るもんじゃない」  
「孤独なんだね」

「そ、孤独な作業だよ」

英彰との会話が途切れて、ふと顔をあげると、他の2人がもの言いたげに英彰と里奈を眺めていた。

代表して石河が世界史の問題集で口許を隠しながら言った。

「おまえら、同じ科目やったら？ 野々村が数学やって、真崎が英語やって、お互いにわかんねえトコ訊きあうから脱線するんだよ」

「あ、ごめんうるさかった？」

「いや、うるさいというか」

応接セットのふかふかのソファーに身を沈めたまま、里奈は参ったなと口を噤む。

英彰は床に直接腰をおろした状態で、そのまま背伸びをしてソファーに寄りかかった。

そして、里奈を見上げてくる。

「コンビニ行かない？」



「コンビ二？」

「息抜き」

息抜きと言われて里奈は壁にかけられている時計を見た。勉強をはじめてから2時間が過ぎている。

「真崎、チャリで行ってきてよ。俺、なんだか腹減った」

石河がお腹の辺りを押さえながら言う。

ギョツとして里奈は石河を見つめた。

「さっきご飯食べたばかりじゃない」

「さっきって、もうかなり時間が過ぎてるよ」

「さすがバスケット部、その大きな身体を維持するにはかなりのエネルギーが……」

「え？ 俺なんか普通だよ。真崎は1日にどれくらいご飯食べる？

食うとなったら、俺、2合は軽くいけると思う。あ、3合か4合……」

……？」

「俺はそんなに食わないけど、食おうと思えばいけるな」

奈津美も2人姉妹の妹をやっているの、そういうすさまじい食欲というものに直面したことがないらしい。目を文字通り真ん丸くしている。

「2人も太ってないのに、どこに入るの、ご飯」

英彰と石河が顔を見合わせた。

「どこって……腹？」

「胃だよな」

ダイエツト中をのぞけば、女の子からするとよく食べる里奈でさえ1日2合が軽いという食事が想像がつかない。

英彰が思い出したように奈津美に言った。

「根本はホント食べないね。学校でも野々村の半分くらいの弁当だったしさ」

里奈は無言で英彰の後頭部を張り倒した。叩かれたところを押さえ、英彰が軽く睨みながら振りかえる。

「あんたってほんっとヘンなこと見てるし、覚えてるし……」

「だってさ、あんたたちの弁当つまそうだったから」

「あー、俺も根本の弁当覚えてる。卵焼きがつまそうだったけど、一口でいけそうな弁当だったよな」

石河がのほほんと言っているので、ただでさえ赤面していた奈津美がいよいよ俯いてしまう。

そこで里奈ははっとした。

「そうだ、奈津美の料理上手をアピールしよう。」

「そう思ったらなぜか右手に握りこぶしを作って、力説していた。」

「奈津美はね、毎日自分でお弁当作ってるの。お姉さんの分と2つ。ね？」

「うん、うん」

「へえー」

英彰と石河が感心したように奈津美に注目するから、戸惑いの表情で奈津美は里奈に視線を向けてきた。

「可愛い。可愛すぎる。」

「こういうのを女の子っぽい反応っていうんだらうなあ。」

里奈は奈津美の肩を抱き寄せて、

「高校卒業したら結婚しようね。わたし一生懸命稼ぐから、奈津美はおいしいご飯をつくってね。幸せな家庭を作ろうね」

「うん、考えとく」

里奈の大袈裟なボケに奈津美がようやく笑顔を見せた。

呆れたように英彰が肩をすくめて、やれやれと腰をあげた。

そして、当然のように里奈に言った。

「なんか買いに行こうよ。石河も腹減ったらしいしさ」

「うん、俺の胃がブリト を求めている」

石河はお供するつもりはサラサラないようで、床に座ったまま英彰を見上げて手なんか振っている。

里奈は一息ついて、石河に倣って英彰に手を振った。

「わたしのお腹はティラミス、ティラミスって言ってるんだ」

「なんだよ、そのバイバイは」

「わたし、もう少しでこのページが終わるからやっちゃいたいの」  
ワザとらしく問題集を広げなおすと、そっか、と英彰はあっさり頷いた。

1人で行くつもりになったらいい、ついとリビングから消えて、自分の部屋から自転車の鍵を持ってきた。

「奈津美、真崎ひとりに任せておくと外れ買ってきてさうだから、一緒に行ってきてくれる？」

「え？ あ、いいけど」

「うん、ごめんね」

自転車の鍵をくるくる指先で回していた英彰は、わずかに目を眇めて里奈を見ていたかと思うと、やがて首をかしげて奈津美を促した。

「根本はスカート平気？」

「え？」

英彰は玄関に向かつて歩き出しながら言った。

「2人乗りするのに、スカート平気？」

「重い？ ゴメンネ」

英彰の背中に遠慮がちにしがみついて奈津美が何度もそう言うつから、英彰は笑いながら答えた。

「全然」

奈津美からすると今の状況は夢にだって見ないような、すごいことになっている。

だって、だって、真崎英彰の自転車にのせてもらって、背中につかまってるなんて、こんな大接近どきどきするなと言うほうが無理だ、絶対。

フレアーのスカートを片手で押さえながら、ここのとこの複雑な感情をどこかに押しやって、ひたすら里奈に感謝する。

どうか、心臓の音が彼に伝わりませんように。

英彰がいないので石河に教えてもらいながら、ようやく難解な図形問題を解き終えて里奈はほっと息をついた。思わずグラスに残っていた麦茶を一気のみ。

「野々村はさ」

「え？」

グラスに口をつけたまま横目で石河を見ると、彼は口籠もりながらも、渋い顔をして、

「なんていうか、罪な女だよな」

麦茶を噴くかと思った。

寸でのところで飲み干してけほけほせきこみながら、里奈はグラスをテーブルに置いた。

「なにそれ」

「いや、タイムリーな現代用語が出てこなくて申し訳ないんだけど、なんか真崎が気の毒になってきた」

「真崎が気の毒？」

「本人は絶対に自分から言ったりなんてしないけど、真崎って単純だからさ、野々村のこと好きなんだってわかつちゃってるわけだよ、オールバスケット部員は」

「気のせいだよ、そんなの」

イヤな方向に話がむいてきたので、里奈は居心地の悪さの為に石河から視線をそらした。

そんな里奈を石河は見上げてきて、言うことに。

「バスケット部の3年で賭けやってるんだよ」

「は？」

「真崎は野々村を落とせるか」

「なっ……！！」

里奈は頭に血が昇って弾けるように立ちあがった。

「真崎には内緒で頼む。あいつ切れると怖いから」

「あつたりまえ。切れて当然よ」

「期限は卒業までなんだけど。俺の五千円がかかってる大勝負なんだ」

「バカじゃないの、バスケット部って」

「真崎はイヤツだよ。基本的には」

石河はどちらに賭けたと明言することなく、さらりとそんなことを言っけて口を閉じた。

大きな戸惑いを抱えこまされて、力なくソファーに腰をおろした。

「あ、真崎君彼女？」

コンビニのレジのおねさんが英彰に親しげに話しかけてきた。

女子大生のアルバイト的な雰囲気にな津美はたじろぐ。

英彰はにっこり笑って、友達と答えながらかごを手にした。

そして、さつさと雑誌のコーナーを回って、お弁当コーナーへ足を運ぶ。

奈津美はとことこ彼について行き、英彰に尋ねた。

「どうして真崎の名前まで知ってるの？」

「俺、ここの常連だから」

「常連……って、名前まで？」

「ねえ、ティラミスってこれ？」

「うん、そう」

「根本は？」

「レアチーズ……あの」

「なに？」

英彰に見下ろされて、奈津美はその次の言葉が出てこなくなってしまう。

なんでもない、と首を横にふるだけ。

大学生の彼女って、あのひとじゃないよね。

英彰はくすりと笑って再び陳列されたデザート類に目を向け始めた。

「女の子ってこういうの好きだよな」

「うん」

「来月あたり」

「え？」

「野々村とうちの親のやってるレストランに来なよ。土曜の午後はデザートバイキングやるらしいから」

誘っている言葉の割には他意はなさそうで、英彰は足をすすめて隣の棚に移動する。

「うん、行く行く」

奈津美が笑顔で返事をする、改めて自分の言葉に気がついたように英彰は足を止めた。奈津美をゆっくりと眺める。

いつも里奈の側にいるから、お互いにたくさん話しているような気がしているけれど、実際はまともに言葉を交わすことが少ない二人だった。

奈津美が笑顔を見せ始めたので、英彰は一気にくだけたように奈津美に尋ねた。

「野々村の目の下の痣なだけどさ、あれ、偶然？ にしては随分ひどいよな」

奈津美はどうしたものか、言葉を選んでしまう。でも、隠してもいずればわかることだろう。

「タイヤの時にね、靴が飛んできたの」

「靴？」

「うん、里奈の事狙って」

英彰の表情が止まった。そしてそのまま黙りこむ。

「里奈は、そういうのに負けないから、ずっと……そんなことがあっても負けないから」

「ずっとって、今までもそんなことあったわけ？」

奈津美は英彰をちらりと見上げた。英彰が視線で問いを重ねてくるから、英彰にはどうしようもなく弱い奈津美はどうしても隠すことができない。

「真崎と……一緒にいることが多いから、去年から靴をかくされた

りとか、睨まれたりとか、階段の上からテニスボール落とされたりとか、生卵だったりとか……それは里奈にあたったことないんだけど。あとは不幸の手紙もらったりとか……あの、真崎のこと好きな子多いから」

「不幸の手紙?!」

英彰がギョツとする。

「あいつ、それどうしたの」

「家庭教師のひとに渡してるみたい」

「家庭教師。渡してどうするの」

「笑い飛ばしてもらおうと、安心するんだって。御払いみたいなもんだって言ってた。ヘンな呪文を言いながら目の前で破いてくれるんだって」

一瞬、英彰の瞳が不自然に揺らぐ。

でもそれは、眼鏡の奥のことだから奈津美には見えなかった。

「そっか」

力なく咳く英彰は溜息をつく。

「あの気にしないでね、里奈は元気だから」

「うん、大丈夫。ちょっとむかついてるけど」

「むかついてる?」

奈津美が問い返すと英彰は繕うように首を振った。

「なんでもない。早く帰ろう。待ってるよ、あいつら」

帰り道、自転車の後ろに乗せられて、奈津美はもう1度やってくる切なさこそやるせなくなってきた。

もしかしたら、ううん、たぶん。

真崎は里奈のこと、好きなんだよね、特別扱いだものね。

受験生なんだから、こんな不安定な気持を抱えこんでいたくない。里奈と友達でいることに行きは感謝していたのに、帰り道は寂しさを感じている。

ひらひらひらひら。

スカートが揺れて広がりそうになる。

それを押さえなきゃならないことも、なんだかイヤ。

いつそのこと、名前なんて覚えられないほうがよかった。

コンビニから帰ってからの英彰のテンションが低く、もくもくと問題集に取り組んでいる。男の子はいざ集中し始めるとスゴイなあの的外れなことで感心している里奈を奈津美が横からしみじみ眺めている。

夕暮れが迫る時間に、里奈と奈津美は英彰の家を後にした。

英彰と石河はこれからどこかに食事に行くと言い、一緒に出て駅まで送ってくれた。

帰り道、それはそれぞれに想いを抱え込んだものになり、石河だけがそれを感じているのかどうなのか、能天気なことを英彰に語りかけていた。

「どうしてポチっていう名前の犬は雑種とか日本犬限定なんだと思うっ？」

「ドーベルマンだのプードルだのをポチなんて呼びたくないからだろ」

英彰の実にそつのない答え。そんなもんか？ と首を傾げていた里奈に英彰がなにげなく視線を向けてきて、ふっとそらす。

それをされて、心臓がドキリとした。

意味もない、ただのそれなのに、どうしてか。  
胸が痛んだ。



英彰は携帯電話を耳にあてながら、ベッドに横になった。天井を眺めながら呼び出し音を聞いている。

「珍しいじゃない？ どうしたの？」

今春、女子大生になられた従姉弟の岩崎玲子さまは、相変わらず高飛車なもの言い方をする。

「訊きたいことあってさ」

「なに？」

「訊き辛いんだけど、俺のこと好きだって言ってる連中ってそんなにいるの？」

「訊きづらいつて割には、あっさり尋ねてくれるじゃない」

「うるさいよ。どうなの？」

「校内に団体さまでいるし、ああなるとファンクラブよね。別に公式団体じゃないけど。英彰を眺めてきやいきやいって喜ぶことで、仲間意識を連帯感として持ちながら、お互いにお互いを牽制しあってるってどうか。ああして騒ぐことで真崎英彰様不可侵条約を結んでるのよ。ちなみに桜ヶ丘女子高にもあるわよ。うちの学校の女の子達とは仲が悪いけどね」

英彰は不覚にも言葉を失っていた。

わが身ながら、そんなことになっていとは思ひもなかった。

そりゃあ、一般的な男よりはもてることは自覚していた。

目に見えるところでは、バレンタインのチョコレートだって抱えきれないほどいただいたりしているから。

「マジで？」

「あなを騙して遊ぶほどひまじゃないわ」

「……野々村が、いやがらせされてるのも知ってた？」

「うん」

「そっか」

今更になって、里奈が英彰と2人で行っているのがイヤだと言った重みを理解する。

本音であったことに傷ついてしまいそうになっている、己の度量の狭さがイヤだ。

「俺、あいつに迷惑かけてたんだ？」

「間接的にかなりね。どうしたの今ごろ」

「体育祭で競技中に運動靴ぶつけられて、あいつ顔に派手な痣作ってた」

「あらまあ」

さすがの玲子も言葉が出なかったらしい。

しかし、そこはさすが玲子で立ち直りも早かった。

「英彰にできることって何も無いのよ。疎遠になることくらいしか。でも疎遠になったって、みんな勘ぐるからね。カムフラージュじゃないかとかいろいろ。結局同じよ。彼氏だったりしたらそれこそ手をだすな言えるだろうけど、英彰は違うしね」

相変わらず、ずけずけとものを言う女だ。

彼氏になれるもんならさつさとなりたいたいだよ、俺だって。

「そうなるだろうと思って玲子さんは秘密兵器を授けたのに、あの子そのの意味に気が付いてもいないんだだろうな」

くすくすくす。

彼女の軽やかな笑い声が癩に障る。

英彰は眉を寄せて、低い声を出した。

「笑うなよ」

「久し振りに野々村さんに会いたいな」

「よせよ」

「受験生でしょ？　せーしゅんのお悩みなんてやってるヒマないはずよ」

正論で突かれて英彰は唸る。

そう、そうなのだ。

「大学生活楽しいわよ」

「うるさいよ」

電話を切った後で、英彰は眼鏡を外して机おいて、深く息をつく。

そして、体を横たえたままベッドの上で頭を抱えこんで天井を睨んだ。

どうしてこう、俺は。

あいつに疎まれる条件が揃っているのだろう。

ゴールデンウィーク最後の日。

日曜日で祝日ではないので、図書館も開かれていると考えた里奈は、昼食の後、数学の問題集を持って出かけた。

学校向けのスタイルの昨日とは違ってお洒落もちゃんとした格好で。

口紅をのせた唇はちゃんとお気に入りの色に染まっているし。

確かに大学生に見られてしまつかもしれない。

確かに今の姿は「みつあみで髪をまとめている当然のようにノーメイクの優等生さん」からはかけ離れている。

両親はそんな里奈の隠れた背伸びを正直快く思っていない様子だが、登校時には高校生らしさを貫いているのでよしとしているようだ。

図書館の入り口の階段をのぼり、中に入ろうとした時、里奈は目を眇めた。

図書館の隣に面した公園には、ハーフコートのバスケットゴールがある。

普段は3on3をやる少年たちでにぎわう場所だが、休日の午後なのに人影がなくて静かなもの。里奈が目を止めたのは、英彰が歩いてくるのが見えたからだ。

部活帰りなのか、いつもの大きなバッグを肩から下げている。

そんな彼の右手にはバスケットボールがあつて、人差し指の上でまわして遊んでいる。歩きながらなので手元が狂ったのか、ボールが落ちた。英彰はフットワークも軽く、跳ね返ってきたボールをすくうように片手で拾って顔を上げた。里奈に見つめられていることに気がついたらしい。彼も足を止めて静かに見つめてきた。

心臓がドキリとはしたけれど、彼がいたことには驚かなかった。

どこかで予感のようなものがあつたから。

里奈は英彰のもとに足を運んだ。

英彰は黙って里奈が来るのを立ち止まって待っていた。

「部活だったの？」

「うん」

英彰の様子が微妙に違う。

怪訝に思つてのぞきこむと、彼はどこか落としがちの視線。

「昨日はありがとう」

「こっちこそ」

くすぐつたい時間だった。

英彰が言う。

「その大学の前、通つてきたんだ。都村さん、いるかなって一瞬考えた」

「なんで真崎がそんなこと思つるの？」

英彰の口から聡明のことを言われるとは思っていなかったもので、里奈は目を見開いた。

里奈がこの図書館に通つのは、聡明が籍を置く大学が近いから。それを英彰も知っている。だから、口にすることに不思議はないけれど。

彼らが顔を合わせたのは里奈が記憶する限り2回だけだったような。

「なんだろう……あの人と話したい気分だからかな。野々村がうらやましいよ。ああいう人が家庭教師なんてさ」

英彰がととてもとても素直な目をして言うから、里奈もあっさりとしてそれを認めた。

「うん。ラッキーだったって思つてる」

「野々村が頼りたくなるのもすごくわかるよ」

言つて、英彰は空を仰ぐ。ため息混じりに目をわずかに細めて。さらさらとした前髪を風が揺らして通りすぎる。

「聡明に会いに行こうか……?」

伺うように里奈が言うと、英彰は笑って首を横に振った。

「いいよ。会えば会ったで、へこむから」

へんなの。

なんだかテンションが低いぞ。

首をひねりながら里奈は英彰の手元に腕を伸ばした。

「ボール貸して」

「どうぞ」

ボールを受取ると、里奈は緑色に染められたコンクリートの上に落としてみた。

それはポン、と小気味のいい音をたてて、里奈の手元に戻ってきた。

「大きいね。片手で掴める男子が信じられないよ」

「俺からすれば、野々村の手の小ささのほう信じられないけどな」

「そお?」

2人はそれぞれの手をなんとなく眺めて、ふっと笑いあった。

里奈がボールを鞠つきのような手つきでドリブルする。

「バスケット苦手じゃないけど……シユート、どれが得意?」

「んー?」

「いろいろあるんでしょ?」

「あるよ」

「見せてよ」

「シユート?」

「うん」

英彰にボールをバスすると、英彰は片手で受けとめた。

「外したらごめんな」

肩にバッグをさげたままでボールを片手で掲げる。目を眇めてゴールをのぞきこみ、わずかな背伸びと共に投げた。

距離が近かったせいもあり、ボールはすんとネットをくぐって落ちた。

感心もしたけれど、あまりにもあっさりと決めてくれたので、里奈

としてはなんだかおもしろくない。

「もつと芸のある奴が見たいなあ。ドリブルシュートとか」

「ドリ……レイアップのほうが簡単なんだけど」

「レイアップ？」

「おまえのいうところの、ドリブルシュートだよ」

転がってきたボールを英彰が拾う。彼の手にボールが吸いついてゆくようにも見えた。

肩からバッグを下ろして、英彰はわずか3回のドリブルのあと、地面を蹴った。まるでゴールに置いてくるような手つきでシュートをする。

「スゴイ！」

里奈が無邪気に喜んで見せると、英彰は困ったような、照れた顔をした。

「こーゆーので喜ばれてもな」

「ダンクってできる？」

「できない」

「ええー?!」

里奈がブーイングすると、英彰はだつてさ、とブツブツ。

「身長が足りないんだよ、身長が。ジャンプ力はあるほうなんだけど、遊びでやってる時は10回に1回くらいはまぐれで入ったりすることもあるけど……」

「真崎、身長いくつ？」

英彰のフットワークは軽い。

ドリブルをしながら、腕を背中にまわして、ひょいとシュートをする。

「182cm」

「充分大きいじゃない」

「野々村がテレビとかで見てるNBAの選手は2m近いのがゴロゴロしてるわけ。みんなでかいから2mの大男も普通に見えるんだよ」

「2m?!」

「そつだよ」

言いながら、英彰は片手にボールを持って、ゴールにむけて高く飛びあがる。

「あー、ダメだ」

ダンクシュートとして叩きつけられたボールは、リングに当たってはねかえってきた。

里奈は笑いながら彼を冷やかした。

「ハズレ〜！」

「うるさいって」

英彰はそんな里奈に顔をしかめて見せて、今度は離れたところからのロングシュート打つ。

「野々村」

「んー？」

「ごめんな」

「なにが？」

「いろいろ。顔の痣とか」

言われて里奈はなんとなく痣のあった目の下を指で押さえた。

「なんで。真崎とは関係ないよ。競技中の乱闘なんて結構あるじゃん」

ボールがコートを跳ねる音が途切れた。

里奈の顔からだんだんと笑みが消えていく。

動きを止めた英彰が真摯な目で見つめてきたから。

彼はそうしてから、視線を落とす。

「野々村の真面目なところが好きだ」

突然ストレートに言われて、里奈は驚いて身体をすくめた。

「はじめは見た目だった。第一印象は硬そうなヤツだって思ったけど、顔とかそういうのクライじゃなかったから、なんとなく気になつてたんだ。でもさ、おまえの爪がキレイに手入れされてるのに気がついて……もっと気になるようになった」

思わず開いていた手をグーに握ってしまった。

ソナトコ見られていたとは。

里奈が落ちつかない気分になっているのに、英彰は淡々と言葉を続けた。

「一緒にクラス委員やってわかったことなんだけど。おまえが成績がよかつたり、バレー部でもないのにやたらレシーブが上手かつたりするのは、ちゃんと練習してる……コツコツバカ正直に努力してるんだって気がついた。俺にはそういうけなげさがなかったから、びっくりしたんだ。マジで」

くすぐったい気持も手伝って、里奈はワザと不機嫌な顔を作った。

「わたしのことバカにしてる？」

「うん。バカ正直過ぎて、びっくりして、もつともつと気になった。掃除とかそういうのもサボればいいところもアホみたいに丁寧にやってさ。育ちがいいんだろうなって思った。こういう奴の家はいつも誰かがいて、あたりまえみたいに明るいんだろうなって、思った」

「……」  
「野々村は俺にないもんばかり持つてる。だから、なんだと思う」  
そんなことを言われた後で、英彰に笑いかけられて、里奈は言葉を失う。

何てきれいに笑うんだろう、コイツは。

大好きな聡明の笑顔に負けなくらい、すんと胸に入ってきた。

英彰が再びボールで遊び始めた。

止まっていたかのような時間が流れ始める。

空気が動き始める。

ボールをゴールにぶつけるように投げて、英彰は言った。

「俺は野々村に憧れてるんだと思う」

泣き出しちゃうかと思った。

不器用な自分がうまくできるようにするには、練習したりするしか方法がなかったこと、そんなことを見ていてくれるひとがいると思



わなかったから。

本当は、そういうダメな部分を知られるのは嫌だ。見栄っ張りなのだと自分でも思うけれど、スマートになんでもできるひとだと思われたかった。

でも。ときには努力していることも認めて欲しいという矛盾もあって。

聡明は里奈のそういう部分をはじめから認めてくれた。

それがとても嬉しくて、もっとがんばろうと思った。

ダメな里奈のこともはじめから見ぬいていたくせに、きちんと認めてくれた。

ダメだから努力する里奈を誉めてくれた。

そんな大人に出会ったのははじめてだった。

泣き出しちゃうかと思った。

だって、英彰は。

それこそ、里奈がうらやましいと思うくらいになんでもできるように見えるのに、憧れているなんて言う。

ダメな里奈がいることもちゃんと知っていて、それで努力する里奈が好きだと言う。

口惜しいけれど、嬉しかった。

だから、泣きたいのを我慢しなきゃならなかったんだと思う。

&lt;t:5&gt;

どうせ失恋するなら。  
早いほうがいいと思う。

奈津美はそんなことを考え始めていた。  
自分は受験生なのだし、悩んでいる時間がもつたいない。  
決定的に振られないと、きつと変な期待を持ってしまつて、いつまでも引きずるだろう。

好きな人が自分の親友を好きだろうという事実は正直、辛すぎる。  
姉のように自分を大切にしてくれる里奈も好き。  
だから、きちんと失恋して、気持の整理をしまおう。

真崎英彰に告白してしまおう。

おとなしい自分がこんなことを思うなんて我ながらびっくりだが、  
思いつくとそれはとても名案のように思えた。  
でも、どこかに嫌な自分もいることに奈津美は気がついて、哀しくなる。

親友が告白して振られた相手と里奈は付き合い合ったりしないはず。  
2人とも好きだけど、付き合い合ったりされるのは嫌。  
そうして、里奈と一緒にふたりで英彰から遠ざかれればいい。  
クラスも離れた今、不可能なことではないのだから。

里奈の好きな人は真崎英彰じゃない。

だから、だから。  
悪いことなんて、そんなにはいはずなんだから。

そう決めてから数日が過ぎた。  
いつもならなんでも里奈に相談するのに、今回はさすがにできなくて。

里奈が背中を押してくれない事の行動を起こすことはとても怖い。  
でも、やらなきゃならない。

思いきって英彰の家に何度か電話をかけたけれど、いつも誰も出なかった。

留守番電話にメッセージを残しておくことはどうしてもできないから、奈津美は無言で切った。  
そうするたびに、拒絶されているような気がして、辛かった。

「真崎っていつもいないの？ 夜」

奈津美に突然そんなことを問われて、里奈は手を休め驚いた顔をした。

朝のホームルーム前、机の中を整理していたらしい。

里奈はいつもきちんとしている。

いつもどんな時も。

里奈の机に手をつけて、奈津美は溜息をついた。

里奈は椅子に座ったまま、静かに奈津美を見上げている。

「あいつ塾とかでいないんじゃない？」

「塾か……」

「どうしたの？」

なんでもない、と首を横に振りかけて奈津美はふと、思いつく。

「真崎って携帯もってたよね。もしかして、里奈知ってる？ 番号」

「え？ 番号？」

「この間、真崎から電話もらって家に呼んでもらったんでしょ？」  
「うん」

里奈は気まずそうに頷いた。  
奈津美に悪いと思っっているのがありありと見取ることができた。  
同情されているのだろうか。

わたしは彼に電話をかけても通じることもないのに、里奈は彼から電話をかけてもらえる。

惨めだなあと正直思った。

自分を笑ってやりたくなってきた。

どうしてこうなの。

「どうしたの、奈津美」

奈津美は両手で顔を覆って、俯いた。

泣いているわけでないけれど、気分は泣いていたし、これから自分が言うことはあまりにも醜いから、里奈の顔を見ることが怖かった。そして、今の自分の顔を見られるのも嫌だった。

「真崎に告白しようと思うの。でも、言えなくて」

「え？」

里奈の驚きが小さな声になる。

「里奈から伝えてくれないかなあ。自分じゃ言えないよ」  
言葉を重ねるたびに、奈津美のどこかが冷えていく。

奈津美は手のひらを顔から外して、そつと里奈を伺った。

里奈は言葉もなく、戸惑いの表情。

だから、奈津美は手をあわせた。

「お願い。すつきり失恋して受験勉強にはげみたいの」  
しばらく躊躇した後、里奈は口許をほころばせた。

頷きながら、不器用に微笑んで。

「いいよ。奈津美の気持、伝えるだけなら。その代わり、結果は…」

「ダメだと思う。それは最初からわかってるから。でも、泣いちゃうと思うから、そのときは里奈、側にいて」

「うん」

里奈が頷いたとき、予鈴が鳴った。それを機会に奈津美は口を閉じて、自分の席に向った。

とても憂鬱。

どうしてだろう。

里奈が引き受けてくれることも、少なからず戸惑うことも、予測していたのに。

どうしていいよなんて言っの。

里奈は、どうしてそんなに「いい子」なの？

朝から参ったなー。

とんでもない難問を押しつけられて、里奈はがっくりと机にのめっ  
てしまう。

あー、あー、あー。

聡明、助けて。

声にならない呟きが唇からもれる。

聡明が来てくれるのは明日。

始業ギリギリの時間に、教室のドアに、ひょろりと背の高い男子生徒が立った。

「野々村先輩っていますか？」

頭がいたい日というのはいろいろと続くもので、里奈は見たことのない後輩に呼び出されてしまった。

今からいいですかと、と始業直前にのうのつと言つから、里奈は機嫌が悪かったこともあり、はつきり断った。

「自分の名前を名乗りもしないで、授業が始まる前に呼び出すのはわたしのことバカにしてるってこと？」

相手はいささか怯んだらしく、2年の小関輝樹であると名乗った。へらへらしたどこか軽薄な風貌なのに、眼差しに隙がなくて、里奈の嫌悪感はますます深くなる。

「俺、新聞部で写真担当してるんです。そだな。昼休みにでも……うん、部室に来てもらえます？」

「昼休みはあいにくヒマじゃないの」

と、背を向けかけた里奈の背中に、小関輝樹は言った。

小さな声なのに、強い調子で。

「図書館にいましたね、真崎先輩と」  
驚きを隠せずに、里奈は振りかえる。

小関は場違いなほどにつこりと笑った。

「やっぱり、あれは野々村先輩だったんだ」

一緒に図書館にいたことぐらいで、なぜ、あれほど顔色を失ってしまったか。

里奈が学校と外では装いがまるで違うと言つことが理由その1。

今までどんなに一緒にいる現場を目撃されても、野々村里奈だとばれたことはなかった。大学生の彼女とか妙な呼ばれ方をされてしまふほど。

そして、英彰に告げられた言葉。

あんなことを言われたあとだったから、奈津美に対しても、小関とかいう男の子にしても、過剰に戸惑ってしまったのかもしれない。

憂鬱さが加速してきて、里奈は時間が過ぎることが苦痛になっていた。

それでも、授業は淡々と終わり、昼休みになった。

「時間通りですね」

小関という奴はどーにもへらへらしていて、見ていて気分が悪い。里奈は新聞部の部屋に漂う奇妙な匂いに顔をしかめる。

「なにこの匂い」

「写真を現像する部屋がこの後ろにあるんですよ。先刻までおれ、現像してたから」

「ああ、薬品の匂いなんだ」

「キライですか？」

「うん……わるいけど」

申し訳なさそうに里奈が俯くと、小関はきよとんとして、それからくすりと笑った。里奈のことをゆっくり頭から足元まで眺めて、参ったなあと頭に手を乗せた。

「野々村先輩って化けますよね？ 今の姿見たら昨日のは嘘みたいですよ」

否定できないところが痛い。

かっちりみつあみの髪型、すっぴんの顔。

制服は校則通り、ソックスまできちんと白。

決まりごととなるときちゃんと守らなければ気が済まないのが里奈の性質だったりする。別に学校を出てからのことまでは校則は制限していないはずなので、大好きなお洒落に全力投球するわけで。先生にでも見つかつたらまずいかなあとは思っが。

「俺、不思議だつたんですね。真崎先輩がどうして野々村さん狙いなのかわからなくて」

「……真崎って、なんであんなそんなこと」

ギョツとした里奈の焦り具合をせせら笑うように小関は言う。

「あの人、ムチャクチャわかりやすいじゃないですか」

「……」

いいながら、里奈の前に缶コーヒーを置くあたりちよつと気配りくんなのかもしれない。

小関は自分の缶コーヒーのプルトップを引くと、何気なく里奈の手

に視線をおとして、

「開けてあげましょうか？」

「いい」

「爪が気になるんでしょ？」

「……コーヒー嫌いななの」

爪が割れそうでプルトップを引くのをためらっていたことを見透かされ、里奈は無然として嘘をついた。

「おっかしいなあ、真崎先輩とコーヒー飲んでたじゃないですか」

「ばっかじゃないの！？　なんでそーゆーことを言うわけ?!」

「だって、見たんですもん」

「……見たって」

「真崎先輩に彼女ができたなんて大事じゃないですか。新聞部には大打撃ですよ。で、ちよつと真崎先輩が部活の後に女と逢ってるって言うんで、部長命令で昨日……」

「真崎のことつけてたの？」

「あの人もね、オンナドモに散々尾行されてるんだし、あれだけ目立つ顔してるんだからもう少しまわりに気を配ればいいんですけどね」

「そんな芸能人じゃあるまいし」

「あの人は昔から注目されて育ったんでしょーね。だから、見つめられることに慣れすぎて鈍感なんですよ。カメラ向けられると露骨に嫌な顔しますから、きつと見られているのを知ったら怒ると思いますけど」

「で？　用件はなに？」

ケンモホロ口な里奈の口調に小関は肩をすくめた。

「真崎先輩が野々村先輩狙いの謎が解けました。俺、昨日みたいな野々村先輩のほづがいけてると思うんですよ。学校でもあん風になりませんか？」

「場所を選んでるのよ、場所を。いきなりあれで現われたら先生が腰抜かすわよ」



「真崎先輩と付き合ってるんですか？」

いきなり核心を突かれて、里奈は一瞬言葉を失ったが、視線をおと  
して唸るように言った。

「違う。付き合ってるない」

「ホントですか？」

「本当」

「ま、それならそれでいいです。真崎ファンに大学生の彼女の正体  
をばらされなくなかったら、俺と付き合いませんか？」

里奈は目を半分にした。

「本気で言ってるの？」

「はい」

にっこり笑う。

その笑顔。なんか腹がたつ。

「君ももてるんじゃないの？ 顔悪くないし。真崎に比べたら申し  
訳ないけど」

「結構、言いますね、先輩」

「彼女いないの？」

「先輩が付き合ってくれて言うなら、別れます」  
お話になりませーん。

こういうときこそ、都村聡明の教え子である成果を生かすべきだ。  
右をぶたれたら、左右張り倒して蹴りつける。

さすがにそこまではできないが、無礼には無礼をだ。強気になって  
やる。

「先輩からかうな。まったく。言っておくけどわたしと真崎はなん  
でもないし、面食いでもないんだ。悪いけど却下。冗談はキライ」

「はー見かけによらずキツイすねえ。俺、真崎先輩との2ショット  
の写真撮りましたけど。これが噂の女子大生だ！！ ってスクープ  
写真。……かなりの金額で売れると思いますん？」

「思いません。犯罪です」

「いいじゃないですか、需要と供給ですよ」

「風紀委員会と職員室に通報するわよ。停学とお小遣いどっちがいい？ 新聞部廃部にもなりかねないわね」

「野々村先輩、意外といい根性してますね」

「まあね」

いいながら里奈は腕時計見て、小関に言った。

「もう授業が始まる時間だ。これ以上妙なこと言わないでね。真崎が怒ったら怖いし、わたしもなんか頭に来るし」

小関は肩をすくめた。

「知ってますよ」

「それじゃね。あ、コーヒー飲まなくてごめんね」

里奈はそそくさと部室を後にした。

逃げる口実が欲しかったのもあるし、そろそろ昼休みが終わるのも気になっていたし。

里奈が出て行ったあとで、里奈が手をつけなかった缶コーヒーを手にして、小関はやれやれと溜息をついた。

「ネガよこせくらい言えばいいのに。肝心なトコで抜けてるんだな」

「冗談でも、告白されてしまったらしい。

あんもんは無視すればいいと自分に言い聞かせながら、里奈は教科書を開く。

落ちつかなかった。

真崎英彰と休日に会っていることを知られてしまった。

憂鬱さが加速してくる。

本当にもう、真崎英彰がらみでいろいろなことがあるすぎる。

里奈は頭を抱えこむ。

奈津美には申し訳ないが、恨みたくなってきた。

なんで自分で言わないのよ。

自分のことじゃない、どうして。

でも、請け負ってしまったのは里奈自身だ。

昨日、里奈に憧れていると言った英彰の眼差しが思い出された。  
透明な瞳をしていた。

冗談なんかじゃない、彼は本気なのだと思う。  
それは心から信じられる。

里奈の口から奈津美の気持を告げたら、英彰は怒るだろうか。

いつかみたいに、怒って、ひどいことを言うだろうか。

でも、このごろの英彰は優しい。

だから大丈夫だ、と考える気持もあって、里奈はそれにすがりたく  
なる。

里奈の口から言った事とはいえ、断るときは断るだろう。

べつに、真崎英彰は友達だし。

そうそう、好きでもなんでもないし。

奈津美は親友だし。

親友に頼られたら、なんとかしてやるのが筋というものだ。

真崎が怒ったら、そのときは。

……どうしよう。

いまいちすつきりしない朝を迎えて、里奈はどうにも沈みがち。

聡明が家庭教師として来てくれる火曜日だというのに、この憂鬱さ  
はなんだとゆーのだ。

いろいろと考えるから憂鬱になるんだ。

いろいろと。

朝一番で英彰の携帯電話にメールを打った。

6時30分のメールはさぞや迷惑だろうけれど、電話をしてしまうよりはましだろう。

お悩みの深い里奈は例にもれず寝不足で、溜息ばかりがついて出る。髪の毛を編みながら、鏡に向かって自分の打ったメールを反芻する。

お話ししたいことがあります。今日、時間はありますか？

30分後、英彰からの返信。

放課後、部活前に4階の生物室で待ってる。

また、生物室か。

確かにあそこは人気がなく、込み入った話をするには最適だけれども、よくよくまわりを見ると、カエルやらヤモリやらのホルマリオン漬けとかが置いてあって大層ブキミなので里奈はどうにも好きになれない場所だったりする。

人気がないのは気味が悪いからだ、きつと。

以前、生物室で話した時は、目を覆いたくなるくらいにサイアクの展開だった。

英彰は怒って言いたい放題言っ出て行ってしまった。

あのときの彼の様子を思い出すと正直、恐ろしい。

何度目かの溜息をついた時、突然浮かんだ疑問。

なんの前触れもなく、本当に、突然に。

一昨日、誰に会いたくて図書館に行ったの？

自分の胸に浮かんだ疑問に里奈は表情を止めた。  
指先が震えるほど、動揺した。

「聡明に決まってるじゃん」  
呟いて里奈は口許を引き結ぶ。

1日憂鬱だった。

今から奈津美に謝って、やっぱり自分で言ってくれと哀願したくもなつたが、それではなんかずるい気がする。

授業の教室移動が少なかつたことも幸いして、里奈はほとんど教室から出なかつた。

英彰に会うのが怖かつた。  
英彰の姿を見るのが怖かつた。

自分でも可哀想なほど、時間が過ぎれば過ぎるほど緊張が増した。  
まるで里奈自身が英彰に告白するような気分だった。

放課後、里奈は掃除を終えて、生物室に足をむけた。  
奈津美には先に帰ってくれと頼んだ。

申し訳ないが、教室で待っていていられたら、やつあたりでもしかねない。

奈津美はいささか不服そうだったが、里奈の顔色に口をつぐんだ。  
絞首台に昇るみたい。

特別教室へ向うの階段を昇りながら、そんなことを思った。  
「聡明く助けて」  
呟きは困ったときの聡明だのみ。

でも、聡明はこんな所までは助けに来てくれないし、ガキの単なる恋愛事情、首を突っ込むような野暮は嫌うだろう。

深呼吸してドアを開けると、英彰が振りかえった。

大きく開かれた窓から5月の風が入ってくる。

バスケット部のロゴが入ったTシャツ姿の背中。

振りかえった彼もなぜか、憂いの顔。

風のせいでさらりと揺れる茶色の髪が目許で乱れて、表情の心もとなさを深くする。

里奈は彼にぎこちなく笑いかけた。

窓辺に歩み寄る。

英彰に歩み寄る。

「気持ちいいね、晴れてて」

「うん」

「部活、大丈夫なの？」

「少しくらい遅れても大丈夫だよ」

それから少しの間、無言だった。

見下ろした窓の外は自転車倉庫になっていて、下校の生徒達の声でにぎやかだ。

「話ってなに？」

「うん」

心臓がこれでもかというほどに、強く打っている。

隣に立つ英彰が見下ろしているのがわかるから、里奈は前を見つめ続けた。

窓の外、青い青い空。

「奈津美が……ね」

「なに？」

「真崎の事好きなんだって」

言ってしまった後、彼の沈黙が痛かった。

振り仰げない、怖くて、後ろめたくて。

気持ちを知っているのに、こんな事言っでごめん。

「だから？」

英彰の声に里奈はぎゅっと目を閉じた。

やっぱり。

冷たい響き。怒った時の、あの声だ。

「返事、もらえるのかと思ったのに」

「……」

「イエスにしる、ノーにしる、潔く聞こうと思ったんだ」  
なのに、と英彰は続ける。

「野々村は俺の気持ちを知ってて、それを言うんだ」  
返す言葉がない。

俯いたままの里奈に英彰が近づく。

それを気配で察した里奈はますます身をすくませた。

怖い。

怒らないで。

ごめんなさい、ごめんなさい。

謝ってしまおうと息を吸いかけた時、英彰が言った。

「いいよ、付き合っても」

驚いて里奈は英彰を見上げた。

彼は予想以上に里奈の近くにいて、彼の表情に背筋がぞくりとした。  
またこんな眼で見られるなんて。

「交換条件」

「え？」

「逃げなかったら……根本と付き合っよ」

「付き合っなんて奈津美のこと好きでもないんだったら、やめてよ」

「そうなればいいって思ってるんだろ？ だから言えたんだろ？」

そんなに大切な友達のためなら、なんでもできるよな」

ちがっよ、という言葉がのどまで出かかってきた。

ちがっよ、と。

でも、言えなかった。

「キス……逃げなかったら」

言いながら英彰が近づいてくる。

肩に手を置かれて俯いたまま身体を強張らせる里奈に、頬を寄せて

くる。

頬を手のひらで押さえられて、里奈は目をぎゅっと閉じた。逃げればいい、こんなの嫌だって逃げればいい。

頭ではわかっているのに、できなかつた。

あっけなく乾いた唇で触れられて、ますます固く目を閉じた。

触れただけのキスが終わる。

立っていられるのが不思議なほど、里奈の足元は頼りない。

「逃げるよ」

英彰の声がした。

「そんなに友達が大切？」

目を開いて仰ぎ見ると、とてもとても冷たい眼で見下ろされていた。傷ついているのがありありとわかる表情。

軽く肩を押されて、後ろに2・3歩よろめいた。

「わかつた。付き合うよ。今夜、俺から電話する」

「真崎」

「俺はおまえみたいに無神経なことしないから。泣かせたりしないから安心しろよ」

言い捨てて背中を向けられ、里奈はその場で呆然とする。

英彰が大きなバッグを肩にかける。

里奈のことは1度も見なかつた。

ドアがしめられて、1人取り残されて、里奈は押された肩を押さえた。

そんなに友達が大切？

どんな落ち込む事があっても、やる事があればなんとか立っていられるものだなと思う。



事実、里奈は1人で泣く事もせずに、生物室を出て、駅まで歩いて、地下鉄に乗れたし、家まで歩いて、着替えて、髪をほどいて、唇に紅をのせた。

聡明が7時に部屋に来て、いつもの調子で陽気に笑いかけられたときは、笑い返す事もできた。

それでも聡明は聡明だった。

淡々と言われるままに数学の問題に取り組む里奈の横顔を、観察するかのように冷静な目で眺めていた。

問題を解き終えて、里奈は聡明にノートを差し出した。

聡明は無言でそれを手に取ると、軽く眺めて、そっけなく正解していることを告げた。

「つぎはこれ」

「うん」

うん、と言いながら、里奈は聡明を見つめた。

やっぱり好きだなあと思う。

するとどうにもならない感情が湧いてきて、里奈は唇を震わせた。

聡明のこと、絶対に好きなのに。

どうしてこんなに悲しいんだろう。

傷つけたから？

キスされたから？

それだけじゃない、「何か」がある。

その「何か」の正体がわからなくてあやふやで。

だから、余計に悲しい、切ない、口惜しい。

聡明がノートを閉じた。

里奈は俯いたまま、肩を震わせる。

聡明は細い目に一瞬だけいたわりを浮かべて、頬杖をつく。

なにも言わず、訊かず、里奈の様子を見守っている。

涙が雫になつて落ちた時、里奈は勢いよく立ちあがった。クローゼ

ットの引出しの一段を開いて、バスタオルを取り出した。

その場にぺたんと座りこんで、タオルに顔を埋める。

背中をむけたままのその様子に、聡明は動じる事もなく視線をそらした。

手に持っていたボールペンを指先で回し始める。時間が過ぎる。

過ぎる時間を聡明は過ぎるままにしておいてくれた。

「死んじやいたって思う事ある？」

30分は泣きに泣いた。

なのに涙が途切れずに、しゃくりあげながらの里奈は問い。

聡明の返事はすぐにはなかった。

聡明は難しそうな建築関係の本に視線を落としたまま。

ようやくもらえた言葉はどことなく冷たい響きをしていた。

「死んだほうが楽だなあとということだろう、それは」

「違うよ」

「死ぬのは楽じゃねえぞ。俺はごめんだ」

「聡明は強いから、そんなこと言えるんだよ」

「強くなくても言えるぜ。言うだけはタダだからな」

「違うよ」

聡明は口を閉じた。そして、再び読書。

里奈は振りかえった。

タオルで顔を隠して、眼だけで彼の様子をうかがう。

聡明が上目遣いに視線を向けてきた。

「……聡明がうらやましい。聡明はなんでもできるから、傷付いたり、傷付けたりなんてしないもの」

「んなことねえよ」

「そつだよ」

からんでいるだけの里奈に聡明はやれやれと肩をすくめて、本を閉じた。

頬杖をついて、里奈を眺めている。

あふれてくる涙を里奈は押さえられずに、タオルをぎゅっと握り締めた。

「ごめんね、聡明、困ってるよね」

「いや。べつに」

聡明は淡々と答えた。

そして、こんな事を言った。

「おまえ、腹減ってんじゃないの？」

「は？」

「なんか食えば」

「いらない」

「一口食つと、食べるもんだけどな」

「いらない。ママにこの顔見られたくない」

聡明は肩をすくめた。そして、懐から携帯電話を取り出して、時間を見る。

「近くにファミレスあったよな」

「えっ？」

人がこんなに悲しんでるのに、なんで腹減っただろとか、ファミレスとか言うのよ、バカ。

にわかには腹が立ってきて、里奈は聡明を恨めしげに睨んだ。

「ファミレスがどうしたのよ」

「行くか」

「ヤダ。こんな顔で外に行くのやだ」

「そう言うなよ」

「それにこんな時間に、勉強やってるはずなのに、外に出たりしたら親に聡明が怒られるじゃない」

「おまえさー、夜に家を抜け出したりした事ねえだろ？ 1度くらいはやつとけよ。太他愛のない事で親の目を盗めるのって今のうちだけだぞ」

涙が引つ込んでいた。

聡明がバカなことばかりいうから、拍子抜けしてきて。

聡明はにやりと笑う。

「課外授業。1時間以内にファミレスに行つて戻つてくる」

「無理だよ」

「わかんねえだろ。お父さんはまだお帰りではない。残る関門はお母さんだけだが、お母さんは家教が終わる9時まで2階には上がつてこない。しかも、この時間はテレビ夢中だ」

聡明はさっさと腰をあげてしまう。

里奈はタオルを持ったまま、聡明を見上げた。

「ばれたらどうするの？」

「星座の勉強してましたつて言つさ」

不謹慎かもしれないけれど。

足音を忍ばせて、玄関に向うのはおもしろかった。

階段を降りると玄関があつて、リビングと隔てているドアにはガラスがあつたりして、母親がテレビをみて笑っている様子が見えたりして。

聡明が身を屈めて玄関に向うから、それに倣つて後をついて行つてみたけれど、なんだか奇妙な緊張感に、里奈は笑いたくなくなってきた。聡明が人差し指を口許にあてる。

生真面目な顔でにらんでくるから、ますますおかしい。持っていたタオルで口元を押さえてこらえた。

聡明が靴下のままたたきに降り立ち、スニーカーを手にする。

だから、里奈も裸足のまま、サンダルをもった。

慎重に聡明がドアのノブをひねる。カチャと音がしたときは、心臓が冷えた。

そつと背後を伺う。

ガラス越しで母親が涙を流して笑っているのが見えた。

聡明が眼で合図してくる。

出ろ、と。

聡明がドアを開いてくれている。里奈は素足のまま、外へ出た。聡明も出てきて、そーっとドアを閉める。

そして、もう1度人差し指を口許にあてて、手首を返してくる。家の門をくぐる。

道路に出たところで、里奈はサンダルを履いた。聡明も塀に隠れてスニーカーを履き、そして、走れと言う。

こみ上げてくる笑いをこらえながら、里奈は走り出す。

聡明が速いから、文句を言いながら。

家から離れるごとに笑い声が出てきて、聡明にたしなめられた。

「バカ、笑うな、ばれるだろ」

「こんなに離れたらママには聞えないよ」

50メートルくらい走って、聡明は走るのをやめた。

里奈はその場で笑い転げた。

聡明が眼を細めて、その様子を眺めている。

くすりと笑う、その口許がばーかと言う。

「死んじやいたいんじゃないのかよ？」

「バカバカしー。こんな事やってバカみたいー」

「バカはおまえだ」

「ほんとだよね、わたしはバカだー」

笑いが途切れて、里奈はしんみりと聡明を見上げた。

「史上最悪のことをやっちゃったんだ」

「ふうーん。またか」

「なに、またかって」

「なんでもねえよ」

「これからキツイ毎日になりそうなの。むちゃくちゃ」

「勉強しな。受験生なんだから。今夜は風邪薬でも飲んでさっさと

寝ちやいな」

里奈は視線を落とした。

ふふふ、と静かな笑いが口許に浮かんでくる。

寂しい、本当に。

里奈は口許に指をあてた。

眼を閉じる。

どうして逃げなかったんだろう。

うつろによみがえる、伏し目がちの英彰のこと。

触れられた乾いた唇、あっけなく離れていった。

どうして……あんなに泣いちゃったんだろう。

聡明にキスしたことがばれたのかと思いこんだ時のような、あんな  
涙を。

どうしてあんなやつのためにわたしは流しちゃったんだろう。

夏服の季節を迎えているのに、このところ続く雨のせいで肌寒い。野々村里奈さんは日々何事にも全力投球。

以前からそういうタイプではあったが、輪をかけてそういう状態なので、クラスメイトでありクラスの委員長である大野涼子閣下がそのへんのところを突っ込んできた。

「野々村、もう誰も掃除してないから、やめれば」

「へ？」

もくもくと教室のガラスを磨いていた手を止めて、あたりを伺うと確かに誰も掃除なんてやっている生徒はいない。腕時計で時間を確かめても下校時間はとうに過ぎている。

涼子が呆れ顔で腕を組む。

「ばかねえ、気がついてなかったの？」

「放っておいて」

すねながら里奈が空雑巾をたたむのを見ながら、涼子が言った。

「根本は先に帰っちゃったの？」

「うん。帰りは別になったの」

「ケンカでもしたの？ 昼の様子からは伺えないと言っか、ますます気味が悪いくらいに仲良しだけど」

里奈は軽く笑う。

奈津美が英彰と付き合い出して一ヶ月がたとうとしている。

真崎英彰の校内での立場はアイドルもいいところなので、それは秘密としているけれど今の時間は校舎を出たところで英彰が奈津美を待っているはずだ。

里奈は物憂げに溜息をついた。

彼の予告通りにバスケット部は5月末の地区予選で敗退して、あっけなく英彰たちは引退した。

その試合の翌日、英彰と廊下ですれ違ったけれど、見事に無視された。

彼は視線を合わせることもなく、表情ひとつ変えずにすれ違って行った。

残念だったね、がんばってたのにね。

言ってあげたい言葉が胸に閉じこもったまま行き場をなくして、里奈をいろいろと苛んでいる。

でも、それを言葉にする権利を自ら放棄したのは里奈自身だ。

「根本、真崎と一緒にいるって噂になり始めてるよ」

「うん……」

曖昧に頷く。

奈津美が満面の笑顔で抱きついてきた朝を、里奈は今もはっきり思い出せる。

付き合おうといわれたと嬉しそうに報告する奈津美に、里奈は笑顔でよかったねと答えた。

よかったね。

そう言った自分がひどく後ろめたかった。

英彰の心の中を知っているから。

その前の日の、あのキスを忘れてないから。

「野々村、一緒に帰らない？」

「え？」

「付き合ってよ。お茶でもしようよ。おいしいコーヒーが飲みたい」  
涼子にしては女子高生らしい提案に里奈は軽く驚いた。

でも、微笑んでOKする。

彼女なりの心遣いが嬉しかった。



「真崎、明日なにしてる？」

「え？ 明日？」

上の空でいた英彰は突然の問いに少々慌てた。

大袈裟な英彰の反応に奈津美が困ったように見上げてくる。

「週末だから、学校休みじゃない？ どうしてるのかなあって」

「ああ」

英彰は天井を仰いだ。

「家に いると思う。もしかしたら、友達と会うかもしれない」  
嘘をついた。

口許を歪めていると、奈津美が視線を落としたことに気がついた。

「どうしたの？」

「なんでもない」

寂しそうな笑顔を向けられて、英彰はああそうか、と思った。

付合っていることになっているのに、二人でどこにも出かけたことがない。

「あかさ」

「ん？」

「根本がヒマだったら、日曜、どこか行こうか」

「本当に？」

「うん」

奈津美の嬉しそうな顔につられて英彰も笑顔になる。

でも、心からは笑えなくて胸に重々しさがやってくる。

引退して、部活がなくなった英彰の日常は大きく変化した。

中途半端な時間に家に戻ってしまっから、塾の時間まで一時間くらい、うたた寝をするようになった。

練習をしていないのでエネルギーの消費もかなり減って、昼寝をする必要もないのに。

夕暮れにベッドの上で、いつでもお出かけOKの私服姿で横になる。まどろみながら、30分ほど前までかわっていた会話を思い出そうとしているけれど、うまくできない。

……一緒に買い物に行くって約束したんだ。

いつもそうだ。

はにかみ屋の奈津美が、英彰と会話をしようとして一生懸命に話しかけてくる。

電車に揺られながら相槌を打つ自分なのに、内容はほとんど覚えていないなんて。

校内で野々村里奈の姿を探さなくなつて、しばらくになる。

はじめは怒っていたのでそれは容易いことだった。

無視をしていたといつてもいい。

でも、気がついた。

里奈は別に堪える様子もなく、淡々と毎日をすごしていること。

そんなもんか、と英彰は思った。

英彰が探さなければ二人は会うこともない。

子供地味な感情の赴くまま、里奈と下校を共にしている奈津美に言ってみた。

「一緒に帰ろうか」

奈津美は一瞬困惑を顔に浮かべたものの、里奈に相談してみるなどと頬を上気させて答えた。仲のよい二人に水を差してしまった後ろめたさを感じて、英彰はまたひとつ憂鬱になった。

しかし、里奈はあっさりとしていたらしい。

優しく承諾したと奈津美が言った。

あいつにとって俺の存在なんて別にどうでもいいこと。

それならば。

英彰は腕に頭を抱えこむ。

「どうして逃げなかつたんだよ」

あのとき、キスしたとき。

怯えていたのに逃げなかった。

逃げてくれと思っただのに、願ったのに。

そうしなかった里奈の姿。

それをしてしまった自分の惨めさと共に忘れられない。

本当に友達のために我慢したというなら、かなり重い話だ。

いつものように聡明が部屋に入って来たとき、違和感に襲われて里奈は眉をひそめた。

「なんだよ？」

里奈の顔を見て怪訝そうにする聡明を里奈はまじまじと見つめて、自分の意識が鼻に集中していることに気がついた。

「……聡明、ココに来る前に煙草吸った？」

「吸ったけどなんで？」

くんと鼻を動かして里奈は言った。

「煙草の匂いがある」

今度は聡明が眉をよせて、

「犬みたいな奴だな」

「だって。聡明、吸う人じゃなかったよね？」

「たまにな。吸うときあるんだよ」

「たまにつて」

「煙草つて落ちつくんだよ」

「へえー」

里奈は首をかしげながら、いたずらっぽく聡明を見上げた。

「里奈も吸いたいな」

「ダメ」

「なんで？」

理由なんてわかっているけれど、甘えたくて里奈は尋ねた。

聡明はこつんと里奈の頭に柔らかい拳を落として、

「まだ似合わないから。あんたには」

「まだ、似合わないってことはさ、わたしの歳が似合っていないの？  
それともわたしには似合わないってこと？」

「そうだなあ……まだってのは違うな。がきんちょには煙草は合わねえな」

「煙草を吸う女って嫌い？」

「いや、別に」

意外だった。

聡明はそういう女性を嫌っていると思っていた。

「べんきょーはじめます」

「はい」

土曜日の朝、母親がまだ寝ている英彰の枕もとに立った。

「英ちゃん、今日はお休み？」

「土曜日だから休み」

ベッドにもぐったまま、生返事をする息子に、母は溜息をついた。

「英ちゃん、聞いて」

「聞いている」

本当は聞いていなかった。

まどろみのほうを優先して意識は虚ろだったし。

「英ちゃんが大学に受かってからの話なんだけど」

「え？」

シビアな話題だったらしい。

英彰は目を開いてこすりながら身体を起こした。

ベッドの端に腰をおろして、母親が言う。

「お父さん承諾したみたいなんだけど、お父さんがいいならそれもいいのかなってお母さんも思ってたんだけど、やっぱりお母さんは反対だわ」

「なにが」

英彰が不機嫌そのままに呟くと、母親は伏目がちに顔を俯かせて早口に言った。

「都内の大学に行くのにうちから通わないなんて不自然よ。一人暮らしなんて大学を卒業してから考えればいいじゃない」

英彰はうんざりとして両目を押さえた。

「……今更」

「今更じゃないわ。受験はこれからじゃない。お父さんもお母さんも英ちゃんに無理して欲しいなんて思っていないし。英ちゃんの行きたい大学に行けばいいって思ってる。がんばってる英ちゃんはエライとは思うけど、無理しすぎてない？ 勉強とか」

「高校卒業したら家を出るってのは高校に入った時からの約束だろ？」

「でも、ちよつと」

「経済的な問題でもある？ それなら俺、学費だけ出してもらえれば生活費はバイトでもするよ」

「どうして家にいたくないの？」

「どうしてわからないの？」

顔を上げて英彰はまっすぐに母親を見つめた。

母親の動揺は手に取れるほどわかりやすかった。

視線をさまよわせるようにしたあと、彼女は心もとなげな様子で言った。

「今まで……家族3人でうまくやってきたじゃない？」

「俺がね」

英彰はベッドから降りた。

つられるように母親も立ちあがる。

「あんたたちにあわせてやってきたのは俺だよ。もういいだろ？」

俺は俺のペースでやりたいよ」

「英ちゃん」

必要もないのに英彰は眼鏡をかける。

着替えるから出ていってと告げても母親が出ていく様子がないので、仕方なく机の椅子に腰をおろす。

「お母さんが家にいればいいの？」

「なに言ってるの。そんな時期は10年前に終わってるよ」

「でも、英ちゃんがそうして欲しいって言うなら、お母さん、夜は家にいるわ。昼間の手伝いだけして、家にいるようにする。お父さんに相談してみるから」

「どうしたわけ？」

逆に英彰が彼女に問う。

今更…… 本当に今更、なにを思ってこんなことを言い出したのか。

彼女は答えられずに黙りこむ。だから英彰はいよいよ呆れて言葉を重ねた。

「わけわかんねえな、もう」

父と母が仕事に出かけた。

英彰も当然のように家を出る。

行き先には自分でも呆れてしまっけれど。

休日というといつも里奈は姿を見せていた。

でもあれ以来、一度も訪れていない

静まりかえる図書館で英彰は、あくびをかみしめながら飛行機の構造についてわかりやすく書いている専門書を眺めている。

漫画でもあれば飛びついたが、公共施設でのそれは手塚治虫か日本の歴史くらいなものだろう。

今日は少し出遅れたせいで机をとれなかったので、一般の閲覧席にすわり、机が空くのを待っているのだが、なかなか空く気配がない。そろそろ帰るかなあと、本を閉じたとき、信じられないものを見た。

しかし、ありえないことではないのだ。  
ここは都村聡明の在籍する大学院から歩いて5分とかからない場所  
なのだから。

妙な具合になってきた。

英彰は首をすくめて、閉じた専門書を開いた。

「アホか、おまえは」

聡明がそう言っている相手は、浜崎佳乃。1度だけ会ったことがあ  
る。

頭のよさそうな美人だ。白衣が似合う。

静まりかえる場所だけあって、聡明の声のトーンも落としがちで、  
よく聞きとれないが、二人の表情からするとかなり険悪なものがあ  
る。

こっちに来ないでくれ、と目を閉じ祈るような気持ちでいた英彰の  
前を二人は闊歩して行く。

「アホで結構。バカじゃなくて安心したわ」

「違わねえだろ、バカ」

「バカって言ったほうがバカなのよ」

「そんじゃおまえもバカだろが」

……子供の喧嘩だな。

どちらかというと、佳乃が闊歩するのを聡明が追かけているような  
二人が2階からふきぬけている階段を降りて一階に向かったことに  
英彰はほっとして堂々と首を伸ばした。エントランスで言い争う二  
人がいる。

が、状況はさらに英彰の目を点にするものに。

「まじかよ？」

驚きのあまり英彰は、呟いて立ちあがってしまった。

インテリ風の眼鏡をかけた男が自動ドアからはいつてきて、佳乃  
に笑いかけたのだ。

聡明と佳乃の二人は気まずそうに口を閉じる。

そして、佳乃は彼と行ってしまった。

それを見送りながら、聡明は溜息をつく。

ふうーん、ヤバイとこ見たなあ。

たいしてヤバイとも思わずに英彰は踵をかえした。今となつては読みたくもない航空専門書なんぞ、さつさと棚に戻して逃るに限る。

どこだったかと棚を眺めてちよつとろろろして、おおこだよと手を伸ばした時、背後になにやら人の気配。

今度こそいやーな予感をひしひしと感じて、英彰はそのまま金縛り。振りかえらずにいると、相手がこんなことを言う。

「背が高いと便利だねえ」

「そんな変わらないじゃないですか」

「俺も180？欲しかったんだけどね、実は。2？足りなかったんだ」

「俺も2？超えただけですから」

「真崎君は冷たいね。俺をシカトするんだ？」

「……いえ。そんな大それたことはできません」

「そうかなあ。とつとと逃げようとしてるのがよくわかるんだけど」

「俺がいたの知ってたんですか？」

おそろおそろ振りかえると、都村聡明はにっこりと笑って英彰の肩に手をのせた。

「バカじゃねえんだから、目の前通れば気がつくだろ普通」

万事休すだ。バケモンじゃないだろうかこのひとは。

絶対にダツシュで階段を駆け上がって来た違いはない。

先刻の喧嘩といい、つくづく大人気ないひとだ。

「気がついたなら、気がついたりアクションしてください」

「勉強しにきたんだ？真面目だねえ」

「ええ、まあ」

「優秀な家庭教師が面倒みてやるよ」



「いえ、いいです」

「そう言うなよ。余計な事は全部忘れるくらい、いろんなことたつきこんでやるから」

「……」

不敵な様子で腕を組む聡明を目の前にして、英彰は顔を引きつらせた。

ヤバイ現場を押さえられたのは聡明のほうなのに、偉そうなのはなんでなんだ？

「よく考えたねえ」

聡明は英彰の綴った英文を指さして、感心したように言う。

「はあ？」

「んーつと、真崎君、頭よこしなさい」

「え？ またですか？」

ばかん、と丸められた参考書でやられて、英彰は叩かれたところを押さえた。

「英語なんか通じればいいんだから、もっと単純に考えたほうがいい。こんなに難しくしなくてもいいよ」

「はあ……ますますわけがわからなくなりそうです」

「仮定法はなあ……。教える側になって英語ってどうしてこういう考え方するのかってむかついた時あったな」

「現役のときはどうしてたんですか？」

「カン」

「……」

聡明は英彰のルーズリーフを一枚外すと、さらさらと絵を書き始めた。

「仮定法っていうのは、言わば別の次元の話で、パラレルワールドなわけよ。でも、日本語でも天気予報なんか見てバンバン仮定法つかってるわけだから。文句は言えねえわな」

英彰は聡明の手元をのぞき込む。

「仮定法の中でもこの問題はかなりの難易度だよなあ。あっちこっちで引っ掛けてるし。どこでこんな問題発掘して来るんだか。こんな受験で出されたら俺浪人してたぜ」

「またまた」

ここは英彰の家のリビング。

当然のように誰もいないから、英彰が聡明を誘ったのだ。

聡明は笑って先刻脅かしたのは冗談だよと言ったけれど、英彰の顔を眺めた後、2時間の授業料の代わりに夕食ということを手を打ってくれた。

彼が英彰の表情からなにを感じ取ったのかは、英彰自身よくわからない。

「俺、塾やめて都村さんに家庭教師してもらおうかな」

参考書を閉じながら英彰がしみじみ言う。

実にわかりやすかった。

聡明は懐から出した煙草をくわえて、かかかつと笑った。

「俺はガキンチョと中ボアのボクちゃんだけで精一杯。それより随分高度なことベンキョーしてんだな。俺、一瞬わからなかったぜ。

真崎君、英語ダメっていうけど並みのコーコーサーよりはよっぽどできてると思うよ」

「都村さんの大学第一志望なんですよ。だから気が抜けないというか」

「ふうーん……。理工学部だっけ」

「はい。灰皿いりますか?」

「うん。ごめんね」

火をつけながら聡明が頭を下げる。

英彰は来客用の灰皿をキッチン棚から取り出して、リビングのソファに腰をおろしている聡明の前に置いた。

「俺も一本いいですか？」

「真崎君、吸うの」

「習慣はありませんけど。部活も引退したし……いいかなって」

聡明は無言でライターとマイルドセブンライトのボックスを放り投げてきた。

「煙草は憶えたのいつ？」

「中1の頃ですかねえ。めったに吸いませんけど」

「それでその身長になるんだから、タバコで成長が止まるって説もなんだかな。がきんちよ……じゃねえ、野々村里奈がさ、ムチャクチャ鼻がきいてこの間びっくりした」

野々村里奈と聞いて、英彰の顔が一瞬強張ったのを聡明は見逃さなかった。

ふんふんなるほどね、と勝手に頷いて、スムーズに話題を変える。

「親御さん、いつも帰り遅いの」

「ええ、ガキの頃からずっとです。慣れました」

「俺もガキの頃は1人が多かったんだ。親父が再婚するまで父子家庭だったからさ。でも、寂しいのは何時までも慣れなかったけどな」  
英彰はそれを聞いて押し黙る。

今朝の母親とのやりとりを思い出した。

今更なにを勝手なことを言うのだと、キレかかったあの会話。

「親つてのは勝手ですよ。自分の都合で好き勝手やって。こっちがいざ好きにやるうとするとブレーキかけようとして」

「得てして親つつのはそんなもんだろ。俺の親父はちょっと変わってるからそうでもなかったけどさ」

「勝手ですよ」

それっきりむっつりとしたまま煙を吐く英彰に、聡明は諭すように言う。

「寂しい時は寂しいって言わないと、自分が損するぞ。必要以上の痩せ我慢なんて相手を付け上がらせるだけだったり、傷つけるだけだったりするもんだし」

「都村さんこそ浜崎さんに早く謝ったほうがいいですよ。どうせ怒らせたの都村さんでしょ」

目を据わらせて聡明がそっぽをむいて煙を吐く。

「……言ってくれるじゃねーの」

それから聡明はしばらく黙っていた。

その間、口をつけず指に挟んだままの煙草から立ち昇る細い紫煙を眺めていた。

なにを思ったのか、軽く笑い、それを灰皿にもみ消した。

数本のこっている煙草の箱を英彰に向って投げた。

「やるよ」

「え？」

「制服では吸うなよ」

どういう時にあのひとは普段吸わない煙草を口にするのだろうか。

聡明が帰ってしまった後、英彰は二本目に火をつけた。

この家では煙草は厳禁だ。

料理人の父は舌が鈍ると、英彰にも煙草を吸うことをよしとしなかった。

一種の反抗もあって口にしたのは最初。

閉じたまぶたの裏に、帰り際の聡明の背中が浮かんだ。

どういう時にあのひとは普段吸わない煙草を口にするのだろうか。

なんらかのダメージを受けているのだろうか、あのひとも。

こうして置いていったということは、もう癒しの道具なんて必要ないということ？

まぶたをうつすらと開いて、英彰は虚ろに天井を見つめながら呟く。

「強いなあ……」

闘わなきゃならないことが多すぎる。

未熟な自分は、防具さえ整っていないままの状態で闘わなければならない。

勉強なんて楽なもんだ。

やっていればなんとかなる。

ならないものって、なるようになるのかな。

「あれ？」

奈津美が隣で呟いた。

里奈は下駄箱から自分の上履きを下ろして、履きかえながら彼女を見下ろした。

「どうしたの？」

奈津美の表情は蒼白に近い。口許に指をあてて、泣きそうな顔をしている。

「上履きがない」

「え？」

あわてて里奈も奈津美の下駄箱の中をのぞき込んだ。がらんとしている。なにも入っていない。

「全く……」

渋い顔で里奈はこめかみのあたりを押さえた。

上履きを隠されるという卑劣な行為は、里奈も数回やられたことがある。

「真崎のファンの子かな」

奈津美はこたえない。

黙って俯いている。

里奈は彼女の肩を叩いて、

「お金ある？ 無いなら貸してあげるから、購買部に行こう。上履き新しいの買って、それから探してもいいし」

「うん」

奈津美の返事は元氣のない呟き。

里奈もなんとも言えない気分です空を仰いだ。

「真崎に言おう。言っただけ、なんとかしてもらおう。あいつが言えれば効き目もあると思うし」

「里奈は言わなかったじゃない。真崎に。いっぱいいろんなことされたのに」

「わたしと奈津美は違うよ。奈津美はあいつの彼女なんだから」

努めて明るい調子で言う里奈に、奈津美はすねたように言った。

「言えないよ」

「それもわかるけど」

奈津美はちらりと伺うような視線を向けてきた。

「里奈から……言ってくれませんか？」

里奈は思わずムツときてしまう。

言えるわけがない。

だって、口をきいてもいない、視線を合わせることもすらしていない。最近英彰の徹底した無視加減に里奈も頭にきて、里奈からも無視しているし。

あまりにも見事に視界から省いてくれるからかなり頭にきてしまつて、あんたの無視攻撃なんて絶対に気にしてないんだからと拳を固めたり、平然とした態度を貫いてやると決意しちゃったりなんてコトは日常茶飯事なのだから。

「そういうことは二人で解決することだと思っただけよ。それくらい話せなくてどうするの」

語氣の強まった里奈に奈津美もかちんときたようで、唇を尖らせた。

「実感ないんだもん。真崎と付き合ってるなんて全然実感なくて……」

毎朝電車であつたたびに英彰ののろけを散々聞かせてくれるくせに、

なにを言うのだ。

「真崎……心配してくれるのかな」

奈津美の呟きが心細く聞こえてくる。

うそつき真崎英彰。

なにが泣かしたりしない、だよ。

奈津美はこんなに不安がつてるよ。

あんたなんてやっぱり大嫌いよ。

「嫌な男っているよねえ」

「ああ？」

里奈の呟きに聡明が顔をしかめる。

里奈のお勉強はすっかりお留守。

信じられないことに聡明のほう我真面目に勉強しているのだ。

里奈は聡明のメモをのぞきこみ、首をかしげた。

「なにそれ」

「来月から俺、美術専門学校の建築科の非常勤講師やるから予習。

産休で休む講師がいるらしくて」

里奈は目を見開いた。

「え？ 聡明は大学院生じゃない？」

「なんだけど、仕事しながらやるの。専門学校つてのはコマ数契約

だからさ。非常勤だし水曜と木曜に2コマずつ担当するだけだから。

院のスケジュールと調整すればなんとかなるんだよ」

「ええー?! じゃあ、家庭教師は辞めちゃうの？」

いつになく真面目に声を強張らせた里奈に聡明は優しく笑いかける。

「やめねえよ。がきんちよが第一志望受かるまでは」

里奈はいつもの天邪鬼さはどこへやら、机に突っ伏して安堵の溜息を盛大についた。

「よかったあああ」

それを聞いて、聡明が意外そうに目を見開いた。

「えらく素直だな、がきんちよ」

「えー？ わたしは天使のごとくいつも素直じゃない」

「天使つつ 単語を辞書でひいてみな」

聡明の憎まれ口にも里奈は溜息でお返事。

「なんで突然、仕事しようなんて思ったの？」

「いつまでも親に甘えっぱなしでもいらねえからだよ。自分の住むところくらいは自分でなんとかしたいしな」

「ふーん。聡明って1人暮らしなの？」

「いや、ねーちゃんと一緒」

「聡明、おねえさんいるんだよねえ。聡明に似てるの？ 目、細いの？」

「細くねえよ。さっぱり似てない」

「ふーん……じゃあ、美人なんだあ」

「どーゆー意味だコラ。でも、ま、美人だわな。天然ボケがはげしすぎてめまいがしそうになるときあるけど」

「ひとりっ子って性格に弊害が出るよね」

そんなことを言う里奈は、自分を棚に上げて目を据わらせた。

聡明はそんな里奈をしみじみながめて、それからなぜか口許を笑わせる。

「んなことねえよ」

「あるよ」

聡明はいよいよ笑い出して、里奈の頭をぼんぼんと叩いた。

「おまえも意外といい子だし、どっかで同じようにすねてるあいつもいい子だよ」

「なにそれ？ わけわかんない」

「わかなくていいよ」

からからと陽気に笑う聡明。

軽く里奈の頭を叩いて、さっさと勉強しなさいと促した。



気をとりなおしてシャープペンを握って、里奈はこっそりと数回目の溜息をつく。

「陰険な女ばかりなんですかね、真崎先輩のファンって」  
昼休みに図書室で仮眠を取っている英彰の前に、ふらりと新聞部の小関が現われた。

英彰はちらりと顔をあげて視線だけで彼を確認すると、再び目を閉じた。

「ファンなんていないよ」

「いますって。現に、真崎先輩の彼女、被害にあってますもん。昨日上履き買ってましたよ、購買部で」

英彰は目を開いた。

小関の意味深な目に、押し寄せる不快感。

「野々村先輩と一緒にいる小さい女の子ですよねえ。先輩」

「おまえ、いい加減にしろよ？ 俺の後つけまわしてどうしようってんだよ」

眼鏡を外した目で睨まれて、小関は肩をすくめながら英彰の向かいに座る。

「先輩に彼女ができたってことになったら、うちの収入半減です」

「その収入とやらでなにしてたんだよ、新聞部。ちゃんと生徒会から活動費がでてるだろ？」

「カメラとかは自己負担なんです。フィルムだって活動費から出なくもないですけど絶対的に足りません。うちは写真部も兼ねてますから」

「だからって俺に迷惑かけるのは筋違いだろ」

「迷惑じゃないですよ。話はちゃんと聞いてくださいよ」

「なんだよ」

「先輩、釈明会見開きましょ」

いよいよ英彰は目を据わらせた。

話にならんと返事もせず目目を閉じた時、小関が言った。

「意外です。先輩があんなおとなしいだけの女と付き合うなんて」

「おまえにはカンケーねえだろが。なんなんだよ」

「先輩、ものは相談なんですけどね」

小関は机に突つ伏したままの英彰の髪を馴れ馴れしく引つ張る。それを手で払う英彰にも臆することもなく彼はのほほんと言った。

「先輩が野々村さん狙いじゃないってことがわかったんで相談なんですけど」

野々村？

英彰が顔をあげると、小関はあつけらかんと、

「俺、野々村先輩いいなあって。学校にいる時じゃなくて、外の。

女子大生みたいなの野々村先輩、美人ですよねえ」

「おい」

一瞬焦つた顔をする英彰に、小関は不敵に笑う。

「ばらしませんよ」

「余計なこと言うなよ。校則違反じゃなくても、あいつは優等生で通ってるんだ。実際どんな奴より真面目だし。あいつの息抜きみたいなもんなんだから」

「学校のド真面目な野々村先輩と外の綺麗なお姉さんな野々村先輩、どっちがホントの先輩だと思います？」

「どっちもあいつに決まってるだろ。とにかく、あいつにはかまうな」

にやにや笑いながら小関は頭の後ろで腕を組む。

「真崎先輩にそんなこと言う権利ないっすよ」

英彰はぐつと言葉を飲む。

その通りだ。

が、むかつくぞ、コイツ。

「俺の知る限りの人間で、野々村先輩のこと一番知ってるの真崎先

輩みたいなんできいてると教えてもらおうかなって」

「がったん、と音を立てて、英彰は立ちあがった。」

図書室の注目を集めてしまったこともかまわずに、英彰は倒れそうになった椅子をつかまえて、机に押しこみながら、

「訊く相手大間違いだろ。俺はあいつのことなんてなんにも知らねえよ」

「でも、彼女が親友でしょ、野々村先輩の」

親友、という言葉のアクセントにからかいを感じて、英彰は目を眇めた。

そして、そのまま彼を一瞥して、返事もせずに背を向けた。

胸がざわついている。

どうしようもなく。

権利がない。

それを言われたことがこんなにもショックだとは。

「権利なんて最初からねえじゃねえかよ、なにやってんだ」

自分に悪態をついて英彰は奥歯を噛み締めた。

最低最悪の振り方をしてくれた女に今更。

権利なんかあるわけねえじゃねえかよ。

放課後、小関は里奈の前に現われた。

1人で校門を出る里奈に、背後から声をかけてきたのだ。

うんざりとした目で里奈は彼を見た。

そんな里奈に小関はちよつとだけすねた顔をして、里奈の隣を歩き始めた。

「怖いですね、先輩」

「なんか用？」

「用がなきゃ声をかけちゃダメですか」

「ダメです。とくにあんたは」

「ひでえなア」

小関はからからと笑って、悠然と隣をキープ。

「受験勉強は進んでます？」

「おかげさまで」

「受験勉強の邪魔にならない程度でいいですから、今度、デートしましょ」

「……」

思いつきり顔をしかめて里奈は小関の横顔を見上げた。

このナンパ男、なにを言い出すかと思えば。

小関は里奈を見下ろしてきて、突然笑い出した。

なんなんだと里奈が眉をひそめると、小関は笑いながら、こんなことを言う。

「野々村先輩ってわかりやすいつすね」

「だからなんなのよ」

「俺のことそんなに嫌いですか？」

ため息が出る。

里奈はうんざりと肩を落とした。

「からかわれてうれしい人間いないわよ」

「俺、性格悪いから嫌われちゃうんですかね」

自分でわかっているなら直せばイイのにと一瞬考えたが、それが大間違いであることに気がついた。

こいつは、己の根性の悪さを悪いことと思っていないのだ。

「今週、デートしましょよ」

「やだ」

すると小関は制服のYシャツの胸ポケットから、写真を取り出した。ひらひらと里奈に向けてやったかと思うと、

「これ、匿名で長者番付の掲示板に貼り付けちゃいますよ」

これってなんだ？ と写真を見て里奈は絶句。

奈津美と英彰と一緒に歩いている写真。

それも私服で。

どうしてこんな写真がという驚きの中に、なぜか落胆もあって、ますますのどが詰まってくる。

「……どうしてそういうことばかりなの？」

「えっ？」

「卑怯過ぎて嫌い。そういうやり方」

「冗談ですよ。そんなマジにならなくても」

「冗談でも嫌。そんな写真撮ること自体嫌。もうついてこないできっぱりと里奈は言う。」

小関が驚いた顔で写真をポケットに収めて、早歩きになった里奈を追いかけてくる。

「どうしてこの写真見て、先輩が泣きそうな顔してんですか？」  
ますます頭に来た。

どうしてこいつは言うて欲しくないことをストレートに口にするのだろう。

返事をせずに里奈は唇を噛んでさらに歩調を速めた。

泣きそうな顔なんてしてない。

泣くもんか。

泣く理由がない。

だから、絶対に。

泣くもんか。

英彰から電話をもらって、話があるから一緒に登校しようと言われたとき、正直怖くなった。

付き合おうのをやめようと言われるのかと思ったので。

話があるなら今言つてよと、言えばいいのに奈津美は言えず、頭の中で一緒に登校している里奈への謝罪を組み立て始める。

翌朝、いつもより一本早い電車で英彰と待ち合わせた。

どんなことを言われるのかとびくびくして一夜を過ごしたくせに、英彰が待っていてくれるという事実は奈津美を舞い上がらせる。

英彰はすし詰め状態の車内で、ドアの脇に寄りかかっていた。

奈津美を見ると、手招いて奈津美が人に押されたりしないように場所を作ってくれた。

ときどきするなあ。

挨拶を交わしただけで、言葉のない二人の間。

そつと伺つと、英彰の横顔は涼しげに正面を見ている。

「変わったことない？」

改札口を出た後、突然英彰にそう言われて、奈津美は驚いて顔を上げた。

英彰は背が高いから、首が痛くなるほど見上げなければならない。

「ないよ」

はにかむ奈津美に、英彰は怪訝そうに眉をひそめる。

「本当に？ 困ったこととか起きてない？」

困ったことが起きていないわけではない。

上履きが盗まれて、嫌な思いをしている。

それが英彰のせいだということもわかっているけれど、英彰が故意にしているわけじゃない。

「大丈夫」

英彰は奈津美の言葉を信じていないのかもしれない。まだもの言いたげな目をしているし。けれど、それ以上はなにも言わなかった。

嫌な予感を抱えながら、奈津美はどうか上履きがありますように、と手を合わせながら靴箱の小さな扉に手をかける。

靴箱の中身を見て、奈津美はショックを隠しきれずに唇をかんだ。今日もなかった。

もしものためにと予備に持っていた上履きを、バッグから取り出して奈津美は泣きそうな顔を引き締める。

英彰の3-Aの靴箱はDと背中合わせになっている。靴を履き替えた英彰がDの靴箱まで回ってきた。

「どうしたの？」

様子がおかしいと思ったのか英彰がそう言ってくれるけれど、奈津美は首を横に振ることしかできなかった。

里奈が登校しているというのに、校門から出てきた生徒がいる。

時刻はもちろん朝。

「あいつだ」

里奈は小関輝樹という2年生がどうにも好きじゃない。やるのがなんだか汚くて。

無視して通り過ぎようとしたら、小関が里奈に気がついて陽気に手をあげてご挨拶してきた。

「野々村先輩　おはようございます」

「おはよ」

しぶしぶ返事をしてやって通り過ぎようとしたら、小関はあわてて里奈を呼び止める。

「先輩」

「なによ」

「怒ってます？ まだ」

困惑しながら里奈は小関に尋ねかえした。

「あの写真、どうしたの？」

「先輩に泣かれると辛いんで、捨てました」  
にこりとする。

里奈は小関を見上げて軽くにらんだけれど、表情よりは嫌な気分ではない。

「先輩は知ってると思いますけど、真崎先輩の周りにはいろんな人間がいますから。俺を含めてですけど」

「わたしと真崎はもう会話もしないってば」

「でも、友達が先輩の彼女じゃないですか」

「……」

「一度、自分の周りで何が起こってるのか、あの人にちゃんと知らせたほうがいいですよ。なんなら俺が言っちゃりましょうか、はつきり。陰険なファンがいるんですよとかなんとか」

里奈は笑って肩をすくめる。

その顔を見て、小関も笑う。

「どこに行くの？ 忘れ物？」

「家に帰るんですよ。夕べガッコに泊まったんで」

「泊まった？ 部活で？」

驚いてたずねてくる里奈に、小関は歯切れ悪く言葉を濁した。

「つつか、好きでそうなったわけじゃないんですけどね」

そんじゃ、と小関はひらひらと手を振って、歩き出した。

いまいちはずきりしない部分が気にならないでもないが、里奈も首をかしげながら歩き出す。



陰険なファン。

そういうものが実在するとは思いたくないけれど、奈津美の上履きは2回盗まれた。

「里奈、どうしよう。なんか世界中が敵って感じ」

奈津美は激しく落ち込んでそんなふうになり奈に泣きつくし、それを見ていた大野涼子委員長はあきれたように辛らつなお言葉。

「ああいう男と付き合っつていうことはリスクもあるのは当然ですよ。野々村に泣いたって盗まれるものは盗まれるのよ。野々村に甘えてないで彼氏に言いなさい」

「だって、言えないよ」

「本当に付き合ってるの？」

奈津美はうつむいてしまう。痛いところを突かれたらしい。

涼子はやれやれと頭に手を置いて、今度は里奈に矛先を向けてきた。

「野々村も過保護よ」

過保護かもしれないけれど、仕方ないじゃん、と里奈は唇を尖らせた。

「そんな風に言わなくてもいいじゃない」

涼子にすけすけ言われたことがずいぶん頭にきたらしい。

奈津美は珍しく強気な顔をして、

「頭来た。下駄箱見張る。朝来てないってことは早朝か放課後ってことでしょ？」

「なにが？」

「盗むの」

「まあ、そうだね」

「張り込むよ、わたし」

涼子は奈津美の手元を見ながら、冷やかな目つき。

「根本、一人でやりなね」

奈津美の手は里奈のブラウスをつかんでいる。

今日は家庭教師が来る日。

つまり聡明の訪問日なので、里奈は急いで家に戻った。

「これから風呂に入って……うーん」

今日着る服は夕べのうちに選んでおいた。

それを鏡の前で体に当てて、もう一度似合うかどうか確かめる。

「いいか、よし」

さて、お風呂に入るぞ、とバスタオルやら抱え込んだとき、電話の音が鳴り始めた。

母親が出たらしく、それはすぐに止んだ。そして、階段を半分降りたところで名前を呼ばれた。

「里奈ちゃん、女の子から電話よー」

「女の子？ 誰？」

「ごめん、名前は聞き忘れた」

「もお」

首をかしげながら、受話器を母親から受け取って耳にあてた。

「はい」

「野々村里奈さんですか」

「そうですね」

「お友達の根本さんが困っているみたいなので電話しました」

知らない声だ、誰だろうこの子。

「わたしのこと、言わないでくださいね。あの、うちのクラスの女の子が上履き盗んでるのを偶然見ちゃったんです。たぶん、またやると思います」

「え？」

彼女は名前を2つ挙げて、一方的に切ってしまった。

聡明が髪を切っていた。

「聡明、頭小さいね」

「これだけあれば、脳みそは十分だってことだな」

聡明の髪は、色は真っ黒で、さらさら。

細い目からのぞく意志の強そうな瞳も真っ黒。

そこに頭が小さいとくれば、案外何を着せても似合いそうな気がする。

「聡明、もっとおしゃれすれば？」

「あ？」

「スーツとかさ。イタリアものは狙いだよう、今」

そういいながら里奈が机にひじをつけて見上げると、聡明は目を半分にした。

「靴とか、スニーカーばかりじゃなくて」

「そのうちにな」

「非常勤で講師するんでしょ？」

「白衣着るから何でもいいんだよさつさと参考書開け」

ちえ。

聡明の服を見立ててあげたのになあ。

「ねえ、聡明」

「んー？」

参考書を開きながら、少し口ごもって里奈は言った。

お悩みは聡明にたずねるに限る。

解決しなくても、なぜか頭の中がすっきりしそうな聡明さんのお言葉だから。

「友達がピンチなんだ」

「友達？」

生返事をしながら聡明が机に手をつけて、参考書に視線を落とす。

「嫌がらせされてるの。かなり陰険なやつ」

「で？」

「誰がやってるのが教えてもらったのね、さつき、電話で」

「本人から？」

「うっん、知らない子。同じクラスの子が上履きを靴箱から盗んでるのを見たんだって」

「上履き。懐かしい響きだなおい」

「ちよつと、まじめに聞いてよ」

「ああ、わかった。で？」

「その友達がね、悪いことしたわけでは全然ないの。なんていうか、彼氏ができたんだけど、その彼氏がなんていうか、根性よくなくて、性格もいまいちなんだけど、顔だけよくてええかつこしいだから、女の子に人気あつて。だから、その、彼氏のこと好きな子たちが…

…なんかね、いたずらするんだ」

「友達つて、あの、ちつちやい奈津美ちゃんかよ？」

里奈は目を見開いた。

どうしてわかつたんだろ？

そんな里奈の驚きも気にも留めず、聡明はふうん、とつぶやく。

「奈津美ちゃん、彼氏できたんだ」

「誰も奈津美だつて言つてないよ」

「違うのかよ？」

違わないけどさ。

むすつとして口を閉じる里奈に、聡明はあつけらかなと言ひ捨てた。

「そんなん、彼氏に任せりゃいいんだよ」

「でもさ、友達だし」

「友達には友達の役割つてもんがあるだろ」

「わかんないよ、困つてたら助けてあげたいよ」

「助けてあげるつて、保護者かお前は」

ぽかんと問題集で頭を叩かれた

「友情と恋愛だったら、友情のほうが重いじゃん」

すると、聡明はなぜか笑い出した。

里奈が大真面目に言ったことなのに。

「俺、ほんと、お前のこと誤解してたつてしみじみするわ。初めてここに来たとき、大福食ったあとみたいな白い口してたしよ。アホ娘相手にどうすっかななんて考えたことが懐かしすぎる」  
嫌なことを思い出させるなとばかりに里奈は赤面しながら聡明をにらんだ。

あの時は、塾に行きたかったんだい。

父親が超過保護で、夜の塾通いを許してくれなかったから、家庭教師を雇うことになってしまつて、面白くなかつたんだい。

「だからなによ」

笑いながら聡明は里奈の頭を手のひらでぼんぽんと叩く。

「質によるだろ」

「質？」

「そつだよ」

聡明はそれだけ言つて、またまた笑つ。

からかわれているような気になつて、里奈はむっとしながら唇を尖らせた。

「だけどな」

聡明の瞳は笑いながらもどこか懐かしむような色を浮かべている。

「ホントのときは、俺にもわかんねえよ」

明日の自分と今日の自分は変わらなくても、5年後、10年後の自分は確実に変わつている。

明日と今日の間のほんのわずかな変化とも呼べないようなそれが、5年後、10年後の自分を創る。

里奈は聡明の横顔を見つめた。

聡明は机に手を突いたまま、窓の外を見ている。

この人の10年前は、どんな少年だつたんだろう。

そして、この人の10年後、どんな大人になつているのだろう。

好きだな。

以前のように泣きたくなるような、切羽詰つた気持ちではなくて、乾いた砂にやわらかい雨が降つたときみたいにその想いを感じる。

安心する。

この人はわたしを傷つけない。

守ってくれる人だと感覚でわかっているからかもしれない。

「奈津美ちゃんの彼氏ってどんなやつ」

「え？」

里奈の頬から笑みが消えた。

胸の中に降る柔らかい雨が、強い雨になる。

里奈の表情を見て、聡明がわずかに目を見開いた。

驚いたらしい。

聡明の目が和んで、細くなつて。

ぽんぽんと頭をなせてくれる、その手のひら。

そんなにやさしいのはどうしてなの。

わたし、どんな顔しちやっただらう。

里奈も散々嫌がらせはされてきた。

春の体育祭では痛い目にも遭わされた。

正体がわからない相手からの嫌がらせは怖い。

ほかならぬ奈津美のためだ、何とかしてやりたい。

「根本の問題なのに、どうしてあんたがここで張ってるのか理解に

苦しいわ」

放課後の昇降口で、物陰に身を潜めるように、壁に寄りかかって下

駄箱を伺う、里奈と涼子。

奈津美は申し訳なさそうにうつむくばかり。

「奈津美本人が張ってて盗む馬鹿いないでしょ。奈津美帰っていい

よ」

「あ、真崎には先に帰ってもらったから、大丈夫」

「隠れててよ？ 奥のほうでちっちゃくなって」

「あんたもその筋ではかなり有名人だと思うけどね、野々村」

「そもそもなんで大野まで」

「上履きを盗む輩というのは、どういふ人種なのか興味があつて」  
「ああ……」

里奈はおへその下のあたりを押さえながら、顔をしかめた。  
実は本日、女の子の日でおなかが痛かつたり。

「大野、鎮痛剤もつてる？」

「持つてるけど、野々村そんなに重かつたっけ？」

「最近辛くてさ。受験プレッシャーかな」

「ちよつと待つてて」

「ごめん」

涼子が自分のバック中を探る姿を見ながら、里奈はさえない気分を  
もてあます。

「はい。眠くならないらしいから、早く飲んできなさいよ」

「ありがとう」

「里奈、無理しなくていいよ？」

奈津美が心配そうに見つめてくるから、里奈はにこりと笑いかけた。  
錠剤を2粒手渡されて、水道へと向かう。

涼子は腕を組んで壁に寄りかかり、靴箱を伺っている。

蛇口から勢いよく出てくる手で水をすくうと、ひんやりとして心  
地よかつた。

まもなく本格的な夏になる。

そうすると夏休みになつて頼られ屋の役目から解放される。

無意識にそんなことを思った後、里奈はぬれた手で口を押さえた。  
なにかんがえてんのよ、わたし。

呆然としていると、涼子の声が聞こえたような気がして振り返つて  
驚いた。

「うっそ、大野！」

3・Dの靴箱の前で、涼子が仁王立ちをしている。

奈津美がその背後で口元を引き締めて、精一杯の睨みを利かせてい

るし。

涼子の声は凜と響いた。

「その上履きどうするつもりなの、現行犯！」

奈津美の上履きにはきちんと名前が書いてある。

高校生にもなつていやとべそをかく奈津美を無視して、涼子が内側にしつかり「根本奈津美」と記したからだ。

女の子が二人いた。

涼子が一人の手から上履きを取り上げて、確認する。

確かに奈津美のものだ。

里奈は夕べの電話を思い出して二人に尋ねた。

夕べ言われた2つの名前を口にしてみた。

「違う？」

お互いを見合つて目配せをし合つて、それでも二人は黙っている。

今までの嫌がらせをしていたのがこの二人だと思つたら、頭に血がのぼつて里奈が声を張り上げようとしたとき、それを制したのは奈津美の声だった。

「いい加減にしてね。最低だよ、こんなこと」

涼子からもらつた上履きを抱きかかえながら、奈津美は続けた。

「先生には言わないでおくから、もうやめてねこんなこと」

すると、二人は奈津美に鋭い視線を向けてきた。

「真崎先輩、趣味疑う」

ぼつりとつぶやく。

奈津美の顔色が変わる。

「みーんな、あんたなんて認めてない。彼女みたいな顔するのやめてよ」

「あんたたちね」

一歩前に出かけた里奈の足を涼子が止めた。



なにすんのよ、と涼子をにらんだとき、里奈の耳は奈津美がしつかりと言り返すのを聞いた。

「認めてもらわなくていいよ。別にあなたたちに認めてもらわなきゃならない理由なんて全然ないし」

「彼女みたいな顔じゃなくて、彼女なの。真崎英彰に存在すら知られていないあんたたちに何の権限があるのか教えてもらいたいわね。それにあなたたちのやっていることは窃盗よ。わかる？ 犯罪なのよ？」

ゆがんだ嫉妬はやめなさい。

そう、そんなものは自分を貶めるだけ。

涼子の言葉の後、里奈は視線を落としながら、

「奈津美はちゃんと認められてるよ」

3月の卒業式。

閉じたまぶたには、あのきれいな人の微笑が浮かぶ。

英彰のこと、よろしくたのむわね。

このリボンの利用価値は高いわよ。

「岩崎玲子先輩、知ってる？ 真崎の従姉の」

こくと、一人がうなずいた。

「奈津美はね、岩崎先輩からリボンをもらってるの。英彰を頼むって」

身に覚えのない奈津美は何がなにやら見当がつかず、目を見開くばかり。

里奈は奈津美の腕をつかんだ。

「ね、もらったよね」

頷いとけ。

視線で訴えると、奈津美はこくこくと首を縦に振った。

「うそ。証拠見せなさいよ」

「リボンを見せるってこと？」

「そうよ」

「明日、見せてあげる。奈津美、いいよね」

ぼんぼんと言葉を返していくものの、里奈の横顔が固いの気がついて、奈津美は首をかしげる。左手で右手を硬く握って、血の気が失せるほど白くなったそれをみて、奈津美は思う。里奈はもしかしたら。本当は口論するのとか怖いのかなあ。

2年生も帰り、奈津美と里奈も帰る事にした。けれど、涼子はなぜか慄然とした表情で用事ができたといい、二人に手を振った。愛想のカケラもないその態度を里奈は怪訝に思いながら、階段を登ってゆく涼子の背中を見送った。

「みてたの」

「一応」

「どうしてあんたまで？」

2階へと階段を登ると廊下がある。

そこは1階の昇降口を見下ろせるように吹き抜けていて、様子を伺うにはよい場所だと思う。

涼子は怒っている。

「真崎。いい根性してるわね。高見の見物つてわけ？」

腕を組んで手すりに背中を預けた英彰は、涼子から目をそらして黙り込む。

「全部、あんたのせいよ。あんたに悪気がなくてもあんたがきつかけで全部のことは起こってるのよ」

英彰が返事をしないので、涼子のため息をつく。

「なにがあつたかは知らないけど。いい加減目に余るわ。ここから

どんな風に見えたか知らないけど、あんなふう言い合う野々村をはじめて見たけど……野々村は強くないわ。別の意味では強いかもしれないけど、ケンカしながら声の震えを抑えて自分の手を必死で握り締めてる女の子のどろろ強いよ」

英彰は視線を涼子に向けて、目を眇める。

それでも口は開くことがなくて、いよいよ涼子は強い口調になった。

「野々村はきつと、今まで一人でそれをやってきたのよ。必死で自分に降りかかるものを払ってきたのよ。ねえ、あなたがどんなに野々村を好きなのか知らないけど、根本と別れて野々村からきっぱりと離れてあげなさいよ」

「誰が誰が好きだって？」

「あなたが、野々村里奈を好きなのよ。バカじゃないんだから見ていればわかるわよ。だから今まで散々野々村が嫌がらせされてきたんじゃない」

「憶測でものを決め付けるな」

「憶測じゃないわ。それじゃ根本のこと好きだっていえる？ 根本だって気の毒よ」

それは英彰にもわかつている。

けれど、今更。

涼子は髪をかきあげた。

苛立ちが伺えるそのしぐさは英彰の癩癩を乱暴に呼びつける。けれど、それを押さえつけて彼女の言葉を受けとめた。

彼女は正しい。

正しいことしか言っていない。

こんな場面に出会うたび……誰かと争うことになるとき。同じ後悔がいつも付きまとう。

どうして俺は。

野々村里奈に対して抑えられないのだろう。

苛立ちや尖った感情とか。

できないことはないのに。

「ちょっと、真崎」

涼子が英彰の寄りかかっている手すりに歩み寄ってきて、手をついた。

下を見下ろしたまま英彰の腕を叩く。

つられて見下ろして、英彰はわずかに目を見開いた。

奈津美の靴箱の前に女子生徒が一人いる。

「何者？ 二年っばいけど。見覚えある？ 真崎」

「いや」

奈津美の靴箱の扉を開けて、上履きを手にした彼女は何事もなかったかのように歩き出した。

英彰と涼子は顔を見合わせた。

「どこに行くのかしら」

さあ、と首をひねりながら、英彰の足は追いかけて始める。

そんな英彰をあわてて引き止めて涼子は言った。

「すぐに捕まえちゃだめよ。もう少し様子を見たほうがいいわ」

「そもそも、どうしてあんたあそこにいたのよ」

「根本が先に帰ってくれって言うし、昨日非通知の怪しい電話もらったし」

「怪しい電話？」

「根本の上履きを盗ってる奴の名前を二人言っただけ切れた」

「携帯に？」

「家の電話。出かける前ギリギリで受けて……女の子の声だった」

先刻の奈津美の上履きを持った生徒の背中を見ながら、二人がそんな会話を交わしていると、校舎を出てしまった。

「ちょっと、どこに行くのよ」

「この先は焼却炉？」

涼子は渋い顔で髪をかきあげる。

「最悪ね」

「わけがわからないな」

英彰が人差し指でメガネを抑えてうなるようにつぶやくと、彼女は焼却炉に続く渡り廊下を歩いていく。

「わからないことないじゃない。捨てるのよ。嫌いな女の上履き盗んだとしたら、大事に持って帰ったりしないわよ」

「女って」

「そういう言葉でひとくくりしないで欲しいわね。ほら、現行犯逮捕！」

涼子に促される前に英彰の足は踏み出していた。

あっという間に彼は100メートル先の焼却炉の前で上履きを放り投げようとしていた彼女の手を捕まえた。

悠長にそれを眺めながら、涼子は感嘆のつぶやき。

「本当に脚は速いわねー」

「なんですか」

腕をつかまれた少女は英彰を冷たく見上げてくる

背が高い。英彰と視点があまり変わらない女の子なんてあまりいないので、すぐにそんなことを思った。

自分の非は全くないかのようなその目つきに、英彰は眉を寄せる。

「それ、誰の」

「あなたには関係ありません」

「なくないだろ。昨日電話よこしたろ」

「なんのことですか。離してください。大声出しますよ」

英彰は彼女の腕をつかんだまま、彼女は上履きを握ったまま。

焼却炉の開いた扉の前でにらみ合っていたら、ようやく涼子が来た。

「出してみなさいよ。大声でもなんでも。真崎の弁護はわたしが引き受けるわ」

そして、涼子は彼女が固く握って離さない上履きをのぞきこんで、にこりと笑う。

「根本奈津美ってわたしが書いたのよ。自分の持ち物に名前を書くのは基本よね。あなた名前は？」

けれど、この少女は先刻の2人の少女とは趣が違う。

焦りの色が全くないというか、平然としている。

そればかりか落ち着いた声で、

「真崎先輩、腕が痛いです」

なんて言う。

言われて英彰が手を離れた瞬間、彼女は上履きを持っていた手を振り上げて、上履きで斜め横から英彰の顔を殴りつけた。

眼鏡が吹っ飛ぶほどの勢いのあるそれに涼子が目を見開いた。

「ちよつと」

「待てよ！」

英彰の表情を見て、涼子はあーあーと思う。

こんなに気の短い奴、本気で怒らせたらだめじゃないの。

英彰を殴って逃げようとしたのか。英彰に再び腕をつかまれて彼女は何度も腕を振り解こうとしてじたばたとする。

完全に目が据わってしまった英彰は力の加減をすることもなく、彼女の話の聞くこともせず歩き出した。

「痛いって言うてるでしょ！ 離してよ！」

「真崎、どこに行くの」

「職員室」

「エ？ いきなり？ 情けも容赦もあつたもんじゃないわね」

のほほんと涼子が後をついてきながらそんなことを言うけれど、英彰は歩みを止めない。

「現行だしな」

「教師なんて誰もいないわよ。こんな時間に」

「いるよ」

「ねえ、真崎。落ち着きなさいよ。職員室っていうのも天晴れだけ

ど、魂胆を知りたいわ。あんたをぶん殴るあたり絶対にあんたのフアンじゃなさそうだし」

「んなのどうでもいいよ」

そう言ったあとで、英彰は足をとめた。

黙っていると思ったら、泣いていた。

「あんたって、甘いわ」

「言っなよ」

涼子から眼鏡を受け取って、英彰は曲がってしまったフレームを治してみたりしたため息混じり。

彼の口元にはほんのりとあざができていて、口の中は切れている。

「泣いてるだけで許してもらえるなら、ほんと楽」

「言うなって」

「でも、あれ、嘘泣きだと思っ」

「嘘泣きであんなに泣ける？」

すると涼子はさらっと、

「泣けるわよ」

彼女はスミマセンでしたと涙ながらに頭を下げたけれど。そういえば名前もなにも自分のことは言っていないかった。

「まんまと逃げられたってわけね」

英彰の手には奈津美の上履きがある。

それを奈津美の靴箱に入れて、英彰は浮かない顔をする。

「ねえ、真崎」

「なに」

「あんた眼鏡がなくてもさつきからすすた歩いているけど、夜道平気なの？ 見えるの？」

「大丈夫」

「だといいいけど」

二人はなんとなく一緒に下校する具合になり、英彰は駅までみつき涼子に説教された。

「野々村は、強がりなだけで、強くないのよ」  
わかっているよと、英彰は思う。

おそらく、目の前で毅然とそれをいう君よりもぼくは彼女のことを理解している。

それくらい見つめてきたんだよ。

今だつて。

見たくないのに、見つめてる。

自分でもあきれてるんだよ。



3月に岩崎玲子さんからもらったりリボンは大切にクローゼットの引き出しにしまつてある。

卒業式に彼女はさすがしく笑つて、利用しなさいと言つた。プレスのきいたハンカチにはさまれたりリボンを見つめていると、泣きたくなつてきた。

手放すのがとても惜しくて、奈津美にあげてしまふなんてことをどうして言つてしまつたのだらうと、自分を責めたりして。

唇が何度もごめんなさいとつぶやいている。

利用しなさいって、先輩は言いました。

大切な友達のために、使います。

だから、ごめんなさい。

翌朝、電車で奈津美と顔をあわせると、挨拶もそこそこに里奈はカバンを開いた。

「奈津美、これ」

「え？ああ……」

里奈が夕べしょんぼりしながらカバンにしまつたりリボンだということに、奈津美はたいした感動もなくあっさりを受け取つた。

「これをもつてるだけで、本当に嫌がらせされなくなるのかな」

「わからないけど、ないよりはましだと思つよ」

「でも、なんで里奈が岩崎先輩のリボンを持つてるの？」

里奈の目が泳いだ。

焦りは上ずつたトーンの返事になつて、里奈をますます焦らせる。

「あ、あの、わたし、ホントは岩崎先輩と仲がよくて、うん」

「知らなかった」

「ごめんね」

なんでわたしがあやまってるんだろ。

そつとため息ついた。奈津美がその先を詮索するつもりがないことに安堵した。

「ありがと里奈。大切にするね」

奈津美がそういつてにこりと笑うから、里奈もにこりとした。

そのとき、電車がぐらりとゆれて、奈津美が里奈の腕にしがみついた。

里奈といえば、すっかり脚を踏ん張っちゃって奈津美を受け止めちゃって。

「大丈夫？」

「うん。やっぱり里奈は頼りになる」

てへへ、と笑いながら見上げてくる。

女として、わたしはいけないかもしれない。

フクザツを噛み締めながら、里奈は自分の足元を見た。

「英ちゃん、どうしたのその顔」

朝、洗面所で母親と遭遇するのはイヤだ。

彼女はここ数日、朝になると英彰にまとわりついて、いらぬことばかり言う。

そう、彼女は英彰の高校卒業後の一人暮らしについて、未だに納得できないでいる。

夜は夜で、母親と父親が帰ってくる頃には部屋で勉強しているという名目のモト、無視を決め込んでいる英彰も、朝になるとさすがにそういうわけにいかず、部屋から出てきて、付きまとわれるというわけ。

「口のところに、あざになってる。ねえ、どうしたの」

「なんでもないよ」

うんざりしながら、英彰は髭を剃り始める。

母親は英彰の背中の中ほどのほうでちよろちよろとして、鏡に映る英彰をフクザツそうに眺めている。

そうされていると、居心地が悪いというか、トラウマがうずくっていくか。

中学生のとき、髭を剃っていたら母親に悲鳴を上げられてしまったという、古傷。

「英ちゃんに髭なんて!!」

それだけではない。

両頬をつかまれて引つ張られたあげく泣かれた日には息子的に大変ツライものがあった。そして、まだ可愛い中学生だったから母親が泣くような行為を、つまり髭剃りなんぞをいたしてしまった自分が罪深いと錯覚してしまって、激しく自己嫌悪。

そのときは父親が豪快に笑い飛ばしてくれたので、なんとか場が納まったものの、すっかり英彰にはトラウマになっている。

そう。

今となつては思い出すたびに目が据わつてしまうほど、アホらしい出来事なんだけど。

母親はできちゃったわけでもないのに16歳で父親と結婚して18歳で英彰を生んだ世間知らずだから。

少女のまま大人になってしまったようなところがあつて、父親と英彰は彼女を守る人として家族をしてきたような気がする。

だから、泣かせてしまうなんてとんでもないとココロの中ではいつも思っていて、彼女が悲しそうな素振りでもしよものなら、口や態度ではどんなに冷たくしても、胸はいつでも傷む。

母親には本音を言えない。

「英ちゃん、一人暮らしなんてだめよ。タダじゃないし」

「それなら学費だけ払ってよ。バイトでもなんでもして生活費は自分で何とかするから」

「そんなこと英ちゃんにできるわけないでしょ。それにバイトバイトって学生の本分はどうなるの」

「学生の本分って意味わかってるの？」

「また馬鹿にして。とにかくだめよ」

顔を引き締めてみせる母親に英彰は冷たい目を向ける。

そうされて、母親はひるみかけたが、まけるもんかとがんばっている。

英彰はタオルで口を押さえながら、彼女から目をそらした。

「志望校、関西にもあるんだ」

「え？」

母親が目を見開く。

英彰は澄まして彼女の肩先を通り過ぎる。

「どうということなの、英ちゃん」

「遅刻するから」

そこに父親がやってきた。

寝起きそのもののぼさぼさのアタマで。

「また君たちは」

「英ちゃんが関西の大学も受験するって」

母親がすがりつくように訴えると、父親は意外そうに英彰を見つめた。

「関西？」

英彰はばつが悪いまま、視線を落とすことで肯定の返事。

「まさか、一人で暮らしたいから？」

「それだけじゃない。調べてたら面白そうな学部があったから」

「そうか……。英彰はどうして家を出たいんだい？」

「それは」

英彰のプライドとか両親への遠慮とかがなければ、即答することができる。

でも、英彰の口は別のことを言う。

「高校入学したとき、俺、父さんと話したよね。高校卒業後は家を

出たいて」

「うん、したね。でも、僕にすら理由を言えないまま、ただしいからというのは理由にならないよ」

「ちよつと待つてよ。話が違う」

「今の英彰には説得力がないんだ。それじゃ、お父さんは味方になれないよ」

唇を噛んで英彰は両親に背を向ける。

自分の部屋のドアを閉めて、感情の赴くまま、机を殴りつけた。

かなり激しい音がしたので、両親は今頃飛び上がっていることだろう。

あんたたちの息子は怒り狂っているという意思表示だ、思い知りやがれ。

怒りで詰まっていた息が通り始めると、右手から痛みがやってきた。

右手を押さえて肩で息をつきながら、英彰はそれでも納まらない何かを目頭に感じて、頭を抱え込む。

こうなったのは、すべて自分の性格ゆえのことだとわかっている。

どうしようもなく短気で、なのに両親には遠慮してしまう臆病者。

誰も自分を知らないところに行きたい。

煮詰まっている環境のすべて、それを放棄できるのは遠くに行くことだけだ。

母親に勢いで言ってしまったことを思い出す。

「関西か」

悪くないなと本気で思えた。

今までは、ちらりと頭を掠める程度のその思いつきが、英彰の腕を頭から外させた。

里奈のことが思い出されて、痛みのようなものを感じたけれど、彼女を思い出した今、尚更遠くに行きたいと思った。

それは現実逃避の典型。

何かかもをさらけ出すというか、つまりは今の本当の気持ちをすべて吐き出したところで、自分の期待する方向に事が進むなんてどうしても信じられない。

そればかりか、なまじ本心だけに拒否された場合の瑕は大きいだろう。

遅刻した英彰の生徒手帳を風紀委員が手にして、2時限の休み時間にも生活指導主任の教師のところまで取りに来てくださいと言った。

1時間目が始まるうとしている。

廊下に出ている生徒はいないので、英彰の足音だけがキュツと響く。足を止めてしばらく考えた後、英彰は半分まで上った階段を降り始めた。

「具合悪そうだね」

扉を開くと平井養護教諭がにやりと笑いながらそんなことを言った。冴えない顔で英彰が彼女のデスクまで歩み寄って、壁に立てかけてあるパイプ椅子を勝手に開いて座ると、彼女は英彰の方に体を向けた。

「真崎、コーヒー」

言われて、英彰は無言のまま腰を上げる。

かつて知ったるところと云うところで、戸棚を開いてコーヒーセットを手にする。

「いつものですか」

「うん、3種混合で」

「はい」

「どうした？ 担任には言ってきた？」

「いえ」

「今日は本当の客がないから、寝ててかまわないけど、どうする？ 頭痛か？ 腹痛か？」

「食欲ないんで、腹痛にしておいてください」

「わかった」

英彰にはいまいちこの平井養護教諭の基準がわからない。

ただ眠くてサボりたいだけでもベッドで寝かせてくれることもあるし、気分が滅入ってしかたない時でも追い払われてしまうこともある。

でも、追い払われたときは気弱になっているというか、気持ちの問題というか。

そのまま時間を過ごしていれば何とかなるようなことが多いとも思う。

「どうぞ」

「悪いね」

英彰が椅子に座ると、彼女は口元を歪めた。

「寝ないの」

「なんとなく、気分じゃないです」

「そっか。実はこいつを1時間で仕上げなければならんだ。相手はしてやれないけど」

「いいですよ。そんなの」

半分すねて英彰はデスクに肘をついて頬杖をつく。

平井養護教諭はペンをすらすらと走らせながら、

「1年の2学期だったかなあ、真崎がはじめてここに来たのは」

「よく覚えてますね」

「まだお前もちびで女の子みたいだったから、あんな顔して頼られるとおばさんはほっつとけなくていろいろ世話を焼いてやったもんだけど、そこまですごくかかると世話も焼きたくなくなるもんだね。

顔にあざまで作ってるし。日ごろの行いが祟って殴られたか」

「ほっといってください」

いささか赤面しながら英彰は唇を尖らせた。

「半年で10センチ？」

「伸びましたね。2年になるときは175cm超えてましたから。制服作り直したんですよ」

「まだ伸びてる？」

「どうだろ。最近停滞気味ですね。これ以上欲しくもないけど」

「それだけでかければ十分だわな」

「うん」

言いながら英彰は立ち上がって、近くにあつた身長計に乗った。

「いくつあります？」

「183？」

「げ」

また伸びたらしい。

英彰に付き合うように腰を上げた養護教諭は持っていたボールペンで英彰の頭をこつんとやった。

「寝てる。3時限からは出るよ」

言われるままに英彰は保健室の一番奥のベッドのカーテンを開いた。

靴を脱いでベッドに横になってカーテンを自分で閉めた後、目を閉じた。

眠れるといいなとぼんやり思った。

5時限の途中から降り出した雨が、いよいよ強くなっている。

廊下の窓ガラスから見える景色はどんよりと暗くて、また一段と雨が強くなりそうな気配。

放課後の掃除がおわると3年生は塾に行かなければならないから、急いで校門を出ていく。

奈津美も英彰を待たせたくないからと、あわただしく帰りの支度をはじめていた。

塾に行っているわけではない里奈は急ぐこともなく、モップを手に廊下にある掃除用具入れの扉を開いてその中身のすさまじさに、眉をひそめた。

見事にぐちゃぐちゃである。



下においてあるバケツにモップが4本突っ込まれてて、柄はあつちこつち。

雑巾は絞ったままでモップの柄に引っかかっている状態で、ひどいのは洗ってさえいない有様。

「入らないじゃない」

もっていたモップを壁に立てかけて、ブツブツいいながらロッカーの中で絡まっているモップを取り出そうとしてみたものの、バケツに引っかかって出てきてくれない。

「もお、男子は！」

廊下の隅で掃除用具入れに頭を突っ込んで、絡み合ったモップを取り出そうと半ば意地になってガンガンやっていると背後で人の気配手を止めて振り返ると、英彰がいた。

バッグを肩にかけているから、奈津美を迎えに来たのかもしれない。驚いて目をわずかに見開いた里奈は、なぜか決まりが悪くて掃除用具入れに向き直った。

すぐに通り過ぎるのかと思ったのに、なかなか英彰の足が動かないから、里奈は必要以上にモップを一生懸命取り出そうとしてガタガタと音をたてる。

バケツの中にモップを無理やり押し込んでいるから引っかかって動かなくなっているらしい。

モップは出てきてくれないし、英彰は突っ立っているしで、気まずくて仕方ない。

「かせよ」

「え？」

空になってしまった手の置き場に里奈が困っているそばで、英彰はいつも簡単にモップを4本まとめて取り出して壁に立てかけた。

どう反応していいのかわからずに里奈が呆然としていると、英彰は絡んだモップを1本ずつはずして里奈に預けてくる。

久しぶりに声を聞いたような気がした。

4本目を手渡された時、英彰があきたような目つきで見下ろして

きた。

それをされて気がついた。

息苦しい。

自分がどうしてこんなに息を詰めているのか、里奈はにわかに戸惑い始めて、英彰から背を向ける。

こんなに近くに英彰がいるなんてあの時以来だから、尚更そう思うのかもしれないけれど、落ち着かなくてどきどきする。

「ありがと」

ちらりと英彰はこちらを見てくれたけれど、それだけ。

一言もなく、英彰は歩き出してしまふ。

奇妙な時間だった。

英彰が遠ざかるそれを背中意識しながら里奈はことさら意地になつて箒だの雑巾だのを取り出した。

こうなつたら用具入れを掃除してやる。

気を取り直してロツカーの整理整頓を始めた。

モップをきちんと並べて立てかけて、バケツは定位置に。

「ねえ、野々村さん」

「はい？」

女の子にしてはハスキーな声だった。

副委員長と呼ばれないのが新鮮で、里奈は手を止めて体ごと振り返る。

奥沢いずみだった。

英彰のファンを公言してはばからないことで有名な隣のクラスの生徒だ。

数秒前まで英彰といただけに、里奈の驚きはなおさら大きかった。

「整美委員でもないのに、なにしてんの」

「モップが入らなかつたのよ」

「それ、時間かかりそう？」

「え？」

箒をにぎつたままぼかんとする里奈に、奥沢いずみはむっとしたよ

うで、早口に言った。

「一緒に帰らない？ 野々村さんがよければの話だけど」

「え？」

「ますますぽかんとする里奈に、いずみはますますむっときたらしい。

「手伝ってあげるから、一緒に帰ろうって言ってるの」

「あ、ありがとう」

「いいのね？」

「う、うん」

奈津美は英彰と下校しているから、里奈はフリーだし。

「だけど、どうい風風の吹き回しだろ。」

「ちよつと待つてて、かばん持つてくるから」

「いずみは颯爽と自分の教室に戻って行った。」

「何事だと首をかしげながら、里奈が再び掃除道具に挑み始めると、

「今度は背中からブラウスを引っ張られて、叩かれた。今度はだれよ

と振り返ると奈津美だ

「痛っ」

顔をしかめて、奈津美が頬を膨らませて立っている。

「今度はお前かと里奈が肩をすくめると、奈津美は鞆を振り回す勢いでまくしたてた。」

「里奈、奥澤さんと帰るの？」

「ねえ、最近大野とかと仲良すぎない？」

「は？」

「は？」

「なんか寂しいな。里奈のこととられちゃうみたい」

「里奈の目が半分になる。」

「腕に雑巾がなかったら頭を抱えているところだ。」

「あのねえ」

「大体、あんたに彼氏ができたからこういうことになったんでしょ

「が。」

「わたし、今日、里奈と帰る」

「むっつりと唇を尖らせる奈津美に、里奈は諭すように言った。」

「真崎が待つてるんでしょ。さつきあいつ歩いていったよ」

「いい。真崎には先に帰ってもらおう」

「バカなこと言ってるんでないで、奥澤さんと約束しちゃったし。わたしは奈津美の親友です。奈津美が一番です」

「すっごいめんどうくさそうな言い方してる」

「だって、奈津美が変なこと言うから」

「寂しいのは本当なんだよ」

「なんだかイライラしてきた」

「やきもちを焼いてくれるのはうれしいけど、このごろ自分勝手だ奈津美は。」

「それじゃさ、真崎と一緒に帰るのやめて、ずっとわたしと帰ってとか言ったら奈津美困らない？」

「奈津美が言葉を失っている。」

「迷うなよ、と突っ込んでやりたいところだが、入学以来あこがれ続けた彼氏だ、迷うのも当然だろう。」

「冗談。とにかく、真崎待つてるからにはやく行ったほうがいいよ」

「うん」

「しょんぼりとして奈津美が歩き出す、

それでも、振り返って、

「奥澤さんと仲良くしすぎちゃイヤだからね！」

なんて言う。

見送りながら、里奈は渋い顔になる。

「そんな大きな声で言ったら……。」

奈津美が階段を下りて行くまで見送って、里奈はやれやれと肩を落とした。

「ぱっかじゃないの、あの子」

「いずみが目を据わらせながら、リュックを抱えて歩いてきた」

「ほら、聞かれちゃってるし。」

「トホホ笑いを浮かべながら、里奈はいずみにごめんと謝った」

「そう言わないでやってよ」

「何が仲良くしちややだ、よ。精神年齢疑うわ」

いずみはリュックを背負うと里奈の足元でしゃがんで、雑巾を拾い始めた。

「洗うんでしょ？」

「わたしやるよ」

「二人でやったほうが早いよ」

「……ありがとう」

いずみは手際よく雑巾を絞って、新しい雑巾を流水にさらす。

てきぱきとした動作に、里奈とはまた別タイプの「頼られ屋」の姿が見える。

「リボンのこと、きいたよ」

「リボン？」

「瞬何のことがわからなかったが、ぴんと閃いた。」

「あー！」

「靴箱で悪さしたコたちにはきつく言っておいたから、もうやらな  
いと思う。でも、根本さんが玲子さんのリボンを持っているってど  
ういうこと？ 玲子さんに電話したら、根本奈津美なんて知らない  
って。野々村さんにリボンをあげた記憶はあるけどって」

どうしよう。岩崎先輩にばれた。これが周囲に知れることになっ  
たら奈津美はどうなるのだろう。

うるたえ始めた里奈の顔をいづみは眺めて、肩をすくめた。

「大丈夫よ。玲子さんに電話できる後輩はわたしくらいだし。誰に  
も言うつもりはないわ。玲子さんも笑ってたしね」

「笑ってた？」

「うん。あのコらしいって笑ってた」

「……」

なんだかしよげてしまっ。

水道の脇には窓ガラスがある。

雨は次第に強くなり、まるでガラスを洗っているよう。

雨音に耳を傾けながら、里奈はごしごしと雑巾をこすり、いずみから目をそらしていた。

「英彰君とわたし中学同じなのね」

「ふうん」

「英彰君って素直なの。好きな人ができたら好きな人だけ見てるし、好きな人がかまってくれたらにやけてんのよ、そのたび。顔がああだから落ち着いた感じに見られてるみたいだけど」

「……あいつ、バカ？」

「かもしんない」

いずみは笑う。そして、きゅつと雑巾を絞って、

「わたし、英彰君に好きな人いるならそれでもいいんだ。寂しいって思うことは思うけど、英彰君が楽しそうにしているほうがいいんだ」  
里奈が無言のまま見つめると、いずみは顔をしかめた。

「わたし、英彰君に告白なんて一度もしたことないよ。変な噂たてられて迷惑してるんだから。それに告白したって英彰くんは誰かにばらすような人じゃないし」

「そうなんだ」

「うん」

いずみは英彰に何度も告白をして振られていると里奈も聞いたことがある。

すべてデマだったということになると、それはそれで感慨が深い。

里奈も雑巾を洗い終えて蛇口をひねって、水をとめた。

「野々村さん、時間ある？ どこか寄り道していいこうよ」

今日は家庭教師の日ではないから、可能だ。

「なにか食べる？」

当然のように里奈が言つと、いずみはきょとんとしてそれからくすくすと笑った。

「野々村さんお腹すいてるの？」

「うん」

素直にうなずくと、いずみはますます笑い出した。

「ラーメンとか平気？ もしかして」

「平気というか、気にするようなことなの、ラーメンって」

「気にしなくてもいいけど、なんだか野々村さんのイメージ崩れた」

「イメージ？」

「放課後寄り道なんてしないひとかと思ってたのに」

「いいじゃない、校則で禁止してるわけじゃないし。わたし味彩亭

の味噌ラーメン好きだよ」

「それじゃ、味彩亭行こうか」

「うん、いいね」

普段そんなに仲良しでなくても、きっかけがあれば盛り上げられるもの。

味彩亭は里奈たちの高校の最寄の駅に近い、学生御用達のラーメン屋だ。

味最低とかそれこそ低レベルなことを言っただけの客もいるけれど、いつもそれなりににぎわっている。

運良くあいている席があり、そこにさっそく陣取ると、いずみはバッグを置きながら、

「部活の連中が来る時間じゃないから、まだよかつたね」

「うん」

雨でぬれてしまった制服の肩をハンカチでばんばんと叩きながら里奈が返事をする。

その間にいずみがセルフサービスのお冷とおしぼりを取ってきてくれて、里奈は感動してしまった。

「奥澤さんっていいひと」

「なに言ってるんだか」

普段、あれやこれやと世話を焼く立場の里奈だから尚更感動してし

まったわけで、そのあたりのココロの動きを説明すると、いずみは深くうなずいた。

「わかる。人に淹れて貰った番茶の美味しさと通じるものがあるわ。野々村さんもわたしもおせっかいなのよね」

おせっかい、には多少ぐさりときたが、正論でもある。

「特に野々村さんは周りを気にしすぎ」

「そ、そっかな」

「でもわたしも、だめなんだよね」

注文をとりに来たエプロン姿のおにさんに、味噌ラーメンとタン麺を頼んで二人で水を飲む。

そうしてからふうと息を吐いて、いずみが、

「好きな人にも絶対に好きだなんていえないし、ばれたくもない。

見栄っ張りって言うかさ自信がないって言うか」

いずみの言葉は里奈も自分のそれとして口にできるほど身にしみている。

「……わたしも好きな人いるけど、そのひとには絶対に言えないな」

「英彰君？」

「ちがう。べつのひと」

いずみは目を見開いた。

なんで誰も彼もわたしと真崎を結びつけるかな。

いずみの視線を受け止めながら、手持ち無沙汰を感じた里奈は割り箸を2膳取って、一本をいずみに手渡した。

「でも、なんだか最近好きになって欲しいとか、そういうの超越しちゃった感じなんだ。見てると好きだなあってしみじみするけど、前みたいに切羽詰った感じはないの。片思いに年季が入ったのかも」といずみはせせら笑った。

「飽きてきたんじゃない、単に」

飽きたという言葉に里奈は力チンときて、微妙に目を据えた。

このあたしが、聡明のことを飽きるもんか。

クリスマスだ、七夕だとイベントがあるたびに真っ先に思うのは聡



明のこと。

口紅を選ぶ時だって聡明が好きそうな色を探してしまったり、ノート  
の端に書かれた聡明のらくがきはたとえアホたれーとかいう  
ふざけたものでも宝物だ。

ただ、前より落ち着いてきた感じがするだけ。

「わたし、好きな人いるんだ、じつは」

「実はって」

いずみの唐突な言葉に真崎英彰のことだろうと里奈が安直に思うと、  
いずみはそれを読んだようににやりと笑う。

「英彰君じゃないよ」

「へっ?」

「英彰君のこと好きな女のこいっばいいるけど、本当に好きなのは  
どれくらいいるのかなあって考えるとときがある」

「……」

「英彰君も案外そういう部分わかってて、そっけないのかもしれないな  
い。野々村さんには意味もなくかまってみせたり可愛いところあんの  
にね」

「イヤ、それは」

「英彰君ってさ、昔からバカ正直なのよ。中学のとき彼女できたときも  
浮かれてたもん。一つ上の先輩好きになって、気持ちを隠そうとしないって  
いうか、いつも笑っててさ。性格なんてそうそう変わるもんじゃないでしょ。  
今だって彼女できたりしたら、浮かれて歩いてるはずなのに今、全然笑ってないよ」  
ライメンがやってきた。

いずみはさっさと手を合わせて、どんぶりに箸をつける。

里奈はそんないずみのことを眺めながら、実にフクザツで。

「奥澤さんがわからない」

「ん?」

「なんであたしに真崎の話するのか、わかんない」

「わたしね、英彰君の好きな人が野々村さんならいいなあって思っ

てんの」

「な、なんでよ」

「野々村さんならいつかー、みたいな気持ちあんの。英彰君のタイプの女の子だって納得できるから」

あっけらかんと言われて、絶句する里奈を尻目にいずみは割り箸の先を里奈に向けて、

「中学のときの英彰君の彼女、野々村さんに似てるよ、雰囲気。学級委員とか必ずやってるタイプだったけど、威勢が良くて」

「……」

なんだろう、真崎の前の彼女と似ていると言われて、気分が滅入ってきたのは。

そんなことを感じながらラーメンをつついてみても、口に運ぶ気になれなくて。

「英彰君、さっさ野々村さんのところに来たでしょ？」

「うん」

「あれ、偶然じゃないよ」

「……」

「英彰君、いつもBの前の階段を使うでしょ？ Dの前なんか通らないのに、通ったのは、野々村さんがいたからよ」

「そんなことないよ、奈津美がいるからだよ」

「英彰君、しばらく野々村さんのこと見てたもん。突っ立ってどこ見てるんだろうと思ったら、掃除ロッカー相手に不機嫌そうにモツプでガンガンやってた野々村さんがいたんだもん」

なんともいえない気分だ。

恥ずかしいのと、照れくさいような、くすぐったい気持ちと。

「英彰君よりもかつこよくないのに、なんかね。気になる奴がいるから、こんなこと思うのかもしれないけど……。余計なおせっかいだって英彰君に怒鳴られそうだけど。最近、英彰君見られないからさ。いろいろと事情もあるんだろうけど、野々村さんも優しくしてあげてよ」

箸の動きを止めて、里奈は唇をちいさく噛む。

ごめんねって思った。

真崎にはやさしくしてあげられないの。

そんなことする資格ないの。

「あたし、根本さん嫌いだけど、かわいそうだなって思う。英彰君はどう見ても野々村さんが好きなのに。一生懸命じゃないあの子なりに。最低なことしてる英彰君見たくないから尚更あの子のことイラつくのかな。そうなるなら八つ当たりだよな」

「真崎の話、やめようよ」

「え？」

里奈はいずみから視線をはずしてそうつぶやいた。

あかん、泣きそうだ。

いずみの言葉を聞いていると、自分のしたことの酷さが身にしみてくる。

真崎も傷つけた、奈津美にも誠実じゃない。

なにやってるんだろう、あたし。

本当はこんなことをしているはずじゃなかった。

「野々村さん、すーし、英彰君のこと気になってるでしょ」

「そんなことないよ」

そっけなく言い返すと、いずみは肩をすくめて再びラーメンを食べ始めた。

「食べないとのびるよ」

「うん」

真崎のことなんて好きじゃないし。

奈津美は大事な親友だし。

やさしくなんてできないよ。

「奥澤さんの好きな人ってどんなひと」

いずみは軽く里奈をにらんで、ニッと笑いかけてきた。

「おしえないーい」

夏休みが1週間後に始まる。

うっとおしい梅雨も明けたし、期末テストも終了した。それでも浮かれていられないのが受験生。

高校でも希望者のみ夏休みの午前中、夏期講習を行う。

真夏の暑い中、クーラーなしで4時間もがんばれるか、それとも予備校の快適なクーラーで午前中といわず一日を過ごすか。

いろいろと迷ったけれど、学校の夏期講習を受けることにした。訊いてみれば大野涼子委員長も学校の夏期講習を選択したそうで、奈津美がまたもすねそうだと里奈は内心ため息をついている。

「里奈、放課後図書館で宿題やってるの？」

昼休みに奈津美にそんなことを言われて、里奈はうんと返事をしただけで済ませた。

奈津美は里奈よりも彼氏を優先していることに後ろめたさを感じているらしく、里奈の放課後の動向をなにかにつけて気にかけてくる。

確かに、奈津美と英彰が付き合いだしてから放課後、家教の日以外は図書室で宿題を片付けてから帰ったりすることが増えた。

そうすると、例のふざけた根性の持ち主・小関輝樹なんか冷やかしに来て、里奈をイラつかせては楽しそうにケタケタ笑う。

今日も目の前には小関がいてああだこうだと話しかけては、里奈のこめかみに血管を浮き上がらせていた。

「でえとしましょーって」

「しません」

「それじゃ、勉強会」

「ばかいつてんじゃないわよ」

「俺の家庭教師になつてくださいよ」

「あのねえ」

もっていたペンをパチンと机に弾くように置いて、里奈はじろりと小関をにらみつけた。

「それ以上、なんか言ったら叩くからね」

「叩く？」

問い返した小関は目をくりくりとさせて、あははと明朗そのものに笑って見せた。

「叩くつて、先輩、かわいいなあ、叩くだつて」

コノヤロオ、と里奈が腰を上げて本気でノートを振り上げたとき、避けるしぐさをして身をそらした小関があっ、と呟いた。

「真崎先輩だ」

「エツ？」

ほら、と図書室のドアを指差した小関の表情はなぜか不快そうに見えた。

「珍しいじゃん、校内で2ショット」

「りなー！」

英彰の隣には奈津美がいて、ニコニコと手を振つてとことこと歩み寄ってきた。

英彰はその場に足を止めて、こちらを伺いながら所在なさげにポケットに手を入れたりしている。

「図書室にいるかなあつて思つて」

「どうしたの、びっくりした」

「真崎も今日は塾ないんだつて。いっしょに勉強しよ」  
アタタ。

無邪気に奈津美は言ってくれるけれど、里奈と英彰には痛い話だ。ちらりと里奈は英彰に視線を送った。

少しだけ彼に腹が立った。

なんでわたしがいるところに奈津美と来るかな。

「ごめん、わたし一人で勉強したいんだ。今暗記してて」  
「え、暗記？」  
「うん」

本当は古文の問題を解いていた。

古語辞典を片手に問題集に取り組んでいたので、暗記ではない。

「……そっか。そっかあ……」

奈津美が残念そうに頭を垂れるのをなんともいえない後ろめたさで眺めて、里奈はごめんね、とつぶやく。

すると奈津美はにっこりと笑って、胸の前で両方の手のひらを振ってみせた。

「いきなりきちやったわたしも悪いんだよね、ごめんね」

奈津美の視線が小関君に何気に向けられている。

小関は奈津美と目が合うと、ニコツと笑ってみせたりして。

「ち、ちがうよ、奈津美」

「わかってる、うん」

「ほんっとーに違うからね」

「わかってるよ。里奈は聡明先生だもんね」

「へッ？」

奈津美はわかってるよん、と里奈の肩をぼんぼん。

「里奈はつきり言ってくれないけど、里奈のことはわたしがいちばんよくわかってるもん」

「……あ、バレてたの？」

わざとらしくおどける里奈を小関が胡散臭そうに見上げて、そして、鼻で笑った。

いつの間にか英彰は、里奈たちからいちばん遠くで空いていた机に座って、ノートを広げたりしている。

「あ、ほら真崎がまつてるよ」

「う、うん。あの今日、一緒に帰ろうよ」

「うーん、考えとく」

奈津美が英彰のところに向かうその後姿を眺めながら、小関が言

った。

「相当おめでたいですね、あのひと。女子高生かくあるべき、みたいな。かわいいなあ」

「奈津美のこと、それ以上なんか言ったら殺すよ」

里奈は古文の問題集に視線を落としながら、ペンを握り締めて静かに言う。

「女の友情は、殺人までやるんですか」

「あなたにはね」

「俺、マジであのひと可愛いと思いますよ」

「ふうーん。でも、だめだからね。真崎がいるんだから」

「素直で可愛くて、守ってあげたくなるような女の子。でも、ああいうタイプがいちばんアレですよ」

落としていた視線を上に向けて、里奈は小関を見つめる。

小関の目線は英彰と奈津美の姿に向いている。

追うように里奈も、彼らが肩を並べて真ん中に置かれたひとつの教科書を見ている様を見つめてしまう。

「独占欲が強くて、すべてを自分の物にしておかなければ気がすまないんですよ」

「殺そうか？」

里奈が物騒なことを口にしたので、小関が肩をすくめる。

「どうしてそこまでお友達のために」

「友達だからよ」

「損なタイプですね、野々村先輩」

言われながら、里奈の目は奈津美と英彰を見ている。

友達は今、自分のそばにいないで、別の人という。

そして。

英彰が腕を伸ばして、奈津美のノートに何か書いている。そして、二人で笑う。

胸が痛んだ。



やりかけの古文の問題集。

あたしはコレをさっさとやり終えてここから出て行かなきゃ。

自分に言い聞かせて里奈は、ペンを握りなおす。

「なんていうか、先輩けなげでむかつきますね」

からかいをのせながらも、小関の声は乾いている。

里奈はそれを無視した。

「面白くないからって、俺に八つ当たりするのやめてもらえます?」

「……」

「あ、やっぱりいいですよ。八つ当たりしても」

里奈は小関を睨む。

「静かにしてくれない?」

「はい」

「どこかに消えてくれてもいいんだけど」

「それはだめです」

「どうして」

小関はおどける風に腕を広げる。

「俺がこうしていれば、先輩の視界からあの二人を遮れるでしょ。」

俺がいなくなったら風通しが良くて良くて」

「ばか」

たしかに英彰が座ったのは、里奈のいるところから離れているけれど、正面だから向かい合っているようなもの。

「俺が先輩のこと隠してあげます。なんでどーぞ、その雨月物語に全力投球してください」

痛いよーってうずいていたキモチがほんのりと暖かくなる。

それでも、この小関君の前では素直に笑えずに、里奈はそっぽをむいた。

「暇人」

「おれ、ジョン・レノン好きなんですよ」

「?」

「イマジン」

「……ごめん。オヤジギャグだったんだね」

「ワカモノぶらないでもらえます?」

里奈はくすりと笑った。それを見て小関も笑う。

「ばかね、と、もっていたペンで小関の頭をこつんと叩いて、里奈は胸の中でありがとうと彼に頭を下げる。

見えないようで、見える里奈の姿を、頬杖をついて斜めに上がった視線で英彰は見ている。

小関の頭をペンでこつんとやって、照れくさそうなはにかんだ笑顔を浮かべる。

その笑顔には見覚えがあつて、英彰の胸がざわざわとした。

ほんの少し前、桜の季節のころには自分に向けられていたそれ。

まぶたを閉じることで、里奈の姿を見ないことにするのに、残像がある。

奈津美がとなりで、小鳥みたいに可愛い声で話している。

その声を聞いていると、ささくれ立ちそうな気持ちをおしとどめようという理性が働く。

でも、何を話しているの、君は。

そんなに楽しそうに、俺になにを言いたいの?

ごめん、また聞き流してる。

なんの因果か奈津美が隣を歩いている。

駅までの帰り道、女の子同士の久しぶりの意味のない言葉のやり取りに奈津美はうれしそうだ。

しかし。

里奈の背後には小関がいて、そのとなりには英彰がいて。

英彰の不機嫌が背中に伝わってくるみたいで、居心地が悪すぎる。

石畳を模倣したコンクリート張りの歩道を歩いていると、駅が見えてくる。

「里奈、今日、聡明先生来る日だっけ？」

「ううん。明日」

「あれ曜日変わったの？」

「うん、聡明が仕事を始めてね、忙しくなっちゃったから、スケジュール変更。でも週2で来てくれるから」

「大学院やめちゃったの」

「ううん。院に行っても仕事できるんだって」

「ふうーん」

奈津美がふと、後ろを振り返って英彰を見る。英彰は奈津美と目が合うとにこりと口元で笑って見せた。

それを小関があきれたような目で見て、

「キモイな」

ぼそりとしたつぶやきに、英彰が睨んで返す。

無言で睨まれて、小関はフン、とせせら笑って返した。

その態度が癪に障って、英彰はますます不機嫌になる。

で、小関から目をそらせば里奈の背中が見えて、なんてこったと頭を抱えたくなる。

なんでこいつらと一緒に帰らなければいけないのか。

ましてカメラ小僧とは冗談でも並んで歩きたくないというのに。

「根本先輩、たのしそーっすね」

小関の言葉に奈津美が振り返った。奈津美は人見知りをする。面識の浅い小関にはまだ緊張するようで、頬をわずかに染めながら、

「そ、そうかな」

なんて愛らしく首をかしげる。

「そんなに好きならずっと野々村先輩といればいいのに」

「えっ？」

返答に窮したらしい、奈津美は言葉を返せない。

見かねて里奈が、

「彼氏がいるんだから、余計なこと言わないの」

「あ、怒ってますね。彼氏いない人が」

「うるさいわね。余計なお世話よ」

「だから、俺がなつてあげますって」

「いらないっ」

「照れちゃってー」

「バカじゃないの?!」

里奈が半分ムキになって言い返すものだから、小関は面白くて仕方ないというようにぼんぼんと言葉をなげてる。

「うるさいっ」

里奈がとうとう一喝した。

でも、小関はにやにやと笑って腕を頭の後ろで組んだりして余裕綽綽。

「怒った顔も可愛いです。カメラもってないのが悔しいっす」

カメラと言われて里奈は改めて小関の手元を見た。

「そっいえばカメラどうしたの？」

「いつも持ち歩いてるわけじゃないですよ。でも、まあ、小さいのだったりすれば、ほぼ毎日持ってますけどね。愛機はメンテナンス中なんですよ」

「メンテナンス？」

「レンズがね、傷ついちゃって」

「え、修理ってこと？」

「うん。だから寂しいの、小関君」

「あんたって奴は」

里奈の同情の目は、次の瞬間半分になって据わってしまった。

「慰めてほ・し・い」

なんて言いながら、里奈の背中に抱きついて後ろから腕を回してぎゅ、なんてしたので。

「なにすんのよ、この変質者!」

「いてっ」

里奈が叫んだのと、小関の悲鳴が上がるのはほぼ同時だった。

小関が離れてくれたのにほっとしながらも、まだ振り払うこともしていないのにと里奈がきよとんとすると、英彰が低い声で、

「いい加減にしろ、バカ」

小関が後頭部を抑えて、英彰にブツブツ言っている。

「すぐ暴力ふるうんだから」

「どうやら英彰が小関の頭を張り倒したらしい。」

英彰はイライラしている様子で前髪をかきあげて奈津美に言った。

「根本、俺、先に行く。こいつといると、イラついて仕方ない」

「あら、大人気ない」

「金輪際、俺の前に姿見せるな」

「見せたらどうなるんですか？」

「自分で考える」

英彰は奈津美の肩先を追い抜いて、足を速めてしまう。

奈津美が眉を寄せているのを見て、里奈は言った。

「追いかけたら」

「いい。今のは真崎のワガママだもん」

「おお、強気ですね」

「黙んなさい、全部あんたが悪いんじゃない。ふさげ過ぎ」

奈津美はため息をつきながら、

「いちばん好きな二人が仲良くないのは、寂しいな」

なんて言う。

里奈の表情が止まってしまふ。

叩かれたところをさすっていた小関の手の動きも止まってしまった。

「里奈、真崎と仲良くしろとは言わないから、普通に会話とかできない？　なんか二人して避けあってるんだもん。ツライよ」

ハイ？　と小関が耳を疑うしぐさをする。そんな彼をひと睨みして黙らせた後、里奈は口ごもりながら、

「ごめん、なんかうまくいかないの。よくないのはわかるんだけど」

「あのさ、根本先輩。野々村先輩困ってるよ。できないことはでき

ないんだからさ」

小関が冗談っぽく言って、奈津美に笑いかけた。奈津美は納得できないらしい。

「無理強いはなんでもよくないよ。先輩」

駅について、英彰がベンチに座って足を組んでいる姿を見つけた。ついでに腕も組んで下を向いていてさらに眼鏡をはずして目を閉じている。

「寝てるんですかね、あれは」

「さあ？」

里奈と小関が首を傾げあうのを聞きながら、奈津美は胸に広がる嫌な感情を押さえつけようと必死になった。

色で言うなら、それは灰色、夕立が来る前の雲の色。

なんで、真崎は里奈のこと避けてるの。

なんで、真崎は里奈にじゃれつく男の子に苛立つの。

その疑問に対して、奈津美の中にはちゃんとした答えがある。

でも、それを認めてしまうのは辛すぎるから、仲良くして欲しいとしつこいくらいに思うのかもしれない。

里奈も好き。わたしを大切にしてくれる。

真崎も好き。理想そのものの男の子だから。

どっちも好き。

好きなのに。



4時間目が終わって昼休みになると、里奈の机の前には涼子と奈津美がやってきた。

「ねえ、3人で外で食べようよ、天気もいいし」

奈津美が里奈のシャツをつかんで甘えたような声を出す。

涼子はちよつと待て、と腕を組む。

「いやよ、外なんて暑いし、紫外線は女の敵」

「日焼け止めかしてあげるよ、大野」

「野々村は根本に甘いんだから」

やきもちを焼いているとか何とか言いながら、奈津美は涼子にもなっている。

里奈がお弁当バッグをつかんで歩き出そうとしたときには、奈津美は涼子の腕にしがみついている。

「暑苦しい」

「仲良くしようよ、大野。あと3日で夏休みになっちゃうんだよ」

「こーゆー仲良しの仕方はイヤ」

「野々村さん」

呼ばれて振り返ると、奥澤いずみが固い表情で入り口から歩いてくる。

「あ」

いずみを見つけて笑顔を浮かべた里奈だが、彼女がどうしてか怒っている様子なので、腰が退けてしまう。一緒にラーメンを食べて以来、いずみとはぐつと距離が近くなって携帯でメールのやり取りをするまでになっただけだ。



いずみは里奈の前に立った。その様子は仁王立ちにも近くて里奈をはじめ、奈津美が怯えるほどの勢이었다。

そんな彼女に涼子が、

「どうしたのよ、血相変えて」

「どうしたもこうしたもないわよ。英彰君の志望校、地元は本命の1校だけ、あとは全部関西方面に変わっちゃったって」

「は？」

里奈がぼかんとする横で、奈津美が顔色を変えた。

いずみはなおもたたみかける。

「福岡だとか、名古屋だとか、大阪だとか、京都だとか、とにかくここから離れるところばかりよ。どう思う？」

「ねえ、それ本当なの？」

奈津美が口元に手をあてて、いずみに問う。

「本当よ。あなた知らなかったの？」

彼女なのに。

いずみの目がそれをありありと述べているから、奈津美は唇を引き締めて目をそらした。

傷ついた奈津美は泣きそうな顔をして、

「わたし、訊いて……」

と、つぶやきかけた横で、里奈が無表情になっていた。

そして、低い声でつぶやく。

「あのバカ」

「どこいくの、里奈」

里奈は返事をしなかった。

正確には頭に血が上って、聞こえなかったというのが正しい。

里奈はお弁当バッグをもったまま、歩き出していた。

それも競争に近い勢いで教室を出た。

呆然と里奈の背中を見送った奈津美のそばでは、涼子といずみが意味ありげなアイ・コンタクト。

「泣かないでよね、根本」

「泣かないよ」

むっとしたように奈津美が言い返した。

いなくなってしまうた里奈の背中を追いかけるようにいずみが首をひねって、

「野々村さんも唐突ね」

「もともとあーゆーキャラよ、野々村は」

淡々とそんなことを語り合う二人の間で、奈津美は嫌な予感を抱え込む。

それは今までにも何度となく感じてきた種類の重たい感情。

あのバカ。

廊下を闊歩する里奈の頭の中はそれだけ。

迷うことなく彼女は特別教室の4階を目指している。それも生物室。あの日以来、近寄りたくもなかった場所だったのに里奈は勢いよく扉を開けて、確認することもないままに声を張り上げた。

「真崎！」

窓際に椅子を二つ並べて窓の枠に腕をのせて外を見ていた英彰の背中がびくりと強張った。

ナニゴトかとおそろおそろ振り返った彼の表情は、里奈の剣幕に一瞬圧倒されたらしい。

素直に驚いていた。眼鏡が半分落ちるほど間の抜けた顔で。

しかし、そんな彼にお構いなく里奈は歩み寄って、怒鳴りつけた。

「関西つてなに？ 志望校！」

英彰の眉がひそめられた。

なんだそんなことかと言いたげに眼鏡を指で押し上げて、再び窓のほうを向いた。

生物室には英彰だけしかいなかった。

数名ががらりと戸を開けては、英彰がぼーっとしているのに驚いて、すすすごと戸を閉めてどこかに行ってしまった。

戸ががらりと開いた瞬間に振り返ったとき、冷ややかにらみつけたからだということの意識は英彰本人にはまったくないけれど。

「情報が早いな。提出したの朝だったのに」

「どうということよ」

怒っていますと顔に書いて、睨んでくる里奈に英彰は冷たく言い捨てる。

「野々村には関係ないだろ、俺の進路なんて」

そう言われて、里奈ははっと我に帰った。

カーツと昇っていた血が、すんと下がっていったみたいに。

勢い込んできただけにその脱力感はずさまじいものがあった。

里奈は近くにあった椅子に腰を降ろして、頭に手を乗せた。

「……ごめん」

「いいけど」

英彰のほうも、なんだか気の抜けたような顔で窓枠に腕をのせて、頭をのせた。

茶色の髪がさらりと揺れて彼の目を半分隠す。

そんな彼に里奈は尋ねた。

「ねえ、お弁当食べていい？」

「……」

英彰は頭を起こして、無言であたりを見回した。

蛙のホルマリン漬けやら、人体模型の標本やらがあったりして、なかなか不気味なこの教室で、それを言うかこの女は。

「いいけど」

「ありがと」

里奈のほうはそんなことに気がつかなかったと言うか、回らなかつたというか、とにかく勢い込んでここに来てしまった気恥ずかしさとかで混乱していたし、お腹がすいていたことに気がついてみたらそっちのほうが一番先になっちゃったというか。

なぜか立ち去り難い、そんなキモチもあって。

机にお弁当箱をのせて包みを開きながら、里奈は英彰に尋ねた。

「真崎、お昼は？」

「パン食ったよ」

「ふーん。いただきます」

英彰はあきれたように里奈をながめて、それからため息をひとつついた。

何か言いたげな口許は、つぐんだまま。

里奈は里奈で、もくもくとお弁当を食べる。

奇妙な沈黙が漂う。

やがて、英彰が視線を窓の外に向けた。

彼が前髪をいたずらする風にイラついたように額を押さえたりしている間に、里奈は食べ終えてちゃっちゃとお弁当箱を片付けて、澄ました顔で水筒に入っていたお茶を飲む。

「なにそれ」

「冷水緑茶。真崎も飲む？」

「いい」

頭をふる英彰の横顔を里奈は無意識に見つめてしまい、我に帰ってあわてて視線をそらした。

動悸がわずかに早くなったことをもてあましながら、冴えない顔をしているなあと思ったり。

訊きたい事や言いたいことがたくさんあるのに、今はそれを口にするのはためらわれた。

不思議と英彰も口を閉じていて、無難なことしか言わないし。

この空気を壊したくないからかもしれない。

お茶を飲み終えて、里奈は水筒もお弁当バッグの中に収めた。

ちやうど昼休みの終わりのベルが鳴り、二人は目と目を合わせ、そして、

「5時限目、はじまるね」

「うん」

「行かないの？」

「気分じゃない」

そう、と里奈はうなずいた。  
気分じゃないという、英彰のその感覚が理解できる自分が不思議だった。

普段の里奈なら授業をサボるなんてもつてのほかなんだけど、里奈は座ったまま英彰の背中を見ている。

「行かないの」

言われて里奈は虚ろにうなずいた。

「気分じゃないから」

英彰も先刻の里奈のようにうなずいて、目を伏せた。

「そこで寝るの大変じゃない？」

目を閉じたまま英彰が眉をひそめて、半分恨めしそうに振り返ってきたので、里奈はきよとんとする。

「寝てないよ」

「ごめん」

そうやって頭を伏せる彼の眼鏡が半分ずれていて、少々お間抜けなのが笑えたけれど、笑うとさらに怒られそうなので黙っておく。

でも、どこかに行けとは言わないんだね。

そう言わない君も不思議。

どこかに行こうとしないわたしも不思議。

そうやってボーっとして過ごすこと30分。

校内にいながら授業をサボったのははじめてなのに、焦ることもなく窓からそよいでくる風を頬に感じてぼんやりしている。

そんなことをしていたら、英彰が、

「5限終わったら、保健室に行けよ」

「どうして」

「サボったのフォローしてくれるから」

「ホントに？」

「うん。無駄に教師に怒られることないよ」

「真崎はどうするの」

英彰は答えない。去年、同じクラスだったときも彼は突然消えて、次の授業にふらりと姿をみせることがあったっけ。

「どうして、サボるの」

「授業中に暴れたくなるから。やるバカがいたら迷惑だろ、かなり」  
「……」

今のは本気なんだろうか。

わからん、コイツ。

廊下にカツンと足音が響いた。

英彰の背中がぴくりとして彼は身体を起こした。

サンダル音だ、と里奈も表情を硬くする。

二人で教室の戸を見つめて、そして、英彰が立ち上がる。

「話し声聞かれたかもしれない。こっち」

落とした声で眼鏡を上げながら、英彰は里奈を手招く。

里奈は慌てて彼についていった。

授業をサボっていることが現行犯であればたら、さすがにまずい。

もともとの生真面目さ、優等生気質がむくむくとわきあがってきて、里奈は不安でいっぱいになる。

黒板の横にあるドアを開く。

生物準備室と書かれた小さな物置と化している部屋に足を踏み入れて、里奈はうつ、と口元を押さえて英彰をにらんだ。

入るとすぐに、雉らしき派手な鳥の剥製が羽を広げていたのだ。

里奈がびくついていてというのに、英彰はお構いなしで足を踏み入れて、ざっとあたりを見回すと清掃用具入れの扉を開けた。

中に入っているバケツやら、モップやらを音を立てないように慎重に取り出してそれを戸棚の陰に置く。

そして、里奈のシャツの背中中の辺りをつかんで引っ張った。

入れというらしい。用具入れの中と英彰の顔を交互に眺めて、混乱している里奈の背中を英彰はじれたように押し込んだ。

「ぼーっとしてんなよ、俺も入るんだから」

「えっ?! あんたみたいに図体でかいのが入れるワケ?」

「俺だつて見つかりたくないよ。やせるよ、瞬間的でもいいからやせるだろ?」

言い返してやるうと息を吸い込んだとき、ガラツと勢い良く扉が開く音がして、里奈は文字通り飛び上がった。

「誰かいるのか?!」

英彰はさつさと身体を滑らせてきて、とても自然に里奈の肩を抱きこんで、そおつと扉を閉める。

暗くなつた狭い空間のなかで、身をこわばらせる里奈の頭の上から英彰が押し殺した声で言う。

「もっと、こつち」

「え?」

顔を上げて驚いた。英彰が見下ろしていたので、思いのほか顔が近くにあったので。

英彰は背が高いから、身をかかめていないとツライらしい。

慌ててうつつむいたとき、背中に彼の腕があることに気がついた。けれど、それよりも壁の向こうから聞こえてくる男性教師の声や足音への恐怖のほうが強かった。おびえというよりは今の里奈には恐怖に近くて、立っていることも正直辛い。

そこに来て、準備室のドアを開ける音も聞こえてきて、里奈はますます身をこわばらせる。

「気のせいかな、あれ?」

教師の声が近い。その声は教頭先生の声に似ている。

背中にあった腕に力が込められて、引き寄せられた。

驚いて顔を上げると、耳元で英彰がささやくように、

「大丈夫。すぐに出て行くから」

言われて、少しだけ怖さが和らいだ。抱き寄せられたから里奈の額は英彰の胸の辺りにある。

夏服のシャツのポケットはそこにあつて、何かがある硬い感触もある。

るのに、とてもよく心臓の音が聞こえた。

それを聞いて里奈はくすりと口元だけで笑った。自分のそれと同じくらい速かったから。

足音と気配が遠くなつて、英彰の腕から力がわずかに抜けていく。里奈がほつと安堵して頭を上げたとき、背後にぶら下がっていた椅子を引つ掛けてしまったらしい。

「がたん、という音。」

「バカ」

英彰が舌を打つのと、教師の声がしたのは同時だった。

「誰だ?!」

蒼白になつて息をのむ里奈。

英彰は急いで扉を開けて、外に出た。

「真崎?」

何をしているのを目を見開く里奈に英彰は早口で言った。

「一緒にいたと思われると迷惑だから出てくるなよ」

用具入れの扉をさっさと閉めてしまった。

呆然とする里奈の耳に、教師の怒声が聞こえてきた。

「授業中だぞ! なにをしている!」

はらはらとしながらそれを聞いて、いつそのこと飛び出してやろうかと思つたけれど、英彰の最後の言葉がそれを押しとどめた。

激しい自己嫌悪。

「どうしよう」

やがて、静かになつた。

英彰は職員室に連行されたらしい。

そつとドアを開けて、里奈は用具入れから出た。

そして、その場にへたり込む。

顔を両手で覆つて、大きく息を吸つて、震える声を吐き出した。

「……なにやっつてんだろ、あたし……」



英彰に言われたとおり、保健室に行ってみたものの、うまい言葉が出てこなくてうつむいていたら、

「顔色悪いね、野々村」

平井養護教諭が言いながら額に手をあててきた。

熱がないだろうことを察して、彼女は里奈にため息交じりの優しいまなざしを送ってきた。

「麦茶のむ？」

いりません、と首を横に振ると、平井養護教諭は里奈の顔を覗き込んで、

「野々村らしくないね。熱があつたりするわけじゃなさそうだから、寝てなくてもよさそうだけど」

「はい……」

「そこに色紙あるでしょ」

「はい？」

ボールペンでさされたところを振り返って、水色の大きな模造紙を発見した。

そして、平井養護教諭は机の中から太いマジックペンとプリントを取り出して、里奈に差し出した。

「この間の朝食に関してのアンケートの結果、ここにまとめてあるから、拡大して書き写して」

「はあ」

「さっさとやる」

「は、はいっ」

結局、6時間目もサボった。

平井養護教諭が担任に校内内線で野々村里奈は保健室にいますと連絡してくれたので、6時間目の始まりに担任が保健室にやってきて、椅子に座っていた里奈の顔色をみて、

「早退するか？ 野々村」

なんて言ってきたもんだから、里奈はぎょつとして、

「いえ、大丈夫です」

「でも、顔色悪いぞ。ココントコ暑いからなあ、暑気あたりしても仕方ないもんなあ」

「いや、ぜんぜんっ」

仮病なんです、顔色が悪いなんてことありえせんっつてば。

「無理するなよ、大事な時期なんだから。でも、具合が悪いときは誰かに言ってから保健室に行きなさい。突然いなくなったかと思つて驚くから」

「はあ」

「もう少し寝ていれば、大丈夫と思いますよ。きつと寝不足と疲労からくる貧血でしょう」

ありがとう、ほけんのせんせい。

バカ正直に心配してくれる担任にももうしわけなくて、里奈はぺこりと頭を下げた。

と、いうわけで、せつせと里奈はポスター作りに励んでいる。

やるとなったら、一生懸命なのが里奈だ。

気分が滅入っていたこともあり、ことさら真剣にポスターに文字を書いた。

大きな定規を持ち出して、鉛筆で丁寧の下書きをして。

「こういう仕事やらせると、野々村はいいね。絵もなんか描いてよ」

「絵は苦手です」

「そっかー」

「でも、なんか貼ります。拡大コピーして色を塗ります」

「すばらしい」

教室に戻ると里奈はすばやく帰りの支度をした。いろいろと後ろめたくて、学校にいたくなかった。

それでも、英彰のことは気になって、3 - Aの教室をのぞいてみようか悩んでいたとき、姿が見えなかった奈津美が姿を見せた。

里奈を見ると、あっ、と口を開いて、駆け寄ってきた。心配そうに里奈を見上げてくるから、居心地がますます悪くなる。

「貧血だったって聞いたよ。昼休み保健室に行ってたの？」

「え？ う、うん」

顔では笑いながらも内心おろおろとしているから、里奈の返事はどうしてもぎこちなくなってしまう。

ごめんね、仮病なの、仮病なの。

「気分が悪いときとかはわたしに言ってよ。頼りないかもしれないけど、何かしてあげられるかも知れないんだから」

「ごめん」

「野々村ー！」

教室の入り口から低い声が聞こえて、里奈と奈津美が振り返ると、英彰の相棒の石河君が立っていた。

里奈のお弁当バッグを持って。

それを見た瞬間、生物室に忘れてきていたことを思い出して、アレレ？ と記憶をたどる。

とにかく彼に歩み寄ってみると、石河は里奈を廊下に呼びつけた。

ちらりと振り返って奈津美を伺うと、案の定怪訝そうにこちらを見ている。

廊下に出て、石河はお弁当バッグを里奈に渡して、

「真崎から」

「……」

ありがとう、と消えそうな声でつぶやく里奈。

「真崎、どうしてる？」

「ああ、真崎はサボリ現行犯で教頭に捕まったらしいけど、6限には戻ってきたよ」

「停学とかの処分は？」

「たかがサボりだからなあ。タバコやってたとかでもないし」

「タバコ？ あいつ吸うの？」

「家で吸ってんじゃないの？ 説教ですんだらしいよ」

「そっか……」

胸の痛みはまだあるものの、安堵したというのも本音。

停学とか親呼び出しとかになったらどうしようかとはらはらしていたのも事実で。

「ありがとう」

お弁当バッグを抱きしめて、石河が立ち去るの見送った。

一人になったら泣きそうだね、今のあたしは。

切実に聡明に会いたいと思った。

助けてって思った。

「大学のこと、知らなかった」

奈津美がかすれた声で唐突に言うから、英彰は無言のまま彼女を見下ろした。

駅までの道を一緒に並んで歩きながら、まともに彼女の目を見ることができないでいる。

進路希望調査紙を記入しているときも、提出したあとも。

奈津美のことなんて考えなかった。

とてもとても自然に頭に入れていなかった自分を知って、英彰はストリートにうろたえた。

自分のやっていることの、重さとやらがずしんと。

泣かせないと里奈に言った。

でも、泣かせなければいいだけの話ではない、そう、コレは。

このまま行くと、面倒なことになる。

単なる意地で始まったことに、巻き込まれてしまったこの女の子をどうすればいいんだろう。

とつさに感じた罪悪感と恐怖。

罪悪感はまだいい。

恐怖は卑怯者であることの証明なので、英彰は憂鬱になる。

「真崎？」

呼ばれながら、英彰はぼんやりと前を見ていた。

遠い目で返事もせず思い出すのは、午後の生物室。

抱きしめた腕にまだ残っている。

「真崎？」

苛立ちを含んだ声がする。

英彰は奈津美を見下ろした。

どうして君は、野々村里奈に告白の手伝いをさせたの。

ことの始まりはそれだ。

それを思ったとき、奈津美がどうしようもなく疎ましく思えた。

「なに？」

「だから、大学。地元は1校しか受けてないって」

「うん」

「それじゃ、卒業したら離れちゃうよ」

ああ。

英彰は頭を抱えなくなる。

泣かないでくれと頭を下げて拝み倒したい。

ここで泣かれたりしたら、いよいよ救いようがないじゃないか。

「第一志望に俺、落ちるみたいじゃない」

奈津美がはつとする。

地元に残した唯一の1校は、第一志望だ。

先輩には都村聡明さんが院生として住みつかれていらっしやる。

「あ、ごめん」

それから奈津美が口を閉ざして、なんとも重い沈黙だった。

もうすぐ駅になる。

その距離を目で測っていたら、突然、奈津美が言った。

「手、触ってもいい？」

「手？」

意味がわからず英彰は自分の右手と奈津美の顔を交互に見た。奈津美は真っ赤になっていた。

わけがわからず首をかしげたところで、私服姿の彼氏彼女が英彰と奈津美の間を突っ切っていった。

彼らは仲睦まじく手をつないでいる。

それも、自然に、当然のように。

なるほど、ようやく理解ができた。

正しくはつないでいい？ だ。

奥ゆかしいというか、なんというか。

単純なことだけれど、奈津美に対して苛立っていたことがすっと消えた。

今まで手なんてつないだこと、ないよね。

でもねと英彰は思う。

君と手をつないだり、キスをしたり。

僕からすれば、とても簡単にできてしまうといえは、できてしまう。

酷いって君は思うと思うけど、ココロなんていらないこともあるんだよ。

でも、君は。

野々村里奈の友達で、それが大きな壁になって僕を制止する。

手をつなぐことくらい、本当になんでもないことに見えるけど。

真崎英彰にとって、根本奈津美はこの世で一番壁が高い女の子だ。

迂闊に指の一本も触れられない、そんな女の子。

だから。

「手なんか、触ってどうするの」

笑い飛ばすことにする。

英彰が笑うと、奈津美は彼にあわせるように笑った。

「そ、そうだよね」

歩道の石から強烈な太陽の照り返しを受けて、尚更暑い。

制服の袖で頬に流れた汗をぬぐい、眼鏡を押し上げた。

夏休みは予備校の夏期講習に行く予定だから、こんな暑さに我慢することはしない。

そう。夏休みになる。

里奈とも奈津美とも会わなくてすむ。

今よりは楽になれるはず。

度のないレンズ越しに、ゆらりと揺れる空気を見て、英彰は眼を眇めた。

あんなにそばにいて、気持ちが悪くなるなというほうが無理だ。

震えているのがわかった瞬間、愛おしくて抱きしめてしまった。

だから嫌われるんだな、俺は。

衝動を押さえられない自分の幼さとか、気持ちはまだ冷めることのできない惨めさとか、いろいろとあって、混乱していた英彰の思考から抜けていたことがある。

里奈がなぜ、生物室に現れたのか。

> 5 <

夏休みに入って、最初の家庭教師のお時間はコレだった。

「夏が来れば思い出すー、地獄の模試、中井塾」  
お気楽大学院生がそんなことを歌いだすから、里奈は脱力して机に

突っ伏した。

「やめてよ、頭が腐る〜」

「2番もあるんだぞ」

「いいよ、歌わなくて」

里奈は恨めしげに聡明を睨んだ。

テキは学習机に座る里奈の背後にいて、まるで覆いかぶさるように手を机についている。

聡明からすれば、単に里奈の開いている参考書をのぞいているだけなんだけど、毎度ながらこの体勢は心臓に悪い。

「浜崎先生のほうがいいな、もー」

苦し紛れに出た言葉。

すると聡明はぱこんと里奈の頭を叩いて、

「あいつは今それどこじゃねえよ」

「浜崎先生、忙しいの？」

「ああ。なつがくーれば思い出すうー、癒しの模試、正文社〜。正文社つけとけよー」

「研究とか？」

「ああ、いろいろあつてな、総合模試が君を呼んでる 私大模試は現場で受けて〜」

「聡明、それ誰が作ったのよ」

「受験生の前で歌っちゃいけねえ歌つつのもあるんだぞ」

「聴きたくないけど、なに」

「中森明菜のデザイナーって歌があるんだけどな、それがまた……」

「知らない。なにそれ」

「きいたことねえのかよ。まっさかさーまーにー 落ちて受験生

炎のよーおーに燃えて受験生」

なんとも調子の外れた聡明の歌。

なんとも言えない気分で里奈は頭を抱え込んだ。

聡明が変だ。

見た目はいつもと変わらないのに、変。



里奈は聡明を見上げて、まじまじと観察してみた。

聡明は顔を半分参考書で隠しながら、渋い表情で首をひねっている。自分でもおかしいと気がついたのかなあ……。

「聡明、カゼでもひいたの？」

「イヤ、寝不足で頭が無駄にハイなんだ。ワリイ、べんきよーすつか」

「うん……」

寝不足くらいでこんなになるの、聡明は？

「どれくらい寝てないの」

「3日くらいか」

「へッ？」

「1日1時間くらいは寝てるから、気にすんな」

「なんで」

聡明はゆるく笑った。笑って、里奈の頭をぽんとやさしく叩いた。

「勝負してんの。俺も結構がんばってるから、お前も頑張んな」

わけがわからず里奈は聡明を見つめた。

「勝負って、誰と？」

聡明の目から笑いが消えた。

いつもニコニコして冗談を飛ばしている聡明がそんな顔を見ると、焦るというか、どきりとする。

思わず息を詰めた里奈に、聡明は低い声で言った。

「 浜崎佳乃」

その真剣勝負の内容とやらは聡明は明かしてくれなかったけれど、聡明はかなり本気らしい。

おせっかいは里奈の性分で、気になるときはどうしようもなく気になる。

まして、聡明のこと、佳乃が関わるときたらとても気になる。

聡明には絶対に訊くことができない、そのことの成り行き、でも気

になるったら気になるったら。

そこで佳乃にどういうことになっているのか訊いてみたくなり、以前渡された手作りの名刺を机の上のせて思い悩むこと1時間。

浜崎 佳乃

K大学理工学部建築環境研究室

時計を見ると、もう11時を回ろうとしていた。

幸い明日は土曜日、ガッコの夏期講習も休みだ。

「明日にしよう」

にしても3日ほとんど寝ていないって、どういう勝負なんだろう？

翌日の午前中、里奈は携帯電話に登録した浜崎佳乃の名前を見ては何度もため息をついていた。

悩んでいても仕方ないよね、と思い切って電話をかけてみたけれど、なかなか佳乃が出てくれない。

呼び出しが10回を数えたあたりで、ようやく、

「もしーもし？」

と、いつもの佳乃らしからぬ、どんよりとした声が。

里奈は目を丸くして、耳を疑いながら、

「浜崎先生ですか？」

「ん？ わたしを先生と呼んでくれるのは……野々村里奈ちゃんですか？」

「そ、そうです」

「ドーシマシター？ なにかアリマシタカー？」

「……」

携帯電話を耳に当てながら、里奈は半分泣き顔になっている。

変だよー、浜崎先生、変だよー。

声がまっすぐだよ、抑揚つてもんがないよー？

夕べの聡明なんか比ではないほど、彼女の様子は変。

「あ、あの」

「なあに？」

「い、生きてますか？」

確かに佳乃に訊きたい事を的確に表現した言葉だけれど、言っちゃまってからしまったと思つて、里奈は青ざめた。

佳乃からの返答はしばらくなくて、

「……生きてるといえば生きてるな。里奈ちゃん、いまなんじ？」

「10時過ぎたところです」

「何日？」

「はっ?! いや、あの7月23日ですけど」

「23日……あ、まだ23日なんだ。良かった」

聡明が昨日の時点で3日まともに寝ていなかったとして。現時点では4日目を迎えているはず。

4日もまともに寝ずに人間、生きているものなのだろうか。

「お邪魔していいですか、先生のおうち」

「んー、今、凄く有様なの。びっくりしちゃうと思うから、今度で

いいかなー。ごめんねー」

「気にしませんから、先生の邪魔もしませんから、今から行つてもいいですか」

「……どして？」

なんでつて、アナタがとつても変だからです。

「いいけど……うちわかるの？」

「ごめんなさい、わかりません。おしえてもらえますか。住所と最寄の駅と」

「ドラえもんの歌にのせてラップで決めていい？」

思わず目頭を押さえてしまった。涙が出そうだ。

言っていることが夕べの聡明よりへんてこりんになっちゃってます。お願いですから歌わないでください、決めないでくださいと哀願して佳乃に場所を聞きながら、メモをちまちまとしっかりとつて、電

源を切り、速攻で身支度を始めた。

おせっかいもあるんだけど、怖いもん見たさもあることは事実。

にしてもラップで決めるって。

しかもドラえもん……。

ピーカンの昼前はまさに地獄の暑さ。

里奈は帽子を深くかぶって、駅からの道のりをてくてく走った。

「日焼け止め意味ない感じ」

ぶつぶつ言いながら、自分で書いたメモと電信柱に書かれている住所を比べて、佳乃のアパートを発見する。

佳乃の部屋は2階の角部屋。

たったったつ、と一直線に伸びている階段を登って、さっそくピンポンした。

白いドアに、何もかかれていない表札。

それを見て女の人の一人暮らしはなにかと物騒なんだろうなあと思ったりもした。

出てきてくれる気配がないので、もう一度ピンポンする。

ようやく鍵を開ける音がして、バスタオルを頭にかぶった佳乃が顔をのぞかせた。

「いらっしゃーい」

「……ご、こんにちは」

シャンプーのいい匂いした。

「ごめんね、お風呂に入ってたの。どうぞ。散らかってるんだ、本当に。ごめんね」

佳乃は言いながら、ドアを大きく開けて里奈を招き入れた。

「忙しいときに押しかけて、ごめんなさい」

散らかっているといいながら、佳乃の部屋はこぎれいで、強いて言えばアジアンテイストなゴミかごが紙くずであふれんばかりになっ

ているくらい。

おずおずと靴を脱ぎかけた里奈は、次の瞬間悲鳴をあげながら佳乃の肩をつかんでいた。

「きゃあああーっ、浜崎センサーッ!!」

佳乃が玄関で突然ふらりとよろけて、壁にごちんと頭を打ち付けたからだ。

かなりの音がしていたから、相当痛いはず。

右手で頭を押さえて、左手で里奈にしがみついた佳乃がてへへと照れたように笑いながら朦朧とつぶやくことには。

「おなか空いてるから、ちよつとよろけちゃった……」

佳乃のぬれた髪を頬のあたりに感じながら、里奈はこれではいかんと拳を固める。

「ご飯、いつからたべてないんですか」

「……いつだろう?」

「だめじゃないですかー、もー、なんか食べてください」

「あ、いいの、いいの。冷蔵庫も空っぽだし。それにおなか空いてると眠くないから。おなかいっぱいになると寝ちゃうんだ」

あつはつは、と佳乃が空元気に笑う。

里奈はそれを睨みつけることで黙らせて、きつぱりと言いつつ放った。

「そんな過激なダイエットはしちゃいけませんっ!」

「あ、里奈ちゃん、まって……」

か細く呼び止められたけど、知るもんか。

「コンビニに行つてきます!」

このおばかなおねえさんに何か食べさせないと、死んじゃうじゃないのっ。

佳乃のアパートの階段を駆け下りながら、里奈は携帯をバッグから出して、都村聡明に電話をかけた。

浜崎先生の一大事だ、聡明に助けてもらわなくっちゃ。

携帯に出た聡明は、

「おお、どした」

なんていつもの調子。いささかほっとしながら、里奈は早口にまくし立てた。

「浜崎先生が大変なの、かなり衰弱して、立ってるのもやっとみたいな感じなの！」

駅の途中で見かけたコンビニを目で探しながら、里奈は聡明の言葉を待った。

しかし、聡明は、

「……衰弱って、意識は？」

「ハア？」

「意識はあのかって訊いてんだよ。立ってるのもやっとってことはあいつ立ってるんだろ？」

「立ってるけど、ふらふらだったよ！」

「生きてんなら大丈夫だろ。くだらねえことで電話してくんな信じられない言葉を聞いたような。」

里奈は足を止めて、

「ちよつと、くだらねえつてなによ」

「佳乃だつて子供じゃねえんだよ。あいつがぶっ倒れようと何しようと、あいつが自己責任でやってることの結果なんだよ」

一気にこみ上げた怒りで里奈は息を飲んだ。

聡明が。あの、聡明がこんなことを言うなんて。

シヨックのあまり口を数回ばくばくしてしまったが、やっとの思いで声を絞り出した。

「聡明、見損なつた」

「見損なつてくれて結構。あいつには構うな」

「いーよ、聡明になんて頼まないから！ この冷血漢のスケベおやじー！ 夏の思い出でも100万回歌つてればいーのよ、目が細い癖にいつつもえぱっちゃってさっ、最低最低、最低おやじっ」

叫んでいる途中で、ますますむかついた。

都村聡明さんは、里奈ちゃんが絶叫している途中で通信を断ってしまわれたんでございます。

「ばかーっ!!」

見損なっただわ。

怒り心頭、暑さもどこへやら。

涙なんか出てきちゃってるのは、汗よ、汗。

ちくしょお、聡明のバカタレ、裏切られた感じ。

目をこすりながら、コンビニのドアをくぐるうとして、里奈は足を止めた。

くるりと首をひねって、ガラス越しに並ぶ雑誌を眺めている青年を凝視する。

そして、里奈はコンビニに駆け込んだ。

「真崎、なんでコンナトコにいるのよ!!」

突然背後から怒鳴られて、真崎英彰は背中全部でぎよっとする。

持っていた雑誌がヤンマガ、しかも開いているページが水着グラビアだったりして、振り返るとともに里奈を見つけて絶句。

「な、なんでって、ここ、俺んちの近所だから」

今までの学校での気まずさもどこへやら、英彰はしどろもどろになつて言い訳をした。

「近所？ 駅が違うじゃない、駅が!」

「マンションの東側にも駅があるんだよ。あそこ俺んち」

ほれ、と窓の外を指さす。確かに見覚えのあるレンガ色の高い建物がみえた。

そっか。路線が違ったから、わからなかった。

「近いとこのコンビニに行けばいいじゃない、こんなに暑いのに」

「このコンビニのどろろそばが食いたかったんだよ」

「どろろなんて、自分ですって食べなさいよ!」

ハア？ と英彰は眉をひそめて、雑誌を閉じた。

そして、ようやく動揺が収まってきたらしく、里奈を指さして、「おまえこそこんなことでなにしてんの」

そう問われて里奈は自分のやるべきことを思い出した。

「あつ、立ち話なんてしてる場合じゃなかったんだ」

くるりと里奈は踵を返して、とつととお弁当コーナーへ。すると、なぜか英彰もついてきた。

里奈の隣に立つて、前言通りにとろろそばなんか手にしちゃって、「なにやってんの」

「ねえ、やつぱり夏ばてにはおそばなんかいい感じ？」

「いい感じだろうけど、2つも食うの？」

「だれがよ。浜崎先生の分」

「お前なら……いて！ 浜崎先生？」

英彰のすねに即座にけりを決めて、里奈は早口に言った。

「浜崎先生は浜崎先生よ」

それからジューズコーナーへと移動。扉を開いて、大きなお茶のペットボトルを手にした里奈に英彰がたずねる。

「浜崎って、都村さんと同じ研究室の？」

都村と聞いて、里奈は目を据えた。

「都村とか言わないでよ」

「……さつきから、なんだよ」

「勝手についてきてるんでしょ、もー、急いでの、浜崎先生が餓死したらあんたのせいだからね！」

「餓死？」

なんで、わたしは真崎英彰の自転車の後ろに乗っているのですしょう？

英彰はすいすいと自転車をこぐからかなりのスピード。



ためらいはたくさんあったけれど、落とされたらたまらんと彼の背中  
中にしがみついた。

そうしたとき、英彰の背中が一瞬びくりとして、そして、なんか言  
われたような。

「つかまるなら、腹にして」

とかなんとか。

「背中弱いんだ」

自転車を降りたときに言うと、英彰はむっとした様子で口をつぐん  
だ。

そして、返事をせずに佳乃のアパートを見上げる。

「ここに住んでたのか。たしかに近いな」

「アリガト」

挨拶もそこそこに里奈は階段を駆け上がって、ピンポンもそこそこ  
に佳乃の部屋のドアを開けた。

そして、佳乃がうつぶせにうずくまるように廊下に倒れているのを  
発見。

血の気が引く思いでドアを閉めて、2階から英彰を呼んだ。

「真崎、悪いけど手を貸して！ 浜崎先生自宅で遭難してる！」

自転車に乗っていた英彰は、素直に降りて鍵をかけると、ジーンズ  
のポケットに手を入れながら、とっとととつ、と階段を登ってきた。  
おろおろしている里奈の隣からひょいっ和中を覗き込んで、瞬きを  
ひとつ。

「……まじで、自宅で行き倒れてる」

「でしょー?!」

失礼します、と英彰は中に入って膝を折ると、伺うように佳乃の肩  
に手をかけた。

そして、バスタオルに包まってすやすやと眠っている佳乃の顔を見  
て、くっ、と笑いを噛み締める。

背後でおろおろしている里奈を振り返り、

「寝てるよ」

「ねてる？」

寝かせておいてやれば、と英彰は言うけれど、こんな廊下で寝ていたら夏とはいえいいことはありません。

「運ばなきや」

お弁当やらを廊下において、里奈はよっこらせと佳乃の腕をつかんだ。

佳乃が小さくうなったとき、英彰が手をさし伸べてくれた。

「運ぶなら俺やるけど……1時間くらいそっとしておいてやればいいのに」

「でもさー」

里奈がおずおずと手を引くと、英彰はよっこらせと佳乃の背中に腕を回して彼女の半身を抱き起こす。

「こんなところで寝ないでくださいー、ちゃんとしたトコで寝まじょうねー」

ごめんなさい、と思いながら里奈が佳乃の部屋に足を踏み入れて、ベッドの上にあるタオルケットを広げた。

しかし、廊下では。

「どっかでみたよーなハンサムくんだけど、思い出せないな」  
肩を抱きかかえられながら、頭を抱える佳乃さん。

足はしっかり廊下についているけれど、どうにもふらついて英彰に寄りかかってしまふらしい。ふらつくというよりは寝ぼけているというべきか。半分目が閉じているし。

「真崎です。説明は後でしますから」

「あ、おろして、おろして」

佳乃は言うけれど、足は地に付いている。

「大丈夫ですか？」

「うん、かっこいい男の子が至近距離にいと、おばさんは抱きつきそうだからさー」

「抱きついてもいいですけど」

「で、きみ誰？」

「真崎です」

佳乃は部屋の真ん中にあるテーブルの前にぺたんと座って、ぼつと天井を見ている。

「だめだ、頭が働かない、まとまらない。あたしってやっぱりバカなんだ」

ぼつりとつぶやいて、里奈を怯えさせる。

あつちの世界に行っちゃってる感じがするのは気のせいでしょうか？

「聡明に電話したら、ほっとけて言われちゃったんです。二人でなんでそんなにがんばってるんですか」

佳乃の前にお茶とおそばを出しながら、里奈がしかりつけるように言うと、

「ほっとけか。そう言うでしょうね」

あつさりとつぶやき、佳乃は額を押さえてテーブルに肘をつく。

かと、思うと。突然拳を固めて、

「あいつに負けられるか。あたしがこうして脳内凍結させている間にもあいつは余裕で論文書いてるんだ、いやだ、もー！」

里奈と英彰は無言で視線を交わした。

「……」

「……聡明も余裕じゃなさそうですよ。寝てないとか言っていましたから」

佳乃がほえ？ とその言葉に反応する。

「あの様子だと聡明も絶対におかしなことになってます。この間は変な歌連発であたしの頭も腐りそうでしたから。あんな奴に負けないでください。食べて休めば浜崎先生は無敵です。聡明なんかに負けるもんですかっ。あいつなんか夏の思い出ですよ」

「……寝てたら間に合わない」

「廊下で寝てた人がなにを言っているんですかつ」と、やっていたらピンポンとなった。

佳乃が顔を上げて玄関に出て行こうとするのを里奈が制して、代わりに出ようとすると英彰が腰を上げていた。

「俺が出てやばい人いないでしょ？」

「顔のわりに結構失礼だな、君」

英彰がドアを開くと、女の人の焦った声が聞こえた。

「あっ、あのっ、ごめんなさい、まちがえました！」

ナニゴト？ と、廊下に顔を出して玄関を覗き込むと、外に回って表札がないことを発見して口を押さえて立ち尽くす女の人が、英彰の前でひとりで慌てていた。

対する英彰は冷静そのもの。

「ここは浜崎さんの部屋ですよ」

「えっ?! そ、そうですか」

きれいな人だけど、なんか。

里奈が首をひねるとなりに佳乃が這ってきて、

「あ、也美さんだ」

「あ、よしのちゃん！」

挙動不審だった女の人は都村也美さんというらしい。

長い髪を夏らしくひとつに束ねて、ふんわりと微笑む。

きれいな人だなあと感嘆した後、都村という苗字にはっとした。

「そ、聡明の？」

「うん、おねえさん」

佳乃がぼんやりと答える。

英彰はなぜか驚かないけれど、里奈は目を丸くして呆然に、似てない。

也美さんにはっこり笑って、頭をさげる。

「いつも弟がお世話になってます」

「聡ちゃんの生徒さん？」

佳乃から里奈をそう紹介されて、也美はうれしそうに口許をほころばせた。

「そうですか。聡ちゃん乱暴なところあるから大変でしょう？  
これからも弟をよろしくお願いします」

「いえっ、こちらこそ」

也美はテーブルの上にあるおそばを見つめて、佳乃を見た。

「佳乃ちゃん、食べないと。やつれてるよ」

「……はあ」

「大丈夫。聡ちゃんも唸ってたから。夕べはパソコンを怒鳴りつけて、なだめてを繰り返していたし。隣の部屋で寝ていながら怖かったわ」

だ、大丈夫なのかな、聡明も。

里奈が眉をひそめると同時に也美も表情を曇らせて、

「佳乃ちゃんも寝てないの？」

佳乃は答えない。

也美はため息をついた。

そして、佳乃の肩に手をおいて、やさしく説くように言った。

「聡ちゃんも今寝てるから、佳乃ちゃんも寝たほうがいいよ」

「でも」

すると、也美さんは平和そうな顔を不敵に微笑ませて、

「聡ちゃんの目覚まし止めてきたから。朝まで起きないはず」

佳乃があんぐりと口をあけて也美さんを凝視する。

里奈と英彰には佳乃のその反応の意味がいまいちわからないけれど、とにかく佳乃さんには衝撃的な発言だったらしい。

「日ごろ佳乃ちゃんに散々迷惑かけておいて、自己責任だとかなんだとかえらっそうに言っちゃう聡ちゃんはよくない。電話を聞いていたら腹が立って、仮眠している聡ちゃんを目覚ましを止めてきてしまいました」

「イヤ、これは」

「そのほかにも聡ちゃんは日々反省するべきところがいっぱいあるのよ。それに聡ちゃんにこーゆーことできるのわたしくらいだし」

「聡明、起きたら荒れてますよ、絶対」

「大丈夫」

也美さんはとてもきれいに微笑んだ。

「ご飯を作る人がいちばん偉いの。わたし世帯主だし」

だから寝なさいねと也美が言うと、佳乃は脱力しきった感じで肩を落とした。

そして、おそばに手を合わせていただきますとつぶやき、里奈に頭を深々と下げた。

「りなちゃんありがとう」

佳乃はおそばを食べ終わると、お茶を飲んでもくもくと歯を磨いた。

寝るなら寝るできっちりしている人だ。

なので、里奈は帰ることに。

也美さんという聡明のお姉さんもなにやら出かける支度をしているし。

「お邪魔しました」

「あ、里奈ちゃんお昼代」

佳乃はお財布を取り出して、千円札を一枚。

「これでたりる？」

「おつり出しますね」

「あ、おつりはいいです。頭が働いていなくてどうしようもないから」

「そういう問題では」

「もらっとけば」

英彰が横から口を挟んで、里奈のお財布を引っ込める。

お財布だけをつかんだ也美さんが明るく声をかけてくる。

「佳乃ちゃん、晩御飯つくってあげるね。何がいい？」

「……ごめんなさい、なにも思い浮かびません。おそばで胸がいっぱいです」

佳乃は也美には甘えるようで、部屋の鍵を渡してあくびを噛み締めた。

「お言葉に甘えて寝ます。3時間後か6時間後かに起こしてください」

「6時間後にまず声をかけるね」

「ありがとうございます」

「起きたらご飯だよ。ゆつくり休んでね」

なんかふわふわした人だと里奈は也美を見て思った。

この人に何か頼まれたらたぶんイヤだと言えない。

お買い物にでも行くつもりだっただろう也美は、玄関のドアを閉めて鍵をさし込みながらあつ、とつぶやいた。

里奈と英彰が彼女の背中を見詰めながら、そのあつ、は何？ とやっていると、也美はこまったわーと手のひらで頬を押さえた。

「このあたり、スーパーとかあるのかな」

「ありますよ」

地元民の英彰が答える。

「近いですか？」

「近いといえば近いですけど」

「よかったです。行ってきます。今日は本当にありがとうございます。気をつけて帰ってくださいね」

也美はほっとしたように微笑んで、階段をとんとんとゆつくり下りていく。

なんとなく里奈は不安だ。

思わずつぶやいていた。

「道、わかつてると思っ？」

「迷子になるな、絶対」

英彰の言葉どおり、也美さんはアパートの駐車場を出たところで、

さつそく足をとめて困惑している。  
右か左か、まずそこで迷っている。

「……一緒にいてあげたら？ 真崎」

「野々村も来いよ」

「うん」

也美さんは恥ずかしそうに頬を染めながら、里奈と英彰に頭を下げた。

英彰は自転車を押しながら、口許だけで笑っている。

駅とは反対方向にあるスーパーに行くには英彰の住むマンションの前を通らなければならない。

英彰は自転車をマンションの自転車置き場に置いてきた。

「家においてこなくていいの？」

「帰って来たらでいいよ」

英彰は普段、自転車ごとエレベーターに乗って、自宅の玄関先に自転車をおいている。

住宅街を歩きながら、也美と英彰が世間話をさらりとしているのを聞きながら、里奈は二人の後をついて歩いた。

まだ人見知りをしてしまうけど、このひと好きだなあ。

也美のことをちらちらと見ながらそんなことを考えたりして。

聡明の姉という存在だけでも、かなりの意識をってしまうけれど。

まだ強い午後の日差しに目を細めていたら、也美と目が合った。

也美は里奈ににこりと笑いかけ、

「佳乃ちゃんのこと、心配して駆けつけてくれたの？」

「えっ、いや、あの……そうです」

本当のことなのだから認めるしかない。

でも、純粹な親切心から始まったことではなくて、聡明と佳乃の間  
に何があったのが気になっての行動だったから、そのあたりが後



ろめたくて。

聡明といえば、昼間の彼の言葉には絶望した。あんなことを聡明が言うとは思わなかった。

でも、確かに余計なおせっかいだっただよね。

結果的には浜崎先生の論文の邪魔をってしまったわけだし。

「でも、そうめ……じゃなくって、都村先生にはしかられました」あのときの聡明の声の調子とかがリアルによみがえってきて、しゅんとしていたら也美が怪訝そうな顔になった。

「……あの、ね」

遠慮がちに也美が口を開く。

「聡ちゃんが佳乃ちゃんの様子を見てきてって、わたしに頼んだの。あなたが電話をくれなかったら佳乃ちゃんあのまま倒れちゃったかもしれないし。でも、聡ちゃんが言うには勝負してるとかそんなことらしいから、聡ちゃんは敵に塩をいくらでも送れる人だけど、送られた方は嫌でしょ？ だから、わたしに様子を見て来いって言ったんだと思うの。だから、怒ったりはしていないと思うよ」

え？ とばかりに也美を見つめると、也美はふわりと微笑んで、

「聡ちゃんも今、余裕がないのね、相手が佳乃ちゃんだから、きつと聡ちゃんも本気でかからないと負けちゃうかもしれないんだよね。佳乃ちゃんもあんなにがんばるのは聡ちゃんが相手だからなんだろうし」

聡明が怒っていないのなら、聡明の本意が也美の言うとおりならば、やっぱり聡明はいいなあと思う。でも、なんか寂しい。

今までのいろいろで充分にわかっていたこと。

聡明は佳乃には本気になってくれるけど、里奈には絶対にそんなこととはないってこと。

佳乃は対等、里奈は被保護者。

也美がふと遠い目をした。

「佳乃ちゃんがどんなに大切な人か、聡ちゃんにもわかればいいのね。聡ちゃん、佳乃ちゃんには自分勝手するから」

そうだったから、也美はあつと口を押さえて恥ずかしそうに苦笑い。  
「こんなこと、生徒さんに言っちゃってごめんなさい。また、聡ちやんにしかられそう」

首を横に振って里奈は笑った。

「……いえ」

「目覚まし止めてきたって本当ですか？」

英彰が突然そんなことを言い出した。

也美は頷いた。

「はい」

「……そうですか」

聡明が怒る。それはそれは怖そうだと里奈は思う。けれど、也美さんはなんでもなさそうにさらりと。

「姉ですから、弟が拗ねるのなんて平気です」

スーパーまでたどり着くと、也美は二人に丁寧にお礼をして、帰りは大丈夫ですと笑顔で手を振った。

いささかの不安があったが、相手は一応里奈たちよりも一世代近く上の大人だ。

「……大丈夫かな」

「迷子になりそうだけど、本人いって言うんだから英彰が穏やかな顔で言う。」

「ねえ、真崎はびっくりしなかったの？」

「なにが」

「聡明のお姉さん、あんなだと想像つかなかったから、驚いちゃった」

「そうなんだ」

「うん。キレイなひとでびっくりした」

「確かに似てないよな」

「うん……なんというか、テンポも似てない」

英彰がくすりと笑う。

そして、腕にしているがっちりとした時計を見た。

「ダイバーじゃないのに、ダイバースウォッチ持ってるのヤダ」

どうにも気分が冴えないので、憎まれ口を叩いてしまう。

すると、英彰もむっとしたようで、

「パイロットウォッチもってるやつのはほとんどがパイロットじゃないよ」

ふん。

高校生の癖に、高そうなのつけちゃってさ。

里奈がそっぽを向くと、英彰はしらっとした目つきで里奈を眺めた。そして、

「俺といえるのそんなに嫌なんだ」

「頼んでないもん」

「悪かったな、おせつかいで。ペットボトル2本と弁当抱えて暑い中歩くのは大変だろうなと思った俺が悪かったと」

「……」

ああむしゃくしゃする。

里奈は唇を尖らせて、ひたすら前を見て歩く。

時間はもう、4時を過ぎようとしていて、気がつくとなれだけ青かった空にどんよりとした灰色が広がるようになっていた。

「散々、無視してたくせに、突然そんなことしないでいいのに」

「それはお前だろ。生物室に押しかけたきたの誰だよ」

「そ、それは。あの時はごめん」

英彰が里奈のせいで職員室に連行された一件を思い出した。

あれを思い出すと、どうにも立場が弱くなる。

謝られて英彰は拍子抜けしたように、口を閉じて、ふう、とため息をひとつ。

「野々村はわかんないよ」

視線を落として、英彰は言う。

気まずい空気になってきた。

いろいろなことを思い出してきたので。

生物室準備室のロッカーに隠れていたとき、コイツに抱きしめられたような記憶があるので。

そりゃあもう、心臓が飛び出すかと思うほど驚いたけれど、安心してたりもした自分。

とてもとても速かった心臓の音。

頬に触れた英彰の前髪を感じとか、背中にあつた腕の感じとか。

ああ、いやだ、なに考えてんだろあたし。

「真っ赤になってる」

英彰に言われて、里奈はますます頬が紅潮。

まさかあんなのことを思い出してましたとは言えずに里奈はそっぽを向いた。

「あ、雨が降りそうだよ」

「夕立になるな」

なんとなく二人は空を見上げた。

そして、思い出したように顔を見合わせた。

「聡明のお姉さん」

「都村さんの……」

也美さんがスーパーを出て来る頃にはきつと、土砂降りだ。

「ずぶぬれになっちゃいそう」

「子供じゃないんだから、自分でなんとかするだろ」

「それじゃ、かわいそうだよ」

英彰は肩をすくめた。

「お前もこのままここでボーっとしてたら濡れるよ、おせっかい」

「なによ、おせっかいって」

「野々村はおせっかいなんだよ。万事が万事そうなんだよ」

「なにそれ」

「余計な期待したりする人間もいるんだよ。期待させといて、違いましたって平気でやるんだよ、お前は」

「そんなことないよ、そんなことしてないよ」

「少なくとも、俺にはしてるんだよ。俺にかまうなよ、俺の前に現れるなよ」

俺にはしてる。

その言葉は里奈をひるませる威力をたっぷり持っていた。

でも、俺の前に現れるな、には反論しておかなければ。

「同じ学校なんだから仕方ないでしょ。わたしだって真崎に会わないようにしてるよ。そっちこそ、この間わたしが勉強してるの知ってて奈津美と図書室に来たじゃない」

「俺は知らなかったんだよ」

「でも、わたしがいるのわかった時点で、消えればいいじゃない」

「あー、邪魔したんだ、悪かったよ」

「はい?!」

「新聞部のバカと仲良くしてるとこ邪魔して悪かったよ」

「ちがうってば。小関くんはそんなんじゃないよ」

「そんなんってなんだよ」

「そんなんって、そんなんよ」

「意味わかんないよ」

「あんたのほうがよくぼどわかんないよ。なによ、突然小関君のことなんか言い出してさ。小関君がなによ。あの人をなめたような態度には腹立つことも多いけど、いいところもあるよ、あの子。真崎なんかよりずっと大人びてるよ」

「あいつと比べるなよ」

「真崎は子供なの、子供すぎるの、子供っぽいのよ」

英彰が舌を打つ。

睨みあって、英彰の言葉を待っていると、彼は不満という不満を顔に浮かべて口を開いた。

「お前に言われたくないよ」

「わたしだってあんたにおせっかいだなんて言われたくないっ」

「お前はおせっかいなんだって」

「そーういうところが真崎は子供なんだってば」

そんなことをやっていたらとうとうぱつりと大粒の雨が。

それはかなりのスピードで水玉模様を歩道につけて、やがて本格的に振り出した。

英彰がもう一度舌を打った。

「お前といると、こーゆーのばっかだよ」

「それはお互い様!!!」

雨宿りできそうな場所は、20メートル先にある真崎家の属しているマンション。

「ほら、走れよ」

えらそうに英彰に言われて背中を叩かれて、里奈は彼を睨みつけた後、とことこと走り出した。

コイツのマンションで雨宿りなんて、今の状況じゃ屈辱だ。

エントランスに駆け込んでほっと一息つき、ハンカチであちこちの水滴を払う。

しかし、英彰はそんな里奈をおいて、さっさとエレベーターに乗ってしまった。

たしかにここまでつれてきてくれただけで充分だけど、なによあの態度。

ますます脳内沸騰させられて懨然としながら、強くなるだけの雨足を眺めていた里奈の背後で、チンというかわいらしい音がした。

振り返ると、エレベーターの扉が開いて英彰が傘を3つ持って出てきた。

そのひとつを突きつけられて、きょとんとして彼を見上げると焦れた様子で英彰は里奈に言った。

「貸してやるから、これで帰れば」

「あ、ありがとう」

受け取る里奈の手はなんだか震えがきていて、動きがぎこちない。

「どこいくの?」

この土砂降りの中、傘を広げた英彰に里奈が問うと、英彰が振り返った。

「都村さんのお姉さん」

「あつ」

「お前は来るなよ。さっさと帰れよ」

拗ねたみたいなぶつきらぼうな言い方。

生物準備室のあのときと同じ。

走り出してしまった英彰の姿を見ながら、里奈は持っていた傘を握り締めた。

「どうもありがとうございます、真崎君に渡してください」

聡明がそう言っただけで傘を差し出したので、里奈はうつ、と言葉を詰まらせた。

華奢で上品そうなピンク色のそれは、きっと英彰の母親のものだろう。

すると聡明はうんざりとした顔で腕をくんで、

「またややこしいことになったんかよ」

「あいつとはややこしいことになりようがないほど陰悪です」

きっぱりはつきり言って、ノートを広げる里奈を聡明はあれあれと頭に手をおいて眺める。

「うちのバカ姉が言うにはだな、彼は傘をさしていたにもかかわらず走ってきてくれたためずぶぬれに近い格好で、スーパールでおろしていたトロい俺のねーちゃんにコイツを貸してくれたそうさ。さらに、帰り道をすっかり忘れていたことを見抜いて送ってくれたそうさ」

「……」

「お前が心配していたから傘を届けたとゆっていたそうさ」

「……」

「がきんちよに頼むのも筋違いかもしれねえよな、俺がきつちり返しに行くべきなんだよな。ねえちゃんが自分で返しに行くとか張り切ってたもんで奪ってきたけどな」

「……わ、わかったわよ、渡しておくわよ」

里奈が傘をつかむと、聡明はニコリと笑った。

「わりいな」

論文は終わったのだろうか、聡明はずいぶんとすっきりとした顔をしている。



怪しい歌も歌わないし。

このごろ聡明の指導法が変わってきた。

前の週に宿題を出されて、その答えあわせから始まるのだが量が  
増えた。

宿題を忘れるなどというミスは犯したことがないが、きっちりやっ  
ておかないと、お話にならないこの頃の都村先生の授業。

それでも脱線したくて、聡明にいろいろとからんでみるけれど、以  
前よりもノリが悪くなっている。

「ねえねえ、この爪、いい感じだとおもわなーい？」

シャーベットピンクの上にパールを重ねた、夏休みだからできるネ  
イルの芸当。

でも、聡明は。

「お前の頭のほうがいい感じだ」

なんて言う。

唇を尖らせると、聡明はこのボケと里奈の頭をばかりと叩く。

が、里奈の爪をまじまじと眺めて、感心したように、

「お前の息抜きは、ずいぶんと手間がかかるんだな」

「足も塗ってるの。トゥリングが欲しいんだ、実は」

「なんだそりゃ。つま先にリングなんて邪魔だろ」

「可愛いんだつてばミュールでやると、ホント可愛いの」

しめた、つれてきた、と思った矢先、またも頭を叩かれた。

「……あぶねえ、またやられるところだった」

「つまんなーいっ」

「つまなくなねえよ。べんきょーだ、べんきょー、おら、参考書開  
け」

叩かれた頭をさすりながら、里奈は胸の中でつぶやく。

浜崎先生に勝っちゃったの、聡明は。

佳乃がよれよれになっていた姿を思い出して、目の前にいる態度し

な先生がなんだか憎たらしくなってきた。

傘を返すだけなら簡単。

あのバカの教室に行つて、呼び出して突きつけりゃあそれで終わるわけ。

あのバカを呼ばずとも、誰かに頼めばよい。でも、それができないからこまっているんだ。

今、里奈の手元には傘が二つ。

一瞬奈津美の姿を頭に浮かべて、とんでもないと慌てて打ち消した。奈津美だけはだめだ、なんでこの傘がと疑問をもたれた日には里奈は泣き出してしまふかもしれない。

そうしたいわけではないのに、なにかと奈津美には後ろめたいことばかり。

奈津美に対しての神経が自分でもあきれれるほどぴりぴりしていて、ある意味腫れ物にでも触るような感覚だったりする。

そもその原因である、真崎英彰と遭遇する確率がこんなに高いのは何でだと頭を抱えながら、里奈は傘を抱え込む。

「夏休みだから、あいつはガツコないしなあ」  
でも、あさつては登校日だ。

英彰はサボるかもしれないけれど、そのときに返せばいいかな。  
キレイなピンクの傘。

布に防水加工が施してあるらしく、同色のピンクの糸の刺繍模様がハイソつぽい。

去年のクリスマスに一度だけ会った、真崎のおかあさん。  
かなり若い印象を受けたけれど、彼女ならこの傘が似合いそうだ。

「傘がないと、お母さん困るよね」

そしてもうひとつの傘は、タータンチェックの深い緑。

ため息はつき始めると、果てしないような。

携帯がなった。

着信メロディが奈津美の好きなアイドルグループの曲なので、里奈ははあとため息をついた。

「奈津美電話多いなあ」

夏休みに入ってから、里奈とはたくさん一緒にいられる。

けれど、英彰とはとんと会えなくなって、彼が電話をかけてくれるのが待ち遠しい毎日。

受験勉強をがんばっているであろう英彰の邪魔になるようなことはしたくないので、奈津美は自分自身の進路の行方もあわせて、なにかと情緒不安だ。

それで、ますます頻繁に里奈に電話をかけてしまう。

里奈と英彰の関係が良くわからない。

廊下ですれ違っても、お互い醒めた目で見ているか、視線をそらしあっているか。

とてもとても険悪だと奈津美がはらはらしていると、英彰は里奈にじゃれつく後輩の頭を叩いたりする。

里奈には英彰の事を話せなくなっているし、英彰には里奈の話をしづらいし。

風通しが悪くて、奈津美の不満は募るばかりだ。

「あの、真崎と仲良くなれない？」

無理だよと里奈はいつも言う。

なんで？

だって、あっちが無視してるから。

里奈の口ぶりはいつも歯切れが悪い。

「仲良くしてよ。あ、一度話しあおうよ、ねえ」

「話し合っつて、なにを」

「お互いのここがいやだから、直してとかさ、誤解があるかもしれないから語り合ってみるとか」

「仲良くって意味がわからない。真崎の彼女は奈津美なんだから奈津美と真崎が円満ならそれでいいじゃない」

それを聞いたとき、奈津美は胸の辺りにこみ上げるものを感じてしまっ。

もやもやとそれは広がって、奈津美の口元を引き締めさせた。

「普通に接してって言うてるの。特別仲良くなんならなくていいよ。でも、嫌なの。どっちにも気を使ってはらはらしたりしてるの嫌なの」

二人はなんでもないうって、証明して。

あんなに避けあうなんて逆に変だもの。

喉元まででかかったそれを奈津美は飲み込んで息を詰める。

うっすらと涙が浮かんできて、その次の言葉が話せない。

わたしってとても嫌な子だ。

里奈に八つ当たりしてる。

「……機会があつたら、考えてみる」

沈みがちな里奈の声がますます惨めにさせてくれる。

どうしてそんなにいい子なの、里奈は。

わたしがいないところで二人はどんな会話を交わすのだろう。

登校日といつても、夏期講習で高校に通っている里奈には苦痛でもなんでもない。

髪をみつ編みにしながら鏡を見つめて今日は編みこみにしようと思いい直して髪を解く。

一本にまとめられた髪のほうが暑くなくていい。

「髪、切るのかな」

前髪が伸びてきた。自分で切るのも面倒な気分だし、気分転換した

いし。

午後から身体が空くから、制服のまま髪を切りに行ってしまうおうか。それとも奈津美と買い物にでも行ってみようかな。

身支度を整えて、ダイニングに行くと、朝食の準備がととのっていて、父親がテーブルでコーヒーを飲みながら朝刊を広げている。

「今日は登校日なの？」

母親が里奈の前に皿を置きながら尋ねる。

里奈はうなずいて、

「奈津美と午後出かけるかもしれない。息抜きしたい気分だし」

「息抜きね。受験生も大変ね。でも、今日は都村先生がいらしてくださる日だから、早めに帰ってきなさいね」

「はいはい」

言われなくとも。

このあたくしが聡明との逢瀬に遅刻などしたことありましたか、お母さま。

「コーヒーに牛乳いれる？ 里奈ちゃん」

「え？ あ、うん」

「都村君は今年で家庭教師のバイトをやめるらしいよ」

父親がぼつりとそんなことを言ったので、里奈と母親は顔を見合わせた。

新聞の端からちらりと顔をのぞかせて、父親はさらに言った。

「来年から本格的にどこかの学校の臨時講師になるかして、スケジュールを調整しながら院の研究に専念するらしい。今も本当はそんな感じで忙しいのかもかもしれない」

「里奈ちゃんの面倒は最後まで見てくださるのはうれしいけど、無理をさせているようで心苦しいわね」

母親がため息をつきつきつぶやく。

母親は聡明のファンだ。

「今から違う先生を探すのもなんだしなあ、里奈も都村君がいいんだろう？」

「うん。聡明じゃないと嫌だな」

変えられてたまるものか。聡明がやめるといわない限り、こちらから変更なんて頼むもんか。

「今更違う人なんて、何もしないでいるほうがましだよ」

ああ、朝から気分の悪い話題。

もくもくと食事を済ませて出かけてしまつことにする。

玄関まで見送りに来てくれた母親が、里奈に言った。

「晴れてるのに、傘？」

「うん、借りたものだから返すの」

「そうなの。気をつけてね」

「はいはい」

ドアを開けたら、朝日が思いのほか眩しかった。

洗面所でまたも母親が背後にいる。

居心地が悪くて、英彰はため息ばかりをついている。

昨日、とうとう担任からは親に連絡が入ったらしい。

多かれ少なかれ、夏休みの終わりにある三者面談ではれることになつてはいたのだから、それが少し早まったというだけだ。

ただ、朝なのはウザイ。

今日は登校日だというのに。

「受験する都内の大学が1校だけで、後は地方って英ちゃん本気なの？」

「本気だよ」

「都内にもたくさんあるでしょう」

「都内じゃないと受験したらいけないの」

「そうは言わないけど、でもね」

「決めたんだ。俺は物理をやりたいの。同じ理工学部っていつても大学によって内容が違つし」

「英ちゃん、お母さんにわからないと思ってる？」

「なにが」

「英ちゃんは、お母さんといたくないからそういうことするんですよ」

「……」

「お母さんのこと、嫌いなんですよ。だからそんな回りくどいことをして、ここから出て行きたいんですよ」

大人気ないことを言う大人だ、なんなんだこいつは。

英彰ははつきり言ってすべてにおいて母親似なのだが、自分ではそのあたりを気がついていなくて、腹が立つだけ立ってしまっ

「……言っていいことと悪いことがあるだろ。わかれよ大人なんだから」

ぴくりと母親の表情が引きつる。

しばらく黙っていたが、彼女は腕を組んで英彰の背中に言い捨てた。

「とにかくお母さんは反対。面談で先生にもちゃんと言う。それでも自分のワガママを通すつもりなら、受験費用は自分で何とかしなさい。お母さんは知らない」

受験費用。

カツと頭に血が昇りかけたが、英彰はそこを必死で押さえ込む。

タオルで口元を押さえて返事をしなかった。

金銭関係を突かれると、扶養家族の立場は弱い。

こんなときだ、早くとっとと成人してしまっ

て自分で部屋に戻って、英彰は制服のシャツを手にして制服に着替える。

眼鏡をかけて、部屋をでる。

ダイニングには朝食の準備ができていた。テーブルについた母親が不機嫌そのものの顔で英彰を無視するかのように体をそらして、テレビを見ている。

英彰はその前を素通りした。

いつもなら、朝ごはんはとけたたましく追いかけてくる声がなく、

英彰は靴をはきドアを開く。

英彰が玄関のドアを閉めた音が聞こえた後、母親はポーズを崩して目頭を押さえる。ふうとつかれた重々しいため息とともに、

「どうして眼鏡なんてかけるのかしら」

どうでもいいようなその呟きにも、彼女の想いがある。

彼女は英彰のかけている、本来ならば必要のない眼鏡が嫌いだ。

薄いレンズが存在するだけなのに、英彰の目はそれをかけるとますます隔たりを作るような。

壁なのかしら。

どうして、壁なんて作るのかしら。

全校集会なるもので、校長先生の長いお話を聞いてから、教室に戻ってHR。進路指導用のプリントをもらって、なぜか卒業アルバム作成委員を巨大なあみだくじで選出。

「ええっ」

作成者の涼子と里奈がにんまり笑うと、あたりくじを引いた生徒が頭を抱え込んでその場にうずくまった。

「作成委員は5名。そんだけいれば受験勉強のさしさわりにはならないでしょうよ。Fまでの6クラスで5人ずつだから、30人もいるんだもの」

「まあねー」

涼子がさっさと黒板に書いた巨大なあみだくじを消していく。

そうして午前中のスケジュールが終ったの帰り際、奈津美に呼び止められた。

傘を英彰に返しに3・Aに行くところだったので、里奈は過剰反応して、とびあがる。

「な、ナニ？」



「話があるんだけど、放課後残れる？」

「話？」

うん、と奈津美がうなずく。

また、英彰と仲良くしろと言われるのかな。

里奈はうんざりとしてしまう。

仲良くしろと懇願されても、仲良くできるものならばとっくにして  
いるのだ。

朝、母親とやりあったことで英彰の気分はサイアクだった。

それでも石河やクラスの友人と久しぶりに顔をあわせて、雑談で盛り  
上がっていたら落ち着いてきた。

HRが終わって、すぐに携帯にメールの着信。奈津美からだった。  
うちのクラスまで来て待ってて。

珍しいこともあるものだと思った。

英彰が上履きで殴られるという目に遭って以来、奈津美の上履きは  
盗まれることもなく嫌がらせのようなものはされていないらしい。

それはそれでほっとする。

英彰にとってファンと名乗る女の子は重荷でしかない。

アイドルでもあるまいし、なんでこんな束縛をされなければならな  
いのか。

春先、バスケット部の後輩が英彰にこんなことを真顔で尋ねてきたので  
後頭部を張り倒したことがある。

「真崎さん、トイレに行かないってマジっすか？」

真顔が嫌だった。真顔が。

「行くよ、馬鹿。今度つれてってやるっか？」

「い、いいです」

「遠慮するなよ」

「いえ、マジいいっす」  
あんなアホなことを言われてしまったりするのは、すべてこの顔のせいだ。  
母親の遺伝子のせいだ。

なんであんなのが俺の母親なんだろう。

奈津美は基本的に善良にできている少女だ。

そして、潔癖ともとれるほどに擦れていない部分も持っている。  
朝、突然担任から推薦入試の件でHRの後職員室にきなさいと呼び出された。

推薦入試ともなると、奈津美はクラスでいちばん早く受験に挑まなければならぬ立場にあるわけで、里奈にそのことを相談したかった。

相談したところでナニが解決するというわけではない。

受験はしなければならぬし、それで受ければ万々歳だ。

ただ、現実味を帯びてきた「受験」に奈津美はひるんでしまっているわけで、里奈に話を聞いて欲しかった。

そのあと、英彰を待たせることになることも思い出した。

先に帰ってもらおうとも思ったけれど、夏休みになったからまともに彼と顔をあわせていなかった。

本当に付き合っているのかしらと拗ねたくなるくらいに、英彰は淡々としているので、どうしても今日は一緒に帰りたかった。

外で待たせるのはこの暑さでは彼がかわいそうだ。

短絡的に奈津美は自分の教室で待っていて欲しいと思い、英彰にメールを出した。

あとで英彰のクラスで待ってもらえばよかったとも思ったけれど、何度もメールを出すとしつこいと思われるそうでやめた。

手をつないでみたいと遠まわしに頼んだとき、英彰は笑って聞き流

した。

あのショックで、できてしまった傷がある。

それは顔で笑えば笑うほど、深くなって痛くなる。

3・Dの教室には誰もいなかった。

それをイイコトに英彰は堂々と足を踏み入れて、窓際に立った。

自分の教室と同じつくりのはずなのに、女子の多いこのクラスは小ざれいな印象を受ける。

というか、野郎ばかりの3・Aが小汚いのかもしいないが。

野々村里奈の席がどこなのか、すぐにわかってしまう自分が嫌だ。どうしても向いてしまう視線をそらそうとして、あれと思った。

野々村の机がこんなに乱雑になっているわけがない。

そんなことを真剣に考えてしまった自分に尚更嫌気がさしてきて、英彰は軽く頭を振ると、窓辺に向かって足を進めた。

窓が開けたままになっている。

窓枠に手をつけて、英彰は校庭を見下ろした。

トラックを陸上部の生徒が走っていて、中央ではサッカー部が20人ほどでリフティングを一齐にやっているという不思議な光景。

「あれ、なんで真崎いんの」

去年同じクラスだった男子生徒が入ってきて、振り返った英彰を見て目を丸くする。

「んー、ちよつとな」

言葉を濁す。女の子を待っているとは言い辛かった。

雑談を少ししたあと、帰るといって彼を見送って、英彰は息をつく。居辛い。

自分のクラスに戻ることにして廊下に出た。

Dにいなかったら、Aの教室を奈津美はのぞくだらうと勝手に考え  
て。

「あ、待って」

呼び止められて振り返ると、階段を里奈が駆け上がった。

「真崎、待つて」

里奈から学校で声をかけられたことに驚いて足を止めた英彰は、彼女の手には購買部のパンが5袋抱えられているのを見て、つい笑ってしまった。

「なによ、その笑いは」

「いや、お前はいつも食べるもん持つてるなあと思ってさ」

「奈津美のこと待つてなきゃならないから、お昼でもしようかと思つて買つてきたところだったのよ、悪かったわね」

「根本？」

里奈は頷いて、あつ、と口元を押さえた。

「真崎も待つてるの？」

「うん」

「そつか……それじゃ、わたし帰ろうかな」

里奈の視線が下向きにさまよう。

「真崎がいるんじゃない、わたしなんて待つてる意味ないもんね」

「んなことないだろ」

はあ、とため息をついた後、里奈は気をとりなおしたように顔を上げた。

「この間の傘返すね。聡明からも預かつてるの」

「傘？ 都村さんが？」

「真崎が聡明のお姉さんに貸してくれた傘。本当はもっと早くに預かつただけけど、登校日に返そうと思つて今まで持つてたんだ。ごめんね」

「いや、いいけど」

「待つてて、今、持つてくるから。自分の教室に行つて！」

両手にパンを抱えてた里奈が、背中を向けて小走りしていく。

しばらくそれを眺めて、英彰の足はAの教室に向いた。

里奈はすぐに戻つてきて、パンの代わりに深緑の傘とピンクの傘を持つてきた。

Aの教室の戸口で首をのぞかせた後、英彰しかいないと見ると足を踏み入れる。

「ごめんね、突然」

里奈はそう言っつて、ピンク色の傘を英彰に手渡してくれる。それを受け取っつて、英彰は言っつた。

「野々村の席、変わった？」

里奈は目を見開いて、なんで知っつてるのとつぶやいた。

「夏休みの直前に席替えしたのよ。夏期講習希望者の席を中央に集めたの」

「ふうん」

「奈津美の席は隣」

「訊いてないよ」

「……あのさ」

里奈の表情が曇る。

あまりいいことを聞かされるのではないかと悟っつた英彰は視線を一段落として、里奈を見た。

目はまともに見ることができないから、彼女のうなじのあたりで視線を止めて、細い首してゐるなあと、場違いなことを思っつたりしてゐる。

「奈津美がわたしと真崎が仲悪いの嫌なんだっつて」

またその話かと英彰も肩をすくめてしまふ。

もっつとも里奈からされるのは初めてだけれど。

「奈津美の前だけは普通にしようかなっつて思っつんだ。だから、真崎もそうしてくれるとうれいんだけど」

英彰は目を眇めた。

なに言っつてんだこいつ。

「普段はあたしのこと無視しててもいいから、奈津美の前だけでは挨拶とかさういうのしようよ」

「なんで俺が」

「俺がっつて、なにが？」

いらつく英彰の表情を伺うように里奈が見上げてくる。

こういう表情をされると、英彰は逃げ出したくなる。バカ正直にどきりとする自分がいるからだ。

つまりは動揺しているということ、それを悟られたくなくて、英彰は強い口調になってしまふ。

「なんで俺がそういうことをしなきゃならないの？」

「奈津美の彼氏なんだから、彼女が嫌がっているんだもの、少しはさ」

ぶつぶつ言う里奈を英彰は睨みつけた。

「お前のそういうところ、本当にいらつくよ」

「どうして怒るの？」

里奈のほうもむっときているらしく、語気が強くなっている。先刻までおどおどと英彰を伺っていたはずの視線も強くなる。

「無神経すぎない？俺にどこまで奉仕しろっていうわけ？」

「奉仕？」

「振った相手によくそんなことが言えるよ。悪いけど俺は振られたあとで爽やかに笑ったりできないんだよ」

「振つ……そんなのしてないじゃん」

「振っただろ。それでなくても、俺なんか問題外でさ」

「……」

「そういう相手に、よく言えるよ。普通にしろ？ どうやって」

「だから、それは」

「本当に無神経でおせっかいだよな」

唇をキュッと引き結んで、里奈は英彰を睨む。

英彰は腕を組んだ。斜めから彼女を見る。

可愛さあまって憎さ百倍とはもまさに今の感情そのもの。

どうしてコイツは、こういう奴なんだろう。

「何度も言うけどさ、俺にかまうなよ。どうせなら、大嫌いだからそういうの言えよ。思ってるんだろ？ 言えよ！！」

里奈の唇は引き結ばれたまま。

そらされた視線が動くことなく、彼女は黙っている。

ややあつて、ようやく絞り出た言葉は、小さい音で掠れていた。

「……あんだこそ、あたしのこと嫌いなくせに。そう言えばいいのに」

泣いているのか、怒っているのか。

里奈はうつむいて顔を隠してしまう。

英彰は奥歯を噛んでいた。ギリリと歯軋りの嫌な音がするほどに。喉元に熱いものがこみ上げるのを押しとどめたくて。

うつむいたままの里奈の肩が大きく震えた。

それを見た瞬間、頭の中が真っ白くなった。

好きなんだと思う。

どうにもならないくらい、それこそバカみたいに。

かなりの力で腕を掴んでいた。自分のほうに引き寄せようとしていた。

里奈は反射のようにそれを拒んで腕に力を込めて振り上げようとする。

「やめてよ、バカ!!」

叫んだ里奈の片手は目の辺りをこすっている。

「あんだなんか」

里奈の言葉が突然途切れた。

突然に戸口のあたりを伺い、きよろきよろとしたかと思うと、紅潮していた顔が蒼白になる。

涙がひとつこぼれながら、里奈は不安そうに呟いた。

「誰も、来なかったよね」

英彰は彼女の腕から手をはずした。

戸口へ首をひねって見たけれど、人の気配はない。

里奈は口元に手をあてて、

「足音、したような気がした。誰か見てたような気がした」

言われてもう一度戸口を見て、英彰はそちらに走る。手をついて、廊下を覗き込んでみたけれど、誰もいない。

振り返って里奈に向かって首を振ってやる。

実際のところ、頭に血が昇っていた英彰には、そんな足音なんて耳に入らなかつた。

目の前にいる里奈のことしか頭になかつた。

「気のせいだよ」

里奈は首を横に振る。

「戸が開いてたし、誰か来ればわかるよ」

「……」

里奈が突然走り出して、英彰の傍らを抜けて、廊下へと出た。

そのまま自分の教室へ戻ってしまう。

英彰はため息をついて、戸に額をこつんとやって、またため息をつく。

里奈がDの教室から一歩出て、言った。

「奈津美の鞆がない」

その声は廊下に静かに響いて、英彰のため息を止めた。

「追いかけてよ」

里奈が言う。

「まだ近くににいるかもしれない、あんたの脚なら追いつくから」  
離れたところから、里奈は言う。

英彰の脚は躊躇する。

本当に根本奈津美に先刻の話を聞かれたのだろうか。

英彰には聞こえなかつた足音を追いかける気にはなれないから、英彰の脚は迷う。

たとえなにを奈津美に聞かれても、もういいような気もする。

はじめからひどいことをしていたのだ、今更いい人を演じてもそれこそ偽善だ。

投げやりな気分で英彰は教室を出た。



廊下に並ぶ個人のロッカーから、バッグを出して肩にかける。

「早く!!」

里奈はじれたように叫ぶけれど、英彰の脚はゆっくりと彼女の方に向かう。

すると、里奈はなぜか怯えたような顔をした。

里奈の前に立つと、英彰は神妙な顔で静かに言った。

「ごめんな」

「なにそれ」

「職員室に行ってみるよ。根本がいなかったら、根本に会いに行くよ」

「会いに行くって……」

女の子たちの高い声が廊下から響いてきて、それが合図だったかのように英彰は背中を向ける。

「もう終わりにする。こんなバカバカしい事」

「ばかばかしい？」

耳を疑って、里奈は英彰の背中を凝視する。

奈津美はいつも笑顔でいたのに。

どうしてバカバカしいなんてひどいこと言えるんだろう。

英彰と女の子の3人組がすれ違う。

一人が英彰の姿を首をひねって視線で追いかけるけれど、英彰は涼しい顔で歩いていき、階段を下りて、姿を消してしまった。

「奈津美見なかった？」

里奈が彼女たちに声をかけると、

「奈津美ちゃん、さっき、玄関にいたよ。急いでたみたい」

「走ってたよね」

「うん」

「野々村、奈津美ちゃんのこと待ってたの？」

「うん。すれ違っちゃったみたい」

取り繕うように明るく言いながら、里奈は笑って見せた。  
ああ、やっぱりだ。

あのとき感じた視線みたいなものは奈津美だったんだ。  
英彰に掴まれた腕が痛い。

それを押さえながら、なんて力だったのかと今更ながらに怖くなつて、里奈はこの場所から逃げ出すことにした。

不安に胸をふさがれる前に、逃げなければ。

奈津美は今、どうしているんだろう。

今日、奈津美のうちに行っていない？

里奈は奈津美にメールを出したけれど返信はなかった。  
電話もコールはなるけれど、3回ほどで切れてしまう。  
家に電話をしても、誰も出ない。

西駅のロータリーのベンチで待ってる。気が向いたら来て。

駅で里奈は電車を待ちながら、しょんぼりと携帯電話をバッグにしまった。

きつとこのメールにも返信はないだろう。  
制服のまま、このまま、奈津美が利用している駅まで行くことにした。

家に戻ってバッグを乱暴に放り投げた英彰は、着替えて時計を見

る。

今夜は塾がある。

宿題は済ませてあるから、このまま出かけても問題はない。

腕時計をはめながら、里奈にからかわれたことを思い出しで、口元を歪めてしまう。

ダイバーじゃないのに、ダイバースウオッチ持ってるのヤダ。つまらないこと言いやがって。

あれから奈津美に電話をすると奈津美は、沈んだ声で先に帰っちゃってごめんねと真っ先に言った。

里奈の言うとおり、奈津美は聞いたか見たかしたのだろう。

英彰と里奈のやり取りを。

しかし、あれだけの大声だったのだから、奈津美が気がつかないほうがおかしい。

奈津美に家に来てと言われたことが、意外だった。

鮮やかだった空の色が、曇り始めるとともに空気はますます湿り気をふくむ。

雨の前の匂いがした。

腕にまとわりつく不快感そのもの。それを感じながら改札口を出た英彰はふと足を止めた。

駅からわずかに離れた、ロータリーの敷地内に、東屋を模倣したような建物がある。

老人と女子高生が向かい合うように座って、女子高生は英彰の高校の制服。彼女はこちらに背中を向けていた。

里奈に似ていると思った。

けれど、髪形が違う。今日はひとつに編みこんでいたのに、後姿の女子高生は髪を解いている。

遠目に見ているから見間違っただのと、英彰は頭に手を置いて自分

に呆れながら歩き出した。

奈津美と一緒に出かけたと、家まで送ったことが数回ある。彼の足取りは不思議なほど冷静で鈍ることがない。

そんな自分の冷淡さを英彰はいささか苦々しく思いながらも、奈津美になにを言われても聞きいれようと思っっている。

責められても仕方ないことをした。責められたほうがむしろほっとする。

玄関のドアを開けてくれたのは、若い女性だった。

奈津美にはひとり姉がいて、亜季美とかいう名前だった。

彼女は奈津美とは異質な雰囲気の詳細の美人で、英彰を見るなり、にこりと笑った。

「真崎君？」

「はい」

「奈津美、お客さんだよ」

彼女は上を向いて大きな声を出す。

そして、英彰を手招き、中に入るように言った。

奈津美が階段を下りてくる。

静かに足音がしないほど、恐る恐る。

そして、自分を見上げている英彰と目が合つと、ウサギみたいに赤い目をこすりながら英彰にぎこちなく笑いかけてきた。

「上がった」

亜季美がどうぞ、英彰に言う。

「お邪魔します」

低い声。英彰は居心地の悪さを押しやるように奈津美をもう一度見上げた。

すると奈津美はくるりと背中を向け、階段を昇り始めてしまった。

女の子らしい部屋だった。色も置いてある家具も何もかもすべてカーテンの色がパステルピンクで、奈津美らしいなと思った。

こんなにふわふわとした、女の子そのものみたいな子。

里奈でなくとも、過保護にしてやりたくなくなるかもしれない。  
ドアのところで足を止めたままの英彰に、奈津美はどうしたのと声をかける。

落ち着いた様子で、彼女は部屋の真ん中のテーブルでティーポットを傾けている。甘い紅茶の香りが漂う。英彰は彼女の前に腰を下ろした。

「はい、どうぞ」

可愛い花柄のカップを置かれて、英彰は一瞬たじろぐ。  
程よくクーラーがきいているとはいえ、この暑さに熱い紅茶。

奈津美はくすりと笑って、

「わたし、紅茶好きなんだ。落ち着くの」

「……」

「先に帰っちゃってごめんね」

奈津美の目が赤い。先刻まで泣いていたようなくらいに。  
かつて泣かせないと里奈に言い捨てたことを思い出して、憂鬱になる。

「なんで帰ったの？」

そんなことは言葉にして確認しないまでも、奈津美の目の色が物語っている。

でも、奈津美は力なくはにかんで、

「……ごめん、気分が悪くなったの。おなか痛くなっただってどうか  
意外に思いながら、奈津美を見つめた。

奈津美は見なかったふりをするつもりだろうか。

英彰と里奈のやり取りを。

ここで、奈津美の嘘を受けいれるべきなのだろうか。  
受け入れては、また同じことを繰り返すだけだ。

奈津美の気持ちを推し量るよりもまず、英彰は解放されたかった。

「野々村と話してたの聞いたから？」

奈津美の表情がこわばって、眉がひそめられる。

返事に窮しているのか、答えるつもりがないのか。

英彰は静かに続けた。

「聞きたいことはない？ 全部答えるから」  
ぴたりと。

奈津美の表情が止まった。

そして、今までには見たことがないような冷たい目を向けてきた。

「ひどいこと言うね」

「ごめん」

英彰の声も冷たかったはず。

奈津美は英彰から視線をそらして、目の前の一点を見つめながら、

「里奈と仲が悪いのはどうして？」

「できないから」

「どうしてできないの？ 前は仲よさそうだったのに」

ためらいがどうしても消えてくれない。

答えは喉まで出かかっているのに。

「……真崎は里奈が嫌い？」

「嫌いじゃないよ」

「それじゃ好き？」

ゆっくりと目を向けられて、英彰は答えるように伏目がちに視線を落とした。

向かい側にいる女の子に試されているような気がする。

喉が渇く。

「……俺は、根本に負けたんだ」

「……」

「野々村は、根本と俺を秤にかけて、根本を選んだ。だから、俺はそのとおりにした」

「里奈が真崎に伝えたから、わたしと付き合っつて返事したの」  
頷くことでYESと伝える。

突然、奈津美が笑った。

でも、笑みは一瞬で消えて、涙が溢れ出した。

「ひどいね」

「じめん」

「真崎、ひどい」

「……」

奈津美が涙をぬぐう。

ぬぐいながら、昂ぶりだした声で、

「どうしてわたしなんかとってずっと思ってた。真崎は里奈が好きだってみんな知ってるから、わたしだけじゃなくて、みんな不思議そうにしてた。でも、でも、真崎がそういつてくれたから、信じようって」

好きだとかそういう言葉、あなたはわたしにくれなかった。

付き合うよ、明日から。

そんな短い言葉だけが始まりだった。

「どうして里奈なの」

ややこしいなと英彰は思った。

里奈と関わっているから、君とも関わっている。

「親友に裏切られるキモチ、真崎にはわかんないよね」

親友。

ちくりとまた胸が痛んだ。

里奈はその言葉のために散々悩んで、振り回されて。

今日の放課後、泣いたのは奈津美のためだろう。

「野々村は悪くないよ。俺がひねくれてるから、こうなったんだから」

「親友なのに」

奈津美は首を振る。

横に振って、顔を手のひらで覆ってしまう。

英彰の目が険しくなる。

今まで申し訳ないという気持ちで、しょげていた英彰の感情を逆撫でする言葉を聞いた。

親友なのに。

確かに非は英彰にある。

ここで、奈津美が責めるべきは英彰であって、里奈ではない。

「みんな嫌い」

奈津美がつぶやく。

「里奈は真崎なんか好きじゃないよ。なのにどうして真崎とあんなふうにするの。だから、みんなが誤解するんじゃない。里奈が悪い、最初……！」

「野々村は悪くない」

奈津美の言葉をさえぎるように、強く英彰が言うと、奈津美は驚いたように目を見開いた。

「野々村は、根本を選んだんだよ」

「……」

「それが悔しかったんだ」

何度も何度も言葉にして、伝えてきた気持ちがある。

どんなに真剣に訴えても、あっさりと超えられてしまった。

だから、あの時、悔しくて。

親友だとかそういう二人に嫉妬したんだ。

「根本がうらやましかった。ごめん」

それからしばらく二人は黙っていた。

奈津美は涙も止まったように、身動きひとつしない。

息の詰まる空気の中、ドアにせつかちなノックをして、姉の亜季美が顔をのぞかせた。

二人の気詰まりした空気に一瞬たじろいだものの、

「ねえ、里奈ちゃんと約束したの？」

奈津美は困惑した様子で亜季美を見た。

「……里奈がどうしたの？」

「里奈ちゃんのお母さんから電話がかかってきているの。奈津美と会うからって、連絡したきり戻らないんだって。家庭教師の日だからって心配してるみたいよ」

「まだ帰ってないの？」

「ねえ、あんた約束していたの？」



うつん、と奈津美は上の空で答えた。

窓の外を見る。

まだ明るい日ざし。

でも、時計は午後の6時半をすぎている。

「里奈ちゃんがないしてるか、知らないの？」

「知らない」

亜季美が怪訝そうにしながらも、ドアを閉めて階段を下りていく。その足音を聞きながら、英彰はここに来るときに見た女子高生の後姿を思い出していた。

「野々村、駅にいたよ」

「……」

奈津美が唇を噛んだ。

「ひとりで、いた。根本のこと待ってるの？ あいつ」

「そんなはずない」

「どうして」

「会うなんて返事してないもの」

英彰はもう一度時計を見た。

英彰がここに来てから1時間はすぎている。

「あいつは何時間でも待つよ。そういう奴だろ」

「一体、いつから？」

「里奈とは付き合わないで」

「……何言ってるの？」

「里奈に言う。これから里奈に会う。そう言う。わたしが頼めば里奈は絶対そうしてくれるんだから」

「そんなのどうでもいいことだろ」

いらだつてそう言い放った英彰を奈津美はキッと睨んで、

「わたしのことなんだと思ってるの?!」

叫んだ後、奈津美はそのまま細かいながらも、声を荒げた。

「絶対に嫌。二人が付き合うようなことになったら、里奈と一緒にいられない。いたくないよ。里奈のこと嫌いになりたくないの、だ

から真崎お願い」

目の前で泣き崩れる女の子と、駅で見かけた後ろ姿。そんな距離を作ってしまったのは、自分だ。

「今から、野々村のところに行つてやってよ」

奈津美はうつむいたまま、首を横に振る。

「根本が行かないなら、俺が行くよ」

多分、行つても。

里奈は英彰になんて会いたくないだろうけれど。

「……さよならだよね」

奈津美がポツリと言う。

「でも、さよならなんて必要ないよね。付き合つてなかったんだか

ら」

「……」

どうして。

そんなことを言いながら、君は笑うの？

嫌味とかそういうものが伺えないような、そんな顔で。

「里奈は真崎のこと、好きじゃないよ。真崎、つらいだけじゃない」

傷つけた女の子は笑顔を浮かべて、そんなことを言う。

英彰は立ち上がる。

後ろめたさと、自己嫌悪。

重いだけの気持ちはそれで一杯なのに、言葉が出てこなくて。

「世界で一番、あいつに嫌われてるんだ、きつと」

赤い目が英彰を見上げる。

「しかたないよ、俺、そういうことしたんだから」

拗ねた顔をしていたらしい。

奈津美がくすりと笑った。

そして、何を思ったのか、英彰の前で正座をきちんとしなおしたかと思うと、三つ指なんかをついて、ぺこりと頭を下げた。

「ごめんなさい。ひどいことたくさん言って」

「えっ？ イヤ、あの」

面食らった英彰がおろおろする前で、奈津美は頭を下げたまま、  
「でも、まだ平気って言えないの。真崎の顔も平気で見られないの。  
里奈のこともだめなの。ごめんね。まだ、だめだから……ごめんね」  
胸にしみるよう。

この子のやさしいところとか、不器用に誠実なところとか。  
先刻取り乱したことでさえ、状況からすれば当然だよなと、いとお  
しく思さえする。

こんな女の子だから、里奈は大切にしたがるのかもしれない。

俺が負けたのは当然かもしれない。

俺はアホか。

うんざりしながら英彰が背中に背負い込んでいるのは奈津美への敗  
北感。

人間的観点からもそれをしみじみ味わいながら、胸を傷めながら。  
それでも英彰は走るわけで、理由は雨が降りそうだから。

先刻まで晴れていたはずの空が、夕暮れとともに嫌な感じにどんよ  
りと曇りだして、湿った風が吹き始めたから。

あの後姿が里奈であることは、英彰の中ではすでに確信になってい  
る。

駅前には夕方の帰宅ラッシュの波も引いて、商店街の終わりにある書  
店の看板に灯りがついた。

歩道脇に建っている東屋風のベンチには、女子高生の背中。  
たったひとりでそこにいる。

うつむいているのか肩は落としがちで、長い髪が風に吹かれても乱  
されるままにしている。

なんでかなあと、しんみり思った。  
なんでありつはここにいるかなあ。

もしもあの時、あの生物室で里奈に奈津美からの告白を聞かされたとき。

癩癩なんて起こさずに、奈津美に対して自分の気持ちそのままを伝えていたら。

奈津美なら一日泣いたくらいで許してくれたかもしれない。

里奈はこんなところでこんなふうな背中を丸めていなかったかもしれない。

離れたところからそれを眺めながら、つんと鼻先が痛くなるのを感じながら。

自分のことをみつともないなあと、思った。

カツコわりいとかじゃくて、みつともない。

恋をするとみんな変わってしまう。

友情が恋愛かなんて腐るほど聞かされた議論の答えは、大筋で間違っていないのだ。

結局奈津美はこなくて、それでも待つていたくて、しつこくベンチに座っていた。

今日は聡明が来る日。

なによりもどんな都合よりも最優先だった。

でも、それよりも奈津美を優先することで、奈津美にもそうしてもらえたらと半分願掛けのように座り続けていた。

そんな自分が惨めになってきた頃、夕暮れが迫って、夕立でも来そうな空になった。

鬱々と唇を尖らせて、東屋風の建物の中から雲行きを確かめようとして、里奈はぽかんとした。

「なッ……」

絶句、そりゃもう絶句。

なんでこんなところにあいつがいるんだ。

色のあせたジーンズの長い足がむかつくなあ。

二人の間には車道。

その向こうとこつちで目が合った瞬間からの数秒。

見詰めあつて呆然として、こみ上げるものを感じたとき、里奈はすつくと立ち上がった。

バッグを掴んでまるで追い立てられるかのように東屋を飛び出した。頭が逃げると言ったのではない。

身体が逃げていた。

それは本能に近い。

なぜに逃げるのだあいつは。

先刻までの殊勝な真崎君はあつという間に消えてしまつて、むっと目を据わらせてしまつた真崎君がいる。

だいたい、あいつは俺の気に障ることばかりする。

だから、あいつの前ではみつともないことばかりしてしまうんだ。

足が勝手に里奈のほうに向かつて走りだす。

ガードレールをハードルのように走るついでに飛び越えて、車が来ないの見計らいながら、車道を渡つて最短距離を。

なんでー?!

英彰がガードレールを越えた。

まったくなんて身軽なんだろう、飛び越えたというより、ひよといまたいだだけのような身のこなしで、英彰が車道を渡ってくる。

それを視界の端で捕らえながら、里奈は駅までの歩道を走つた。

ナニを必死に逃げているのか、わからないけれど、逃げなきゃと思う。

真崎英彰に捕まっていけない。

でも、英彰は俊足だから駅の改札口に突っ込むところで追いつかれた。

定期券なんて嫌い。自動改札のバカ。

「なんで逃げるの？」

肩で息を切らしながら、英彰が言う。

腕をつかまれたわけでもないのに、その言葉に捕らえられた。

脚が止まって、はあはあと乱れる呼吸を押さえる様に胸に手をあてて里奈はその場に佇む。

「なんで？ 野々村」

怒っているような声の色。

それを聞いて。里奈は唇を噛んだ。

この、バカ。

なんで現れるのよ、なんでここにいるのよ、どうしてあんななのよ。

……わたしは都村聡明の教え子です。

こんなときに聡明先生の課外授業が役に立つと思いませんでした。

痴漢に追いかけられたら、振り向いて、痴漢に向かって走りなさい。

振り返ると、怒っているというより、拗ねたような顔の少年がいた。背が高く、人群れの中でも頭ひとつ高いところにあるような彼なのに。

その後、お前はまっすぐに走りゃいいんだよ。

痴漢が不意を突かれてびびるだけじゃなくてだな、振り向かなきゃ

なんねえから、もたつくしな。

「えっ？」

面食らった顔の英彰に向かって足を踏み出した。

彼の傍らを走り抜けて、再び駅構内を飛び出した。

「この……！」

あの女！

英彰は振り返る。

こくなつたら意地だ、意地。

走り出した英彰も奇妙な目で見られていることは感じている。

畜生、マジみつともねえ。

どうして、俺はあの子を追いかけるんだろう。

可愛いから？

顔をあわせることが多い学校では、真面目そうなだけのつまんない

女じゃん。

ナマイキだから？

どうしてそんなのが理由になるんだろ。

俺のせいで泣かせたから？

俺だって泣きたいよ。

いろいろと考えてみるけれど、誰よりも真実を解かっているのは自分自身。

本気なんでしょう。

すべてはその切実さゆえの行動。  
振り向いて、振り向いて。  
振り向いてくれないなら、振り向かせるよ。

100メートルも走らないうちにあっけなく掴んだ里奈の腕。

里奈はよろけて英彰の胸にこめかみの辺りをぶつけて、小さく唸った。乱れた髪の内からのぞく瞳が怒っている。

「なんでこういうことするのよ!!」

「逃げるから」

「なんでここにいるの」

「根本に呼ばれて」

里奈はその言葉に、ショックを受けたみたいにしよんぼりとした。

先刻までの勢いがしぼんでしまって、ぺたんこになってしまったみたいに、里奈はつぶやく。

「やっぱり、友達より男か」

そんな台詞を里奈から聞くと思っていなかった英彰は一度耳を疑って、そして、しんみりと。

「……振られた」

「当然よ」

わたしも奈津美に振られちゃったよ。

「ふたりしてひどいことしたんだもん」

里奈の声は涙の気配。

雲行きがいよいよ怪しくなって、歩道の途中で立っているのはいささか危険。

女の子の涙に対する通行人の視線と、夕立寸前の空が英彰にそう警告するけれど、英彰もうつむくしかなくて、里奈の腕を掴んだまま立ち尽くしている。

彼女は声にしないで、静かに静かに泣く。



こんなふうに泣く女の子に何をしてあげられるだろう。

もしかしたら。

なにもしないことが最善かもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9591z/>

---

Babyleaf 2nd season

2011年12月30日00時53分発行